ナイトフィッシュ――ワルツは夜空で

オクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナイトフィッシュ――ワルツは夜空で

【Ｎコード】
Ｎ６８３２Ｋ

【作者名】
オクト

【あらすじ】
何処か影のある高校生宇木友和は、冬のある夜の公園で空に浮かぶ一人の少女と出会う。
翌日、鮮烈な印象（主にパンティー）を残した少女の面影が友和の脳裏にちらつく中、ホームルームの時に美少女の転校生が現れる。
彼女の名は、館林さや。
彼女こそ、友和が昨夜の公園の上空で出会った『夜空を泳ぐ者』であった。

王道ボーイミーツガールですが、パンチラが出会いなんて女の子的に許されるんでしょうか？

プロローグ――缶コーヒーとパンティーと

結び終えたスニーカーの紐が、不揃いな蝶々結びではないことを確認した宇木友和（うきともかず）は、上がり框（かまち）から腰を上げ、自宅玄関のドアを開けた。

途端に零度近い冬の夜の冷気が、友和の頬をつるりと撫でながら首筋から背中へと這い寄ってくる。

思わず「寒（さむ）っ！」と呟いた友和はネイビーブルーのジャンパーコートの襟を立てると、夜気の中で白く染まる呼気をはきながら、外に出た。

昼間が晴れていた分、夜は放射冷却によってアスファルトに白く霜が降りるほどの寒さだった。踏みしめたスニーカーの靴底越しに、ひりひりするような冷たさが伝わってくる。

一瞬、後悔の念が友和の脳裏に兆したが、ここまで来た以上は、と足早に歩き始める。

見上げた夜空には、白く瞬く無数の星々がそこにあった。

別段、友和に夜間の遊興癖があるという訳ではない。

ただ、夜の勉強の合間にトイレに立ち、小用を済ませた後に廊下の小窓から見た夜の咲倉（さくら）市の情景が、友和の心を何故だか引き寄せたのだ。

しん、と静まり返った深夜の集合住宅地。

夜の闇の中で、己の存在を可憐に示す蛍のように、街路灯が淡い光を投じている。

冬の夜空には、息を呑むほどの星の海。

そう言えば、この前に星を見上げたのはいつだったろうか？

十一月の終わりにこちらに引越しをし、咲倉市の県立高校に転校。以降期末テストに年末年始と、慌ただしく時間が過ぎた。

正月の名残もようやく体の芯から抜け落ちた今夜、友和の体は自

然と動いていた。勉強は切りの良いところまで進んでいたし、家の者は友和以外、皆寝静まっている。
すぐさま普段着に着替えると、通学に使うジャンパーコートに袖を通して外へと出た。
間もなく日が変わろうという一月十四日の夜は、想像していた以上に身を切るような寒さだった。
途中、ぽつんと寂しく佇んでいる自動販売機で缶コーヒーを買い、缶の縁の部分をつまむようにして持ちながら友和が辿り着いた先は、フェンスで囲まれた公園だった。
入り口前で立ち止まった友和は、白い息をはきながら公園を見渡す。
ごく一般的な高校生の背格好である友和の目から見ると、その公園はとても小さく思えた。
遊具も、ブランコに滑り台に砂場があるだけで、敷地の中央に一本立っている常夜灯によって薄闇の中にぼんやりと鈍い白色に浮かび上がっている。
ブランコは二つある内の一つの留め金部分が壊れているのか、木製の椅子が地面についている。砂場にいたっては、野良猫がそこで排泄をすることが衛生上問題となり、今は虎ロープとカラーコーンで封鎖されていた。
遊ぶことが出来なくなった砂場に、象の鼻のような滑り台がしょんぼりと下りている。
友和の目がその滑り台を逆に追って行き、頂上部である平面に達してから、今度は別の方向へ視線を動かした時、視界の端に何かが映った。
「何だ？」
思わず呟いたのは、何かが見えたような気がしたのが滑り台の頂上の更に上だったからだ。
足場も何もないはずの空間。
滑り台の更に上であることも考えて、地上から約二十メートル程の高さに、何かがいた。

一瞬、大きな木に引っ掛かった風船かとも思ったが、滑り台の周りにはコンクリートが打たれているので樹木の類は一切ない。
次に大掛かりな手品を見ているのかとも思ったが、こんな夜更けに友和一人を騙すだけというのはあまりに非現実的だ。
「じゃあ、何なんだよ……」
実用一点張りの黒縁の眼鏡越しに眼を凝らしながら友和が零した呟きは、戸惑いの成分が多く含まれていた。
何故なら、公園の常夜灯の範囲に届かない、星空と地上の間の闇よりも黒いシルエットとして存在するそれは、人の形に見えたからだ。
友和が公園に踏み込むことも忘れ、缶コーヒーを摘んでいる手で顔の前に庇を作った。
地上二十メートルの夜の空間に目を凝らすには、公園の常夜灯に目が慣れて逆に見え難かったのだ。
その時、滑り台の上空にいるそれは友和に気付いた。
瞬間、それは全く無駄のない洗練されたターンを空中で披露すると、猛烈な速度でこちらに迫ってきた。
上下に体を揺らすその泳ぎ方はドルフィンキックと呼ばれるものだったが、ぐんぐんとこちらに向かってくる様は、イルカというよりもシャチだった。
空中から何かが迫ってくるという、普通なら到底有り得ないシチュエーションが、友和をパニックに誘う。
首筋が粟立ち、麻痺を起こしたように全身の動きが緩慢になる。
非現実と現実との境界が曖昧になり、これは変な夢を見ているのだ、と思わず頬を指で抓る。そんな事をしている暇があるなら、「逃げろ！」ともう一人の自分が性急に告げていると分かっているのにだ。
既に滑り台の上空から友和までの距離――およそ百五十メートルの対角線を五秒もかからずに通過、いや通泳したそれの影が、死神の黒衣のように視界を覆う。
友和が咄嗟に顔の前で腕を交差させたのは奇跡であったが全くの

奇跡だったが、それの狙いは友和ではなく、友和の手にしているものだった。
それは友和の眼前で、勢いを殺さずに渦を巻くように回転したかと思うと、ぴたりと閉じ合わされていた脚の片方を真横に伸ばした。
今までの加速と遠心力を付加された回し蹴りが、友和の右手に握られていた物に向かって収束。
爆発的とも形容出来そうな脚力が、ブオンッッ、と凄まじい風切音と共に友和の缶コーヒーを遥か彼方へと蹴り飛ばした。
もっとも、その缶コーヒーが夜空に素っ飛んで行く様を友和が見た訳ではない。
別の理由で、友和の目にはある物が焼き付いてしまった。
それの、まるで回転のこぎりのように横に広がったスカートのせいで、真横に伸ばした白い素足の付け根部分、純白の園に遊ぶ可愛らしい黒ウサギ――それも人参を口にくわえている――と、友和は目が合った。
（あの蹴りを頭に受けていれば確実に死んでいたな。いや、何で缶コーヒーなんか蹴り飛ばしたんだ？　そもそもスカートを穿いてるって事は女か？　それよりも何でこいつ空中にいたんだ？）
友和の思考はもうスピードでフル回転したが、生憎全て空回りで答えなど出る筈がなかった。
何しろ、友和の脳内は黒ウサギで一色だったからだ。何処か遠くの方で、飛んでいった缶コーヒーがぐしゃん、と音を立てたような気がしたがまるで耳に入らなかった。その上、目の前の現実、それが地面に音もなく着地をして腰に片手を当て、もう片方の手の人差し指をこちらに突き付けている事すら、友和はまるで認識していない。
「壊した事、謝らないわよ。これは警告。今見た事、三十秒で忘れなさい。良い？　絶対に、誰にも言わない事。……それから、気を付けて帰りなさいよ。ボーッとして、途中であなたが車に轢かれても、私は知らないからね」

それはふうっ、と一つ息をつくと、くるりと友和に背を向けた。それから、スカートのプリーツと長い黒髪をなびかせながら、足早に夜の闇の中へと走り去って行った。

軽快な足音が遠ざかるに連れて、友和はそれが自分と歳も変わらない少女だった事に気付く。それも、相当な美人の。

しかし、何とか顔を思い出そうとしても、常に友和の脳裏に浮かぶのは、白地に黒ウサギがプリントされたパンティーだった。

プロローグ――缶コーヒーとパンティーと（後書き）

先に投稿した『雷火と白梅』とは違い、こちらは既に完結しています。時間を見て、順次投稿しようと思っています。

『雷火と白梅』共々、ご評価、ご感想をお待ちしております。

彼女の名は

翌朝、律儀な目覚まし時計に叩き起こされた友和は、普段の数倍重たい目蓋を擦りながら朝食を取り、地元の高校へと向かった。

途中、睡眠不足が祟って、集団登校中の小学生達の列にふらつきながら近付いてしまい、引率中の高齢な白髪男性が目を剥いた。

大慌てで友和は身体を起こし、愛想笑いを浮かべようとしたが、ランドセルにリコーダーを挿した小学生男児にくすくす笑われ、いたたまれない気持ちになって足早にその場から去った。

夢が記憶に永く留まることはないのと同じように、どうにか高校に辿り着いた友和の脳裏には、昨夜の出来事は霞がかったように曖昧になっていた。

ただ鮮烈に覚えているのが黒ウサギのパンティーで、そのことを思い出すとどうも顔の締りが悪くていけない。

教室に到着するや自分の机の上に両腕を投げ出して枕にし、うつ伏せになった友和が煩悩と断続的に続く眠気に苛まされていると、俄かに教室内がざわめいた。

がらり、と教室の扉が開かれる音がする。

途端に、教室の空気が水を打ったように静まった。

友和のクラスの担任である相坂(あいさか)が、何とも平坦な口調で何やら話している。だが、友和は煩悩以上に強大な存在へと昇格した睡魔に襲われて、それどころではなかった。

「……えー、と、まあ、簡単に言うとお前達の新しい仲間として、……ゆ、さんが来た訳だ。こんな時期に、と思うが、皆仲良くするように……ん？　んん、おい、宇木、お前ホームルームから何を居眠りしてるんだ！」

相坂の声を既に夢の出来事として捉えている友和は、自分が指摘されていることに気付かず、机にうつ伏せのまま心地良い夢現(ゆめうつつ)状態にいる。

気を利かせた近くの席のクラスメートが友和の肩を揺する。
途端に友和の世界が現実へと引き戻され、状況を認識しようと寝ぼけ眼をぱちくりさせる。
その様子がどうにも間が抜けていて、クラス中がどっと沸き返った。
唯一、相坂だけが苦虫を五匹程噛み潰した顔をこちらに向けているが、どうしてそういう顔をしているのか、友和には分からない。
その相坂の横に、見慣れぬ少女が立っていた。そもそも制服がこの高校のデザインとは異なっている。
友和の高校の制服が少し明るい色調の都会的なものに対し、少女の制服は全体的に黒を基調とした、簡単に言えば野暮ったかった。
しかし、彼女の容姿はそれを補って余りあるほどに奇麗で、整っていた。
色白の肌にくっきりした目鼻立ちで、鮮やかな紅色の唇がちょっと緊張しているのか強めに引き結ばれている。髪の毛は一度も染めたり色を抜いたりしていないのだろう、艶のある長い黒髪だ。
彼女の大きな眼が、じっと友和に注がれている。
友和も、何が起きているのか分からないまま、ただ少女を見つめていた。
と、事態を呑み込めていない友和に業を煮やしたのか、相坂が人差し指をこちらに突きつけ、
「おい宇木！　こちらの転校生に自己紹介しろ。それも起立してだ。分かったか？　分かったなら返事しろ！」
そう言ってきた。
（転校生？　……ああ、だから初めて見る顔なんだな……。しかし、相坂の奴、朝からうるさいな……。でも、ホームルームの時間に寝てたのは確かだし、さっさと終わらせよう）
そんな調子で友和は「はい」と返事をしながらも面倒くさそうに席から立つと、
「えっと、宇木友和です。俺も、去年の十一月に咲倉市に引越して

きたばかりです。この高校での経験は短いですが、よろしくお願いします」

自己紹介に付け加えて自分も引越し組だということを口にすると、友和は「よろしくお願いします」のところで一礼し、さっさと着席した。

教壇にいる相坂は、友和の自己紹介が短すぎて何か不満のようだったが、もうすぐで一時限目が始まることを意識してか、隣の転校生にあれこれ指示した後にすぐに教室を出て行った。

調度入れ替わるようにして、友和のクラスの一時限目担当で現代国語を教える女教師の津山（つやま）が教室に入ってきた。

津山は、教壇にいる見慣れぬ女子高生に一瞬驚いた顔をしたが、女子の何人かが「転校生のたてばやしさんです」と教えると、どういう字を書くのか誰ともなく尋ねた。

そう言えば、友和はこの転校生の名前を知らない。相坂の奴が言っていたような気もしたが、夢現のことだったので全く覚えていない。

黒板には、真ん中より少し右寄りに黒板消しで消したような跡がうっすらと残っている。あそこに転校生が自分の名前を書いたのだろうか。

おそらく神経質な相坂のことだから、黒板が授業以外のことに使われるのが嫌で、クラスの生徒が皆彼女の名前を覚えただろう頃合に、自分で消してしまったのだろう。

お陰で友和だけが彼女の名前を知らないのだが。

転校生は白いチョークを手にすると、

――館林（たてばやし）、さゆ――

と、小さいが丁寧な字で名前を書いた。

友和の席からでも、転校生の名前を見えた。

（館林さゆっていうのか……）

友和が転校生の名を心の中で口にすると、黒板から振り返った彼女と再度目が合った。
転校生は暫く――それでも数秒の間、友和を見つめたまま、不意に唇を動かした。
声にしてはいないのだろうが、友和にはそれが自分の名である「宇木友和」を暗唱しているように見えなくもなかった。

それから四時限目までの授業を終えると、友和は食堂へと向かった。
パンにするかうどんにするかはたまたカレーにするか、廊下を歩きながら考えていた友和が、食券の販売機の前に長蛇の列が既に出来ているのを見て、パンを買おうと購買部の方へと向かう。
そこで今度はどのパンを買おうかと再び考え始めた時、不意に背中を押されて背後を振り返った。
そこには友和のクラスメートが三人、何やら含むような笑みを浮かべて立っていた。
別段、話をしない間柄ではないが、それでも親しくしている訳でもない。話しかけられたら応えるぐらいの関係だ。
「何だよ？」
友和が尋ねると、野球部か柔道部なのだろうくりくりのいがぐり頭の男子生徒――確か江藤（えとう）という名前――が、ある一点を指差した。
友和はどういう事か分からず「ん？」という顔をする。
すると江藤が、指差した方角を何度も突くような仕草をしたので、友和もそちらの方へと顔を向ける。
そこには、友和のクラスメートの女子生徒一団が、転校生の館林さゆを囲んで一緒に食事をとっていた。
お喋りに花が咲いているのか、賑やかそうな笑い声が聞こえる。
女子が仲良しグループで一緒にお昼ご飯という光景は、この時間なら食堂のそこかしこに見受けられる。
しかし、館林を含むそのグループは、滅多にいない転校生の美貌

のお陰かそこだけ光が強めに当たっているような華やかさがあった。
無論、その光が最も強く降り注いでいるのは、他ならぬ館林さゆだ。
「お前、何ホームルームの時に自然とアピールしてるんだよ。ええ？　ああいう美少女系がタイプだったのか、宇木」
暫しその存在を友和が忘れていた江藤が、からかうように言った。
言っていることが分からないので、友和は口を開いたそいつに顔の正面を向ける。
すると、そいつはおどけたように「おおっと！」とか言いながら両手の平を前にして、数歩後ずさってみせる。
（何だこいつ？）
不審な気持ちが、友和の口を幾分攻撃的に開かせた。
「一体何の用だよ？　俺に言いたい事でもあるのか」
「そう怒んなって。まあ、俺たちもこいつに乗せられたとこあるんだけど」
そう言って、比較的体格の良い男子生徒が江藤にヘッドロックをかける。江藤は「うひー！」とか変な悲鳴を上げている。
間違いなく柔道部に所属しているだろうその男子生徒――こいつは崎山（さきやま）だったはず――は、ヘッドロックを極めたまま、
「ほら、宇木って去年転校してきたばっかでさ、あんまり俺たちもお前がどういう奴なのか、まだ知らなくてさ」
と、言った。更に、
「第一、宇木だって悪いんだぜ。何かお前、ちっとも周囲に溶け込もうとしないじゃんか。軽く、空気読めない奴じゃないか？　って言われてるんだぜ」
崎山の横に立つひょろりと背の高い男子生徒――千倉（ちくら）だったような気がする――にそう言われ、友和は面食らった。
「……いや、だから何だよ」
友和としても、いきなりそんな事を言われる義理はない。
その事が顔に出たのか、目の前の連中は取り繕うような感じで本

題に入った。
「いやいや、そんなお前がさ、あんな美人に『自分も同じ転校生だ』なんて言ったものだから、どういう事ですかこれは？　って具合な訳よ」
　ようやく江藤を解放した崎山がそう言った。
やっと友和は理解した。
　友和が朝のホームルームに言ったことが、転校生の館林について何かしら好意を持っている現われなのでは、と感じ取ったらしい。
　クラスでもやや浮いた存在の友和が、美人の転校生に最も早い自己アピールをしたという事で、何らかの衝撃をクラスの男子連中に齎したようだ。
　友和本人としては、「やれやれ」と思わざるを得ない。
「そんな事ない。ただ口が滑っただけだ」
　友和は正直に話す。第一、あの時はとても眠くて自分が話した内容なんてろくに覚えていない。
「本当かよ？」
　江藤が、首の辺りを擦りながら斜め下から見上げてくる。
　バリカンが下手なのか、よくよく見ると頭がとらになっていた。
「お前ら、そんなに館林が気になるのなら、直接声かければ良いだろ？」
　そう言うと、江藤が固まった。他の二人も「それは、アレだ」と言わんばかりに互いの顔を見回す。
　何となく、こいつらの魂胆が見えた。
　立場が近い友和が先鋒を切って、美人転校生と接触をはかる事で、他の男子生徒達も話し掛けやすい雰囲気を作って欲しいのだろう。
　勿論、友和はそんな事は御免だ。
　連中に背を向けて、今は何時だろうとズボンの後ろポケットから携帯電話を取り出し、文字盤を見る。空腹が、痛いぐらいに胃をせっついていた。
　その時、不意に北風を吹きつけられたような寒気を首筋に覚えた。

ぶるりと背中一面の皮膚が総毛立ち、ワイシャツの下のインナーを内側から押し上げる。
急速に視野が狭まり、まるで自分が暗いトンネルに放り込まれたような錯覚がする。
暗い視界のずっと先で、テレビ画面に映る遠い国の風景のように、自分が手にしている携帯電話の文字盤が見えている。
デジタル表記の文字盤は、正確に秒を刻んでいた。

１２時５３分１６秒……１２時５３分１７秒……
……１２時５３分１８秒……。

非常に、ゆっくりと。
自分の手の平にあるその重さをリアルに感じているのに、決して警察にも家の電話にも繋がる事はない、携帯電話。
（俺、殺される！？）
映画や漫画、ゲームの中の登場人物しか感じないであろう紛れもない殺意。
文字盤に刻まれる一秒一秒を冷たい泥の流れのように肌で感じながら、友和は殆ど本能的に、殺意を放ち続ける根源へと顔を向けた。
銅みたいにがちがちに固まった首を、ぎりぎりと筋肉を軋ませながら捻じ曲げ見た先には、――館林さゆが、いた。
トンネルのように見えている視界のせいで、友和はこの世界には自分と館林の二人しか存在しないと実感する。
しかも、世界に二人しかいない人間の片方は、もう片方を殺そうとしている……。
大きな眼が、冷たい夜に浮かぶ月のように、冴え冴えと輝いている。
「――おーい、どうした宇木？　何固まってんだ？」
江藤が、冗談半分に気安く肩でタックルしてきた。
衝撃が伝わり、友和の視界がぶれる。

瞬間、解き放たれるように、友和の身体は自由を得た。
両目を瞬かせて、友和は状況を認識する。
（ここは高校の食堂で、今は昼食時の１２時……５３分になったばかりか）
友和はきょろきょろと周囲を見回したり自分の携帯電話の文字盤を確認すると、ごくりと生唾を呑み込んでから、もう一度転校生を見た。
そこには、平然と先程と変わらず穏やかな表情で女子生徒達と喋っている、館林の姿があった。
彼女はこちらには顔を向けていない。では、さっき友和が見た館林の眼、人の温かさがまるでない眼は何だったのだろう。
「おいおい、やっぱりお前、あの美人に興味があるんじゃないかよ」
江藤がにやにやして言うが、友和の耳には全く入る事はなかった。
と、転校生を囲む女子生徒達も友和と江藤等を含むクラスメイト男子一団がこちらを見ている事に気付いたのか、数人が友和達の方を見て指を差したり笑ったりしている。
横にいる江藤が、「おーい」と陽気に手を振ってみせた。
途端に女子達がきゃあきゃあと沸き立った。そして、その中の一人が館林に耳打ちしている。
すると館林は「何ですか？」という風に友和の方を見た。
いや、友和を見ようとする。
咄嗟に友和は、切り揃えられた前髪を揺らしてこちらを見遣った館林から顔を背けると、その場から足早に歩き出した。
背中に、紛れもない転校生の視線を感じながら。
何も買っていない事に気付いたのは、自分の机に着席して五時限目の始業のチャイムを聞いてからだった。

工事現場で二人きり

今にも喚き散らさんばかりの空腹のお陰で、友和は館林さゆの事をあまり考えずに残りの授業を過ごす事が出来た。

帰りのホームルームをじりじりした思いで待ち望んでいた友和は、相坂のやる気のない礼が済んだ後、清掃当番ではない事を幸いに飛ぶようにして教室を後にする。

自分でも何故こんなに気持ちが急いているのか分からなかったが、とにかく今は少しでも早く学校から、いや、あの転校生から離れたかった。

途中コンビニに入ると、サンドイッチと５００ｍｌの炭酸系のジュースを買う。

レジで支払いを済ませ、コンビニを出るとすぐさまサンドイッチを包装しているビニールを破り、薄いパン生地とそれに挟まれているハムとタマゴのサンドイッチを貪るように食う。

ものの十秒でそれを胃の中に収めると、次はペットボトルのキャップを捻って開け、中身を一気に喉に流し込む。

胃の中で炭酸が弾けているかのようで、ようやく友和は一息ついた。

空腹の虫はまだ不満がっていたが、家に着くまではどうにか我慢してくれるだろう。

サンドイッチの包装ビニールとレジで受け取った半透明のビニール袋をコンビニのゴミ箱に入れると、炭酸ジュースのペットボトル片手に歩き出す。

時々、ぴりぴりと舌に心地良い炭酸を飲みながら、今日の事を――転校生の館林さゆの事を思い出す。

満腹からは程遠いがそれでも食欲が満たされるというのは大したもので、今の友和は昼食時から帰りのホームルームまでの常に切迫していた自分を、冷静に振り返る事が出来た。

（あの転校生、だよな）
心の中で呟く友和。
無論、館林さゆの事だ。
朝のホームルームの終わり際に彼女が自分の名を呟いたように見えた事、そして昼食時の食堂で感じた殺意と、あの眼。
だが、それが何なんだという気持ちもある。
別段、彼女が友和に何かしてきた訳でもないし、そもそも今日初めて会ったばかりなのだ。
江藤達に言わせれば、友和があの転校生に気があるという事なのだろうか。
「いや、それは……ないだろ」
思わず呟く友和。
確かに、館林は滅多にいない美人だ。もしかしたら、咲倉高校の女子生徒全員の中でも指折りの美少女に入るだろう。
しかし、そんな事は友和には全く関係ない。
（関係、ないんだ。俺には）
まるで自嘲するように、友和は苦笑を浮かべながら顔の片側を右手で覆う。
建設途中のビルの工事現場が左に見えてきた。
今日は工事が休みなのか、平日は正面で立っている筈の誘導の警備員の姿もない。
「大変ご迷惑をおかけしております」とヘルメット姿の作業員が頭を下げているポスターを横目にしながら、友和はそこを通り過ぎようとする。
瞬間、歩道と工事現場を仕切る灰色のシートの切れ目から、にゅっと腕が突き出て友和の腕を掴むと、凄い力で引っ張り込んだ。
悲鳴も何も上げる事が出来ず、友和の視界が一変する。
それまで夕暮れの淡い橙色に満たされていたのが、急に工事現場内の暗がりに引っ張り込まれたので眼が眩んで仕方がない。
まるでしつこい眠気を振り払うように、幾度も瞬きを繰り返した

友和の目線の先には、今日出会ったばかりの転校生、館林さゆが立っていた。
鉄筋やら何やら色んな物が剥き出しの工事現場を背後にして、館林の制服はやたらと浮いて見えた。
状況からすると、ここに引っ張り込んだのは、目の前にいる転校生のようだ。だが、どうして？
「どういう事？」
口を開くや、館林は冷淡な調子でそう言った。
（どういう事？　何がどういう事なんだ？）
友和は訳が分からない。
「は？　それは俺が聞きたいぞ。お前、館林だよな。どうしてこんな事するんだよ？」
頭の片隅で、この転校生に自分が抱いていた恐怖感やそれに類する感情が掠めたが、真正面に立った事で彼女との身長差を実感し、その事が友和にある程度の心の余裕をもたらした。
館林さゆは、かなり小柄だったのだ。
と、思っていた矢先、上目遣いに見上げる彼女の双眸が、きん、と冷たい輝きを帯びたように見えた。同時に、黒かった瞳がすうっと紅（あか）く染まって行くのが分かった。
瞬間、友和の生物としての本能が、館林に対して両手で白旗を振っていた。
「――今、質問しているのは私。あなたは、私に聞かれた事だけに応えて」
「……は、はい」
素直に応えてしまった友和。蛇に睨まれた蛙とはこういう事かと、生まれて初めて理解する。
転校生は腕組みをして友和の前をゆっくりと行ったり来たりする。それから不意に立ち止まると、右手の人差し指を友和に突き付けた。
「あなた、携帯電話を二つ持っているのかしら？」
「……いや、これ一個だけ」

促された訳ではないが、友和は携帯電話を尻のポケットから取り出していた。
館林は友和の携帯を一瞥した後、言葉を続けた。
「……そう。じゃあ、どうしてそれがあなたの手元にあるの？　あなたの携帯電話は、昨日、壊れたはずよ。それとも、深夜に携帯電話のショップで買い直した訳？」
思わず首を傾げる友和。本当に、館林の言っている事が分からない。
そんな友和に苛立ちを隠そうともせずに、館林は再び忙しく行ったり来たりを繰り返す。
そして、唐突に友和の前で足を止めると、決然とした表情で向き直り、
「――それでは、昨日の夜にあの公園で、私が蹴り飛ばしたものは、何？」
と、言った。
（昨日の夜にあの公園って……、俺は何をした？　いいや、俺は何を見たんだっけ……）
昨夜の事を、友和が思い出そうとする。
さほど時間が経っている訳ではないせいか、頬を切るような夜の冷気の感覚と共に、公園の情景が友和の脳裏に甦った。同時に、あるモノが鮮烈なまでに記憶の底から想起されて、友和はぽつりと零すように呟いた。
「……ウサギのイラストが入った、パンツ」
二人の間に沈黙が降りた。
館林は友和が口にした事の意味が分からず、瑣末な事として聞き逃していたが、その途中で急に頬に赤みが差した。
「――何よそれ……どういう事？」
声の調子を落として館林が訊ねる。
友和には、目の前の転校生が相当の自制心を払っているように見えた。

半ば友和は気圧されるように、
「……いや、俺の缶コーヒー蹴っ飛ばされた時、見えたんだよ。白いパンツの生地に黒いウサギが人参咥えてるのが。我ながら凄い動体視力って……あれ？　お前、今蹴っ飛ばしたって言ったよな。それって」
そう言ってから、気付いた。
目の前に立つ館林がわなわなと震えている。
「……缶コーヒーですって？　カメラ機能付きの、携帯電話じゃなかったの……。じゃあどうして、缶コーヒーを顔の前に持って行くような紛らわしい真似したのよ」
「あれか？　あれはただ夜の公園に浮かんでいる何かを良く見ようと、缶コーヒーを持っている方の手をこうやって、て、うぉ！」
昨晩の事を実演して見せる友和を黒い前髪の間から見上げていた転校生の眼が、灼熱の怒りを放っていた。
一歩、館林さゆが友和へと踏み出す。
一歩、館林さゆから友和は後退った。
更に数歩館林が前進し、同距離を友和は後退した。
暫くの間、傍から見ると奇妙な二人の行動が続いたが、友和の背中に固い物が当たって振り返ると、工事現場作業員の休憩所であるプレハブ小屋の壁にまで追い詰められていた。
更に一歩、館林が詰め寄る。
友和には、もう逃げ場がない。ひしっとプレハブ小屋の薄い鉄板の壁に背中を押し付けるだけだ。
「宇木友和……」
館林の声が、死刑執行人のように冷たく恐ろしく聞こえる。
「は、はい……」
他に応えようもなく、至極丁寧に応じる友和。
館林の両腕が伸びて、友和の胸倉を掴み上げると、ぐんと自分の顔に引き寄せる。その勢いで顔からずれた眼鏡のレンズ間近に、館林の端整な顔があった。

館林はすぅっと一息吸い込むと、
「忘れなさい忘れなさい忘れなさい忘れなさい！　絶対絶対、この事誰かに言ったら酷い目に会わせるわよ！　本当に酷い目に会わせるんだから！　覚悟しなさいよ！」
そう矢継ぎ早に言い放った。
「……な、何をかな？」
斜めになっている眼鏡を直しながら友和はそう言った。
実際、友和は転校生が言っている『この事』が全く分からなかったのだが、彼女にはどうやらもったいぶっているように映ったらしい。
「あなた、いい加減に！」
苛立ちと羞恥（しゅうち）で顔を赤く染めた館林の右手が閃きかけ、友和の頬を叩く寸前で止めると、大きく一度息を吐いてから、
「……私のパンティーと、私が夜に空を泳ぐ者だという事」
そっぽを向いて呟いた。
そして友和も、館林さゆと昨夜の公園で見た空に浮かぶ少女が同一人物であると、漸く認識した。
「……そうか、あの時のウサギパンツの空飛んでた女、お前だったのか」
「……こんな馬鹿でエッチな奴に私の……もう、死にたい……」
館林は両手で顔を覆うと、弱弱しく呟いた。
先程までの威勢が消失したように、館林さゆの小さい身体が更に小さく見える。
それを見た友和は、自然と口を開いていた。
「あ、あのさ……」
「何よ！」
両手を顔から離し、挑むような表情で睨む館林に友和はたじろぐ。だが、口は何かを伝えようと、もごもご動いている。
「何！　何なの、はっきり言いなさいよ！　男らしくない奴ね！」
「い、いや、俺、別に誰かに話そうなんて思ってはいないからさ」

「そんな事を言って、私を脅そうとかそういう事だったら……」
館林が次の言葉を言うよりも先に、友和が言葉を放った。
「だから、お前の秘密、空に浮かぶとかそういう事は黙っておくから」
「……」
館林の両眼が剣呑なまでに輝いて、突き刺すように友和に注がれる。
その時、友和は自分の中で常にぶれていた何かが、かちり、と音を立てて合わさるのを確かに耳にした。
「――嘘じゃない」
館林の瞳を真っ直ぐに見詰めながら発した友和の声は、自分の口から発せられた物とは思えないぐらいに重く質量を伴っていた。
館林も友和の口からそういう声が出た事が意外だったようで、眼から険が取れていた。
「第一、そんな事を他の人間に言ったって寝言を言ってるとしか思われないし、俺、間違いなく変人扱いされるぜ？」
友和の言葉が正鵠（せいこく）を射（い）ている事を察したのか、館林は漸く落ち付きを取り戻した様子で「それもそうね」と言った。
「助平で頭悪いとか思ったけど、常識はあるようね。だけど、その常識の世界に生きていたいのなら、決して誰にも喋らない事。もし、喋ったのなら」
「喋らないさ、約束しても良い」
友和のきっぱりとした口調に、館林はきょとんとした顔になる。
友和は館林さゆの顔を見詰めながら、言葉を続ける。
「誰にも喋らない。誓うよ。……それに、今の世の中もっと変で血生臭い事件が多すぎる。……それに比べれば、ずっとましさ」
少しの間館林は、友和の言葉にどれだけの誠実さがあるのか判断しかねているようだったが、やがて口許に小さな苦笑を浮かべた。
「ましかどうかは分からないけど、人とは思えないような酷い事件が多すぎるっていうのは同意するわ。取り敢えず、あなたを信じて

みる……。じゃあね、宇木君」
そう言って館林が背を向けてその場から去ろうとした時、
「館林、お前どうやって空に浮かぶんだ？」
友和が訊ねた。
すると、館林は小馬鹿にするように鼻をふん、と小さく鳴らすと、
「違うわ。――私は泳ぐの。夜をね。そういうものなのよ」
立てた人差し指をふりながら、まるで嗜めるように言った。
「夜を、泳ぐ……か。ナイト、フィッシュ……。格好良いな」
「格好良いって、やっぱりあなた、少し変わってるんじゃないかしら？」
そう揶揄するように言いながらも、友和を笑い者にしているような陰湿さはない。
「そうか？　ナイトフィッシュって、格好良いと思うんだが」
館林は思わず、声を出して笑った。
「な、何だよ？　俺、そんなにおかしい事言ったか？」
訳の分からない友和が訊ねると、館林は更なる笑いの発作に見舞われたように、お腹に手を当ててくの字になった。
館林の澄んだ笑い声が、工事現場内に響き渡る。
「ちぇ、本当に俺、馬鹿みたいじゃんかよ……」
一人笑いの虜と化した館林を前にして、友和が何とも言えずに呟く。
と、ようやく発作から立ち直ったのか、うっすらと涙さえ滲ませている館林が口を開いた。
「だ、だって、あなた、全然私の事を驚かないんだもの。その上自分で勝手に名前なんか付けちゃって。何？　夜の魚（ナイトフィッシュ）？　やだやだ、思春期真っ盛りって感じで聞いてる方が照れちゃうわ」
「……何か、ひでえ事言われたような気がするのは俺だけか？」
仏頂面になって友和が言う。
「ご、ごめんなさい。私、自分の事をそういう風に言われたの初めてだから……、笑ったりして本当にごめんなさいね」

流石に悪いと思ったのだろう、館林はどうにか笑いを引っ込めて謝る。それでも、時折唇の端をひくひくさせているのは、まだ笑いの余波が残っているからなのだろう。
（館林って、こんなに笑うんだな）
友和は意外な気持ちに打たれる。
転校初日で色々な顔を見せる館林――もっとも友和は昨夜に会っているのだが――に、お互いの距離が近付いたように感じた。
だから、
「いや、確かに人が空に浮かぶなんてとんでもない事なんだろうけれど、それよりもパンツのインパクトがすご過ぎてさ――」
ぽろり、と友和は口にしてしまった。
途端に、館林の顔が暗黒に染まる。
（やべっ）
自戒するも時既に遅く、友好的だった雰囲気が一気にツンドラ大地の極寒並みに凍り付いた。
館林が、雪原のダイヤモンドダストを思わせる絶対零度の眼差しで、
「……私の力はもとより、私の下着の事……誰かに言ったら、……殺す、から」
やたらと「殺す」を強調すると、そのままそっぽを向いて去って行った。
館林の豹変振りについていく事が出来ず、一人取り残された恰好の友和だったが、何とも言えずにぽりぽりと頭を数回掻いた後、腹がぐーっと鳴ったので自分も帰路に向かった。

夜空への招待

その日の深夜、咲倉市はビロードに包まれたような静寂に満ちていた。

宇木友和は、またも興味本位であそこの公園に向かっていた。

果たして、そこには館林さゆがいた。

「よう」

友和が手を上げると、館林は少し驚いた顔で振り返った。今日は、まだ空中に浮かんではいない。

「また、私がいると思って来た訳？」

窺うような表情で言う館林に、

「いや、昨日の夜と同じで、綺麗な夜空だと思ってさ。散歩の途中に寄っただけ……それだけで寒くないのか？」

逆に友和が訊ねる。

確かに、館林の恰好はハーフコートを上に羽織っているだけで、コートの裾から覗いている素足が寒そうだった。

「着込むと上手く泳げないのよ。私だって寒いわ」

「そういうものなのか。まあ、これやるよ。まだ熱いから気をつけてな」

友和はそう言うと、コートのポケットから缶コーヒーを取り出して館林に手渡す。

「何これ？」

慎重に両手で缶コーヒーを受け取った館林が、子どもっぽい顔になる。

「いや、寒いだろうから」

「あなたの分は？」

「ここにある」

友和は、もう片方のポケットから二本目の缶コーヒーを取り出す。

苦笑する館林。

「用意が良いっていうか……もし私がいなかったら、一本余るじゃない」
「いや、自動販売機で当たりが出たんだ。そもそも、もう一本は持って帰るつもりだったし」
「……そうなの？」
「うん」
館林が何か言いたそうな顔をしたが構わずに、友和は近くにあったベンチに腰掛けてプルトップを開ける。
飲み口からコーヒーの芳しい香りが湯気と共に立ちのぼる。
口を付けようとすると、館林も手にしている缶コーヒーを開けたのか、カコッという音を聞いた。
そちらに顔を向けると、館林が缶コーヒーを一口飲んでいる最中だった。
こくり、と白い喉を動かしてコーヒーを飲み込んだ後、「ほうっ」と白い息をついた。
「美味(おい)しい……」
まるで感銘を受けたような口調で館林が呟いたので、友和は照れ臭くなってしまった。
「おいおい、只の缶コーヒーだぜ。一個百二十円の」
「私が美味しいと言ったんだから美味しいのよ。……普段、缶コーヒーなんて買った事なかったから、ちょっとびっくりだわ」
館林は味わうように缶コーヒーを飲んでいる。
「それはどうも」
友和も缶コーヒーを口に含み、熱い液体を飲み込む。喉から食道、胃へと熱く黒いカフェインの塊が滑り落ちて行って、何とも言えない至福を体の芯に齎(もたら)してくれる。
確かに、この缶コーヒーは友和もお気に入りだ。
それも、今夜のように凍て付いた夜中に、星空を見上げている時にはたまらないものがある。
煌く真珠を散りばめたような星空を見上げていると、横に館林が

座った。
視界の端に、館林の吐息が白くけぶっている。
気にせずに缶コーヒーの残りを飲んでいると、
「宇木君は、私の事を聞かないのね」
そう言った。
友和は横を振り返らずに、
「聞いたら教えてくれるものなのか、そういうのって」
最後のコーヒーを飲み干した後、訊ねた。
「いいえ。普通はしない……いや、絶対にしないわ」
「だろ。だから、聞かない」
「……私の事、おかしいと思わないの？　宙に浮かぶのよ？　空を飛ぶのよ？」
「泳ぐ、だろ。そう言い正さなかったっけか？」
「……そう、ね。私は、夜の空を泳ぐ一族……」
館林の方を向いた友和の口に、自然と笑みが浮かんだ。
「なら、それで良いじゃないか。館林は夜の空を泳ぐ一族ってやつで、俺は大地を歩く人間の一族。異種族同士、仲良くやろうぜ」
何の気負いもなくそう言い放った友和を見上げる館林の顔に、衝撃の波紋が走ったかに見えた。が、それも一瞬で彼女はきゅっ、と手にしている缶コーヒーを握ると俯いた。
「館林？」
「そんな事言われたの、初めてよ……。そう、ね……宇木君には特別に、この缶コーヒーの分だけ、私の事を教えてあげても良いわ」
缶コーヒーをベンチに置くと、館林は立ち上がって友和の方を向いた。
「良いのかよ？　掟とかしきたりとか、タブーとかあるんじゃないのか？」
「缶コーヒー一本分、たった百二十円だったら構わないわ」
そして、悪戯っぽく微笑んで、
「――私の凄さ、教えてあげるから」

そう言うと、友和の右手を取って――二人は夜の空を泳ぐ存在となった。
いきなりの浮揚感に、友和は激しく戸惑い、館林の手を強く握る。
「ちょっと痛いじゃない！　優しく掴みなさいよ」
「わ、悪い……」
ばつが悪そうに言いながらも、友和はさゆの華奢な手を両手で掴んでいる。
そうしなければ、既に高校の屋上程の高さにいる友和は怖くて仕方がなかったのだ。
立ち泳ぎをするかのように館林が左右の足を前後させる度に、みるみる高度が増して行く。平均的な男子高校生の体格の友和を片手一本で軽々と引っ張っている館林を見ると、腕力とは異なる別の力が働いているのだろう。
そして、ある程度の高さまで来ると、館林は脚を止めた。
「大体、これで地上二百メートルってところかしら。どう？」
「ど、どうって？」
半ば上擦った声で友和は応える。
友和の眼下に映る光景はまさに夜の鳥瞰図で、立ち並ぶ家々に灯る室内灯が、夜の咲倉市に映えている。友和達がいた公園は、見下ろすと名刺程の大きさでしかない。そもそも足元が不確かな事この上なく、この高さから落下した場合は間違いなく即死だという現実だけが、友和の頭をがんがんと揺さぶっている。
「感想を聞こうと思ったんだけれど、それどころじゃなさそうね。顔、凄い汗よ。でも、そんなに心配しなくてもそう落ちたりはしないから。私が手を離さない限りは――」
館林が口許に笑みを作って怖い事を言う。
咄嗟に館林の手と言わず、彼女の腕や身体に手を伸ばしそうになったが、どうにか自制した。今、宇木友和という人間の全権が館林さゆの片手にかかっている事は、紛れもない事実なのだから。この状況で彼女の不興を買う事は、間違いなく自殺行為だ。

「向こう側に行くわよ。ビルとビルの間を泳ぐのは、結構面白いわよ」
館林が指差した方角には、屋上部分に飛行機との接触を防ぐための赤色灯を灯したビル群があった。
友和としては、館林に従う他ない。
力無くこくんと頷いたが、館林の顔がにんまりと笑ったのを見えて、背筋に冷たい汗が伝う。
「それじゃ――」
「ま、待ってくれ、何か嫌な予感、――ぃうぅあああああああああ！」
館林がまるで飛び込みを行う水泳選手のように身体を逆くの字状にすると、そのままがくんと急降下した。当然、手を繋いでいる友和諸共に。
咄嗟に眼鏡を外して左手に握る事が出来たのは、まさに奇跡だったと友和は後になって思うのだった。

館林が凄い勢いで地上へと垂直に降りて行く様は、イルカ等の海洋哺乳類が海中に急速潜行するかのようだったが、友和はそれを悠長に見ている余裕などない。
遊園地のフリーフォールを体感しているような落下感に友和の胃がでんぐり返る。抜群の加速によって空気が質量をもったように自分の顔をまとわりつきながら後頭部へと流れて行く感覚。先程トランプのカードぐらいにしか見えなかった公園が、見る間にその面積を拡大させて視界を覆う。
「！　前前！」
風圧によって友和の声は「びゃえびゃえ！」としか発せられなかったが、言おうとしている事は十分理解しているように館林が友和の方を見て、くすりと笑う。
常夜灯によって薄青白く照らされている公園、そして二人がついさっきまで座っていたベンチが目の前に迫る。

「ぶ、ぶつかっ！」
友和は自分がベンチに直撃して、血塗れの何が何だか分からない肉の塊になった姿を幻視した。
瞬間、ベンチに墜落する寸前に、館林はU字状に急上昇をした。
まるで精巧な機械細工のように一切の無駄のないドルフィンキックを行う館林に引っ張られる友和の目に、夜空に瞬く冬の星座群が飛び込んでくる。
ハリウッドの最新CG技術が紙芝居に思える程の一大スペクタクルに、友和の心臓が跳ね上がる。その鼓動が握り合った互いの手を通して伝わったのか、館林がこちらを振り返り、愛らしくも残酷に笑う。
友和は、今の自分は彼女の玩具（おもちゃ）なのだと痛感した。

友和と館林が高層ビル群の中でも最も高いビルの屋上に降り立ったのは、更に急上昇と急降下とループのジェットコースターを三回程繰り返した後だった。館林が言っていた「ビルとビルの間を泳ぐ」というのもやった。
夜の街に灯る光の群れの中から暗い空に向かってそそり立つビルは、まるで仄明るい海底に林立する黒い珊瑚の塔のようで、時折ビルの側面の窓ガラスに移る自分達の姿が幻惑するように浮び上がる様は、まるで夢幻のような心地がした――だろう。
換気扇のお化けのような排気ファンが並ぶビルの屋上に足が着いた途端、友和は崩れ落ちるように大の字に転がった。
ぜいぜいと荒い息をはきながら、次々と気持ち悪い汗がにじみ出る額を手の甲で拭う。
「そんなところで横になっていると、風邪ひくわよ」
汗一つ浮かべず余裕の表情でもっともな事を言う館林だったが、友和はそれどころではない。胃の中の物を吐き出さないのが不思議なぐらいにふらふらなのだ。
「お、俺、殺されるかと思った……」

息も絶え絶えに友和は呟くと、
「殺される？　ああ、そういう手もあったわね。確かに、口封じには調度良いわね」
本気なのか冗談なのか、館林はそう呟くと、友和の頭の方にやって来た。
逆光のせいか館林の顔に影が差し込んでいたが、その中で二つの瞳が紅くなっているのが分かった。
一瞬どきっとしたが、夜に空を泳ぐ種族なのだから眼ぐらい赤くなってもおかしくない、と妙な所で友和は納得した。
「どう？　私の凄さが分かったかしら？」
友和は忙しく跳ね続けている心臓をどうにか宥めつつ、まだ左手に握られている幸運の結晶のような眼鏡をかける。
馴染みのある感覚が蘇って、友和は落ち着きを取り戻した。
それから館林の方を向くと、
「わ、分かった分かった、思い知ったよ。だから、帰りは安全航行で御願いします」
顔の前で合掌するように両手を合わせた。
すると館林は、友和のリアクションが思っていた程ではなかった事に不満だったのか、「どうしようかな？」と顎の先に人差し指を当て、意地悪そうなポーズを取って見せる。
「――おい！　頼むぜ、本当に」
思わず立ち上がった友和に「あはははは」と笑って館林がハーフコートの裾をひらめかせながら飛ぶように離れる。
それから、全く重力を感じさせない身軽さで、屋上の縁にふわりと立つ。一歩先は何の足場もない人工の絶壁。
「待てって！　危ないぞ！」
思わずそう叫んで、友和は自分の過ちに気付く。館林に墜落死も飛び降りもないのだ。
と、彼女が半身をこちらに向けて振り返った。
夜の咲倉市の全景を背にして、仄明るい闇の中に館林の姿が浮か

び上がる。
その白く整った面立ちに、航空障害灯が定期的に放つ赤い光が当たる度に、まるで血に濡れているかのような怖ろしくも妖しい美しさを帯びる。
滝のように流れ出る汗も忘れ、友和は暫し館林の横顔に見入った。
ビル風で舞い上がる髪を押さえつつ、
「――ナイトフィッシュって、悪くない呼び名ね」
そう言って友和を横目で見遣る。
「じ、自分で言っておいてなんだけど、そんな風に言われると少し照れるな……」
見詰めていた事を誤魔化すように、汗でぐっしょりした髪を掻き回す友和。
「調子乗らないで。……ほんのちょっと、気に入っただけよ」
館林が冷たく言い放つ。が、口許は笑っていた。
その顔に、友和も心が落ち着くのを理解する。
同時に、今の自分が置かれている状況を考えた。
（そもそも、転校してきたばかりの女の子と深夜ビルの屋上にいるってのは、一体どういう事なんだ？　いや、そんな事よりも館林が夜空を泳ぐ力ってそもそも何なんだ？）
疑問が怒涛のように溢れて来たが、不思議と友和は取り乱すような事はなかった。
むしろ、友和の中でずれていた物が妙な具合に転がった末に、ようやく腰が据わったような感じだった。
だから、友和はある程度余裕をもって自分が体感した事と、館林さゆという少女を再認識出来た。
夜間のみ行えるという空中遊泳。
人が水中を泳ぐのとはまるで異なる、海洋性哺乳類のようなしなやかさと力強さをもって夜の空を往（ゆ）くその能力は、確かに驚愕に値した。値したが……。
「何時もこんな風に空を泳いでいるのか？　誰かに見付かるとか、

そういう心配はないのか？」
友和の口から出た言葉は賛嘆でも忌避でも追求でもなく、まるで親しい友人を気遣うような、素朴だが優しさのあるものだった。
館林が眼を丸くする。それからぷいっと横を向いて口唇を尖らせ気味にして、
「本当に反応薄いわね……何か、やりにくいわ……」
小さく呟いた。
「ん？　何か言ったか？」
聞き取れなかったのか、友和が訊ねる。
「な、何でもないわよ！　気にしないで！」
誤魔化すようにそう言うと、館林は腰に両手をやって友和の方を向いた。
「わ、私にとって、夜の空を泳ぐのは至極当然な事よ。そう、生きている証といっても構わないぐらいにね。でも、私も馬鹿じゃないから、人には見られないように注意しているつもりだったんだけれど、宇木君にばっちり見られちゃったのよね。……全く、ついてないわ」
そう言って自嘲気味に笑う館林だったが、友和は彼女が口にした「見られちゃった」という言葉を、パンツを見てしまった事と結び付けてしまい、顔色でばれない事を祈りつつ自重した。

帰りは友和の哀願を聞き入れたのか、さゆは比較的優しく彼を公園までエスコートした。
「今更釘を刺すつもりはないけど」
「ああ。誰にも言わないし、言ったところで俺の人格を疑われるだけだ。ちゃんと理解してるさ、悪い頭なりにな」
「宇木君は、頭悪くないと思うわ。前の学校でも結構良い成績だったんじゃないの？」
「……いや、どうだったかな。もう、忘れたから。じゃあな」
口許に小さな苦笑を刻んで、友和が軽快な足取りで公園を出て行

く。

その後姿が消えるまで、さゆはその場に立っていた。

「――じゃあな、か」

思わず呟いたさゆは、そう言ってしまった自分に対してはにかむようにそっと地を蹴り、星が煌く夜の空に身を委ねた。

動揺

生まれて初めて夜空を泳ぐという経験をした友和は、帰宅してすぐに寝床に入ったがなかなか眠りに付けず、ようやく瞼が重くなったのは深夜の二時を過ぎていた。

そんな訳だから睡眠時間が足りていない友和の起床はぐずぐずしたもので、その結果、亜紀子に怖い笑顔で送り出されたのは始業時間から後一時間もなかった。

寝不足と無理やり朝食を詰め込んだ胃袋にひぃひぃ言いながら、どうにか滑り込むようにして高校に到着。そこから教室までの道のりは、友和が転校して以来今までで最も長く感じられた。

一人死に掛けの病人のようなテンションで教室に入ってきた友和に、クラスメイト達は皆唖然とした様子だったが、江藤、崎山、千倉の三人が「どうしたんだ？」と声を掛けながらこっちに集まって来た。

荒い息を整えながら自分の席についた友和は、教科書やらノートやらを机の中に突っ込みながら、

「あ、いや、少し寝坊しただけだよ」

そう答えたが、三人は友和の机から離れようとはしなかった。

「……どうして俺の所に集ってるんだ？」

何か不審なものを感じた友和が、三人の顔を見回す。

だが、三人は互いに目配せをしているばかりで口を開こうとしない。

友和の中で不審の根がみるみる太く大きくなっていく。

と、その最中に、ガラリ、と教室の扉が引かれる音がした。そして、見ようとした訳でもないのに、視界の端に映った長い黒髪だけでそれが誰なのかを友和は認めた。

館林さゆ、だった。

館林は、昨日と同じように幾分緊張をはらんだ表情で、指定され

た座席へと向かう。
背丈の関係で、館林の席が一番前から一つ後ろだったという事を、友和は改めて知った。
そして、彼女が椅子に着席した途端、昨日の昼食時に一緒にいた女子数名がきゃあきゃあと賑やかそうな声を上げて回りを囲む。シチュエーションとしては、友和と館林の状況は良く似ていた。もっとも、こちらはあまり嬉しい状態ではないが。
しかし、友和はそんな事よりも、一瞬にして昨夜――正確には今朝の午前零時頃――の館林さゆの姿と今の彼女と透かし合わせていた。
あの時の館林は怖いもの知らずと言うか、何に対しても負ける訳がないと思わせる程の強さがあったのだが、今の彼女は普通に転入二日目の普通の転校生に見えた。
「何だよ、普通じゃないかよ……」
思わず口から零れた友和の独り言に、江藤達が色めき立つ。
いきなりヘッドロックされた。
誰だ!?　この首に回された太い腕は!?
「んー、どうした宇木ぃ？」
崎山が漲る豪腕で、友和を締め上げていた。
「な、なな、何するんだよ！」
強引にそれを引っぺがす友和。
すると、崎山他、江藤も千倉もにやにやと笑っている。
「その顔、何だよ三人とも」
「いやー」
「別にー」
「それ程でもー」
何故か頭を掻く三人。
「いや、褒めてないし……」
驚くよりも呆れる方が先に来た友和は、調度ホームルームのチャイムも鳴った事もあって江藤達を追い払う。

その時、誰かの視線を感じてちらりと顔を向けた先は、館林の机だった。
そして館林が、何か言いたそうな顔でこちらを見ているのだった。
友和の目線に気付くと、慌てたように顔を逸らす。その動作で、明らかに友和を見ていた事が分かった。
途端に、あの夜の空を泳いだ時の感覚が友和の身の内に甦ってくる。
不確かな足場の先にはただただ虚空があるばかり。そして、その底には何千もの人々が眠りについた街並みが、闇の中常夜灯によって仄暗く照らし出されている。頬を過ぎ去る風は切るように冷たかったが、心臓がシンバルのように鳴り響き、興奮と感動で全身の血管が沸き立っている。
そして、友和の右手の先には、館林の小さくて柔らかい手の感触があった。
と、その時ホームルーム担当の相坂が教室に現れたので、友和は記憶を想起する事をシャットダウンした。
相坂が教壇の後ろに立って、再び行われる模擬テストの事を口にしているのを聞き流しながら友和は、館林と話したい――そう思うのだった。

友和の思い通り、館林と話を出来る機会は昼食の時間に訪れた。
もっとも、あの夜のように二人きりという訳ではなく、どうしてか江藤、崎山、千倉の三人もいた。更に、館林の方も直ぐに仲良しになった女子達と一緒だった。
つまり、今の状況は、友和含む男子四人と館林含む女子四人がテーブルを挟んで正対しているという、随分昔にテレビで放送していた素人公募のカップル製造番組のようだった。
最初に「お互い転校生同士だし」と妙な前置きが置かれて友和と館林が咲倉高校の感想とか一年の抱負とか、そんな訳の分からない

事を言わされた後、駄弁(だべ)りタイムとなった。
何でこうなったんだと首を傾げている友和のお隣三席では、江藤達が館林他女子生徒グループにあれやこれや話しかけている。時々、友和にも会話の話題が振られ、それに応える他は黙々と注文したカレーライスを口に運ぶという作業に没頭していた。
元々、友和はあまり親しくはない人間と喋る事が得意ではない。
江藤達にでさえそんなに会話をした事がないのに、一言も口をきいていない女子達に対して話をしようという気にはならなかった。
だが、カレーライスを黙々と食しながら、友和は昨夜の事を振り返った。
夜空を泳ぐという館林さゆに対して、友和は何の気後れもせずに会話していた。それも、館林自身が驚くぐらいに全く平然として。
あの時の館林と、今、テーブルを挟んで目の前にいる館林が、友和の眼には同一には見えなかった。当の館林は、一応会話に参加しているのか時折頷きを返しながら、ちゅるちゅると蕎麦を食べている。
館林ぐらいの美少女が蕎麦の麺を箸で数本摘み、口の中に入れてゆく様子は、ちょっと見物だった。
友和が何となく館林の方を見ていると、彼女が上目遣いに友和を見た。
何か言いたそうな眼をしていたが、友和は「これってどういう訳？」と語っていた。ような気がしたではない。語っているのだ。友和は、そう理解した。
友和は、館林に出会って一日――厳密に言えばその前日の夜から――しか経っていなかったが、何となく彼女の考えている事が分かった。
しかし、友和から親しげに館林に語りかけるかというと、そうでもない。
館林が、教室内では控えめな女子生徒というキャラクターを作っているからだ。

昨夜の無双なまでの振り回しっぷりから、館林のそれはもう完璧な猫被りだと一目瞭然なのだが、彼女がそうしたいのだから敢えて乱す必要もない、と友和は認識している。

その筈なのだが……。

（俺だって知りたいよ）

コップに汲んできた水を一口飲んでから、友和はアイコンタクトで応えた。

レンゲできつねソバのスープを掬い、くいっと口内に流し込んでから「私、騒々しいの苦手なのよ」という言葉を込めて、ちらりとこちらを見る館林。

不思議と成立する視線だけの会話。

友和は驚嘆の念を禁じえなかったが、眼による会話キャッチボールを続ける。

（俺だって苦手だ）

友和は、一瞬だけ館林の方に顔を上げてから、皿の縁のルーをスプーンで一つにまとめていく。

館林が薄い油揚げの端を箸で摘むと、小さく噛み付いてからぎょろっと眼だけ動かして「どうして断らなかったのよ！」と訴えた。

剛速球が来た。

（……俺だって、無理やり引っ張り込まれたんだ）

頬杖をついて何気ない風を装って横目で応え、更に詰問した友和は意味もなく残った白いご飯の山をカレー色に染め上げる。

油揚げを食べ終えた館林は、そっとどんぶりの中身を箸で掻き回した後に「だったらしっかり断りなさいよ！　私が迷惑するでしょ！」と、バットを圧し折りかねない物凄いものを二球続けて放った。その上、横にいる女子生徒に向かって適度なタイミングで相槌を打つ事で、友和の眼光（はんげき）を防ぐ。更に、友和以外の男子三人にはあまり会話に加わってなくて申し訳ないとばかりに、はにかんだ笑顔を振舞ったりしている。

舞い上がっているのが分かりまくりの江藤、崎山、千倉のおばか

トリオ。
友和自身、館林さゆの真の姿を知らずにさっきの笑顔を見せられたら、連中みたいに顔に出さなくとも、内心では彼女に対してぐっと来ていたかもしれない。
そうなった自分を想像した友和は、ぷるぷると首を振って即座に打ち消すと、自棄(やけ)になったように残りのカレーライスを口の中に流し込んだ。それから不味い物でも食べているかのようにしかめ面になって咀嚼(そしゃく)しながら、館林の猫被りスマイル一発でデレデレになった異色トリオを見遣る。
(全く、お前らもあいつの正体を知れば、そんな顔をしていられないぜ？　何しろ、人を何百メートルって高さまで引っ張った挙句、びゅんびゅん振り回すような凶悪女――)
瞬間、ごん！　と身体の内側に響くような音と共に、友和の右脚の脛に激痛が走った。同時に目の前に無数の星が散り、口にしていた物を吹き出しそうになる。
咄嗟に口許を両手で押さえる友和。
食べていた物を吐き出しそうになる衝動を必死で抑え込み、脛の痛みに涙目になりながらもコップの水をがぶ飲みする。
何とか大惨事を起こす事もなく、やっとの思いで口の中の物を胃袋に収め、痛む脛を手で擦っていると、
「あ、ご、ごめんなさい。私の出した足、宇木君に当たっちゃったみたい……」
申し訳なさそうな声を出して、館林が殊勝に頭を下げた。
(こいつ、わざと蹴りやがったな！)
友和が眼で訴えると、自分の失態が恥ずかしくて顔を両手で隠している――ように見せている両手の隙間から、ふっと笑みを浮かべた館林の眼が覗いた。
そして彼女の眼は、雄弁に「私の悪口、言ったでしょう？」と語っていた。
(思っただけだろうが！！)

友和が眉間に力を入れて睨むと、館林は小さく「きゃっ」と叫んで、顔を逸らした。
白々しいまでの演技に頭の中がカッとなった友和は、思わず立ち上がろうとしてテーブルに手を掛ける。
と、急に左肩を掴まれた。
「おいおい宇木、館林さん謝ったじゃんかよ。何でそんな怖い顔してんだよ。彼女、怖がっているじゃないか」
崎山が、その腕力を示すかのようにがっちりと友和の肩を掴んでいる。五本の指全てに圧力が掛かっている。相当な握力だ。力で勝負をしたら、絶対に勝てない相手だと友和は悟る。
そして、友和は我に返った。
何もかもが、急に馬鹿らしくなったのだ。
「……止めろよ、離せ」
ぞっとするような声が、友和の口から発せられた。
途端にテーブル上に冷たい空気が吹き荒れて、崎山が驚いたように友和の肩から手を離す。
友和は立ち上がるとトレイを持って、さっさと食器の回収所に向かった。
「宇木！　ちょっと待てよ！」
後ろで江藤が大声を上げていたが、友和は決して振り返ろうとはしなかった。

昼食後の五時限目は、体育の時間でソフトボールだった。
最初からやる気のない友和は、外野でのんびりと時間が過ぎるのを待つ算段だったが、どういう訳か同じようにサボりたい奴が多く、ジャンケンの結果セカンドを任された。
「おらー！　かかってこいやー！」
バッターボックスに立った江藤が奇声を上げている。
「全く、無駄に暑い奴だ」
呟いた友和は、セカンドベースに片足を乗せたまま、取り敢えず

グラブを構える。
とても不味かった昼食の後、何故かあの異色トリオが友和に謝りに来た。無理やり誘った上に、友和が一人席を立った事を気まずく感じたようだ。
友和は面倒だったので、適当に彼らの謝罪を受け入れた。
元々、連中の魂胆が館林と接触するネタとして友和を利用したというのが最初から見え透いていたし、別にどうでも良かったのだ。
だが、友和の肩を掴んだ当の崎山が出過ぎた事をしたと再三謝って来たのには、何とも言えない気持ちになった。
面倒くさいし暑苦しいから「気にしてない」と一言言うと、「そうか！」と嬉しそうな顔をした。根は単純で、まあ良い奴のようだ。江藤や千倉も、初対面の時から明るい連中だと分かっていたし、嫌な印象は持っていなかった。
しかし、実際に友和は、彼らに接触される事が煩わしかった。心の何処かで、彼ら、いやクラス中の生徒からの干渉を友和は嫌っていた。昨年に転校した当初からそうであった。
必要最低限の接触以外、友和は自ら積極的に人の輪に加わろうとはしなかったし、その必要もないと考えていた。
しかし、館林さゆが現れた事によって、友和は自分の内面が変ってきているのを知った。
非現実を見せ付けられた事で、逆に友和の現実感が真実味を帯びたのだ。
館林の眼を見た瞬間に、自分の見ている世界と本当の世界とが合致した事は紛れもない事実なのだと、友和は実感した。
その時、キャッチャー役の崎山が、
「宇木―！　しっかり構えろ！」
と、大声を上げた。
びっくりしてキャッチャーの方を見ると、崎山がばしんばしんとグラブに拳を叩き込んでいる。更に、バッターボックスの江藤や、ピッチャーマウンドに立つ千倉が笑っている。

嫌な感じのしない、心が温かくなるような笑顔だった。
「ふん、分かったよ」
セカンドベースに乗せていた足を下ろすと、一応中腰になって構える。
と、それを待っていたように千倉がホームベースの方を向き、ぐん、と腕を撓らせて結構様になっているソフトボール独特の投球フォームを行った。
一瞬、真剣な顔になった江藤が、野球部らしいシャープなスイングをする。
ぶうん、と空振り音が唸り、ボールがキャッチャーのグラブに吸い込まれた。
野球とソフトボールでは球速が違い過ぎたのだろう、完全にスイングのタイミングが違っている。
野球部員を相手にストライクを取った事で、友和のチームからどよめきが上がった。
江藤が少しバッターボックスから離れると、先程の投球を思い出しているのかぶつぶつ呟きながら数回素振りをした。
江藤がバッターボックスに戻るのを待って、再び千倉が投球フォームを取る。
第二投目が投げられ、それは真っ直ぐにキャッチャーのミットに吸い込まれた。
再びどよめき。
江藤が見送ったボールはストライクのカウントがされたのだ。
江藤を追い込んだ形だった。
思わず抗議をする江藤だが、審判役を務める体育教師は、早くバッターボックスに戻れと顎をしゃくっている。判定が覆る事はなさそうだった。
渋々江藤がホームベースの横に立った。真っ直ぐに前を見据える眼は本気だった。
千倉が三球目を投じる。

江藤が、バットを振った。
ぱかん、と何だか間の抜けた音がしたかと思うと、ピッチャーマウンドにいた千倉が突然仰け反った。
何だ？　と友和が訝った瞬間、視界が暗転した。
右瞼の少し上の辺りに赤黒い衝撃が走ると同時に、自分の足元が暗闇に飲み込まれたかのように重心を失う。
骨が無くなったみたいに膝がぐにゃりと曲がる。
江藤のライナーを顔に食らったのだと理解した時には、誰かの叫ぶ声が遠くに聞こえていて、遂にはその声も聞こえなくなった。
友和は完全に意識を失った。

夜の彼女は

眼を覚ますとそこには、白いカーテンで四角に切り取られた天井があった。
ここは何処だ、と身を起こそうとした友和は、右眼の上の辺りに痛みと熱を覚えた。手を当てると、ざらっとした感触が返ってくる。同時に、湿布薬独特の臭いが友和の鼻をついた。
「あの時、俺……」
体育の時間にあった事を思い出そうとした時、
「気が付いたのかしらね」
そう言って、カーテン越しに人の形をした影が見えた。
「開けても良い？」
言うのとほぼ同時にカーテンが開けられ、柔和な表情の白衣の女性が顔を出す。
「ボールが当たったのは右目の少し上よ。片側パンダにならなくて良かったわね」
二十代後半と思しきその保険医は、楽しそうにそう言った。
「片側パンダって……、もうこんな時間か」
壁に掛けられている時計に目を遣り、もう既に放課後になっている事に気付く。
そっと額に手を当てる。
湿布越しにくっきりとコブが隆起しているのが分かる。
あの時、ピッチャーの千倉の身体がブラインドになって、友和は江藤のライナーを諸に食らったのだ。
（見えなかったな……。しかしソフトボールで倒れるなんて、格好悪いな……）
心の中で呟く友和だったが、もう少し真剣にやっていればと思わないでもない。殆ど事故のようなものだったのだ。
しかし、何となく江藤とは顔を合わせ難い感じだ。崎山や千倉と

連れ立って謝りに来た直後という事もある。
何て言ってくるだろうか。普通に謝るのか、それとも友和のドジを責めるのか。
しかし、友和自身どう言ってこようとあまり気にするつもりもなかった。
それよりも、いい加減このベッドに寝ている事もないだろう。確かに額にコブが出来ているが、ソフトボールだった事が幸いして、それ程大きな怪我ではなさそうだ。もしこれが硬式の野球ボールだったら、保健室ではなく本当に病院送りになっていたかもしれない。
「どう？　まだ痛むかしら。頭とかふらつく？」
「いえ、それ程でもないです。ありがとうございました」
友和が応えて、ベッドから身を起こす。一瞬、ずきん、と頭に響く痛みが走ったが、直ぐに引いていった。
「起き上がれる？　まあ、ソフトボールだし当たった所もおでこだったから、そんなに気にはしていないけれどね。でも、もしも痛みが残るようだったら、絶対に病院に行くのよ」
「はい、分かりました」
友和がベッドの脇に丁寧に揃えられている内履きを履く。
（誰が俺の内履きを揃えたのだろう？）
友和がぼんやりとそんな事を考えていると、背凭れ付きの回転する椅子に座って足を組んでいる保険医がふっと笑った。
何だか気になったので彼女の顔を見詰めると、保険医は笑みを深くした。
「君って、冷たそうな雰囲気の割に結構人気あるのねえ。君を運んできた男の子達が、心配だからって授業が終わってから見に来たんだけど、その時、一緒に女の子のグループも来たわ。しかも、私がこの学校では見た事もない奇麗な女の子もね」
（館林が？）
友和は保険医の「学校で見た事もない奇麗な女の子」という言葉を聞いた瞬間、脳裏に館林さゆの姿が思い浮かんでいた。

「あの子が噂の美少女転校生かしら？」
保険医が楽しそうに言う。
（来たのか、あいつ……）
友和の想像が確信に変わると同時に、少し困惑した。
昼食の時は右脛を蹴られた記憶がまだ新しい友和にとって、彼女が自分を見舞いに現れるというのは、ちょっと結び付かなかった。
（まあ、キャラ作りだろうけどな……）
ちょっと意地悪な結論に達した友和は口許に苦笑を浮かべて、腰掛けていたベッドから立ち上がる。
「あ、待って待って。確かここに」
保険医はそう言って、友和の隣のベッドから、「よっと！」という掛け声と共に見覚えのある鞄とコートを掴み上げた。
「君のでしょう。男の子達が持って来てくれたのよ。教室まで取りに戻るのも面倒だろうしってね」
友和は保険医から江藤達の厚意を受け取ると、
「それじゃ、ありがとうございました」
礼を言って、保健室を後にした。

その夜。
友和は自室で、今日の授業で数学の教師から出された課題をこなすために机に向かっていた。
友和が家に帰って来ると、居間にいた亜紀子（あきこ）はその額に張られている湿布薬を見て「あらあら、友君（とも）。まあまあ、どうしたのかしらそのおでこ？」とおっとり口調で訊ねてきた。
友和が体育の時間に起こった事を話すと、笑顔を浮かべたまま翌日病院に行って検査する事を約束させられた。
「大丈夫だから。そんなに心配する事ないよ」
友和はそう言ったが、部活から帰って来た中学二年生の由季奈（ゆきな）が、友和の姿を見るなり大騒ぎを始めたので、もう明日は病院に行くし

かなかった。
（言い出すと聞かないからな、二人とも）
一人冷静な友和は心の中で呟くと、ちらりと目覚し時計に目を向ける。
もうすぐ十一時になろうとしていた。
明日は病院に行かなければならないから、そろそろ寝ようかと思う。
ノートに綴っていた計算式を終わらせると、友和は椅子に座ったまま伸びをした。
再度、時計を見る。
昨夜の今頃は公園で館林さゆと会っていたな、と友和は思う。
今夜ももしかしたら、あの少女は公園にいるのだろうか。
寒空の下、公園に一人佇む館林さゆの姿が友和の脳裏を掠め、心の中がざわついた。
それから何気なく友和は、自分の右瞼の上にあるコブに触れる。
この事がなかったら、友和は今夜も公園に行ったのだろうか。
思わず自問する友和だったが、それ以上に頭の中を埋め尽くしている事があった。
「見えなかったな……、本当に見えなかった……」
体育の時間、飛んで来た江藤のライナーを、友和は全く見えなかった。
千倉の身体がブラインドになったとか、そういう事で見えなかったのではない。
湿布薬の上からコブを擦っている友和の指が、徐々に下がり始め、眉毛から右瞼、そして眼球へと至る。
友和は暫く無言だったが、やがて疲れたように吐息すると、椅子から立って寝巻きに着替え始めた。
それから室内灯のフックから下がっている紐に指を掛けようとした時、こん、とカーテンを引いた窓の向こうから音がした。
友和がそちらに顔を向ける。

窓には厚みのあるカーテンがかかっており、当然外の様子は見えない。
すると、もう一度窓ガラスの方から音がした。今度は、少し感情が篭った、こん、だった。
「何だ？」
紐に掛けていた手を下ろし、カーテンに向かう。縁を掴んで一気に開けると――そこには窓ガラス一枚隔ててふわりふわりと宙に浮ぶ女子高生、館林さゆがいた。
「――ううおわああ！」
完璧に不意を突かれた事で、友和は喉の奥から叫び声を上げていた。
すると館林の方も友和の叫喚に驚いたようで、窓ガラス一枚隔てた向こうで眼を見開き、口許に人差し指を当てて「シーッ！」という仕草をする。
「いやいやそういう問題じゃないぞ！」
半ば混乱している友和が窓に手をかけようとして、ロックされている事に気付き錠を外した時、
「友くーん、夜中に大声出しちゃ、近所めーわくでしょー」
間延びした声と共に友和の部屋のドアが開けられて亜紀子――直立したキツネの姿が描かれている奇怪なパジャマ姿――が現われた。
更に続いて、
「だからって、友兄（ともにい）の部屋にいきなり入るのはバッテンマーク！ちょ、ちょっとお母さんってば！」
亜紀子と似たような寝巻き姿――こちらは子ギツネのパジャマ姿――をした由季奈が入ってくる。
並んで立つと、成る程人間の親子とキツネの親子が勢揃いしている。ただ亜紀子のパジャマが胸の部分だけ異様に膨らんでいる影響で、キツネだか何だか分からない生物になっていたが。
亜紀子の長い髪と由季奈の短めの髪が共に湿っているのは、風呂に入った後だからか。

だが、友和にとってそんな事はどうでも良かった。
今はともかく窓だけは死守しなければ、と妙な使命感に芽生えた友和はカーテンの存在を思い出し、一気に引いて窓の外を見えないようにする。
「何してるの友兄？」
友和が部屋のカーテンに貼り付いている姿を見て、由季奈が不審そうな顔をする。
「ピーターパンになりたいのなら、夢の中だけにしてね」
結構辛らつな事を言われたような気がする。
しかし、どうやら館林の姿は見られていないようだ。
ほっと安堵したのも束の間、何やら母娘二人が今度は友和の部屋を物色しているのが見えた。
「ななな、何やってんだよ！」
思わず声を上げる友和に、
「だって友君、内緒でやると怒るじゃない？」
放りっぱなしの週刊のヤング系漫画雑誌をひっくり返し、しれっとそんな事を言う亜紀子。と、漫画雑誌の表紙を飾っている季節無視の水着姿のグラビアアイドルに「あら、こんな時期に大変ねえ」と一言。
友和は猛烈な恥ずかしさを覚えた。
「内緒でもなくても、勝手に人の部屋を漁るなよ！」
袋閉じのチェックまでされてはかなわないと、友和は亜紀子の手から漫画雑誌をひったくる。
「もーう、乱暴ねえ。だけど、年頃の男の子の実態をある程度理解しておかないとね。これも義務義務」
そんな事言いながら、どう見てもいかがわしい雑誌が隠されていそうな場所をピンポイントでチェックして行く亜紀子。流石にベッドの回りをうろうろされた時には冷や汗が出た。
「プライバシーってものがあるだろ！」
カーテンを死守しているのでそちら側に行く事が出来ない友和は、

今にも気が狂いそうだった。
「その前に友兄、冬だからってちゃんと換気してよね。この部屋、男臭過ぎる！」
と、由季奈がこちらにやって来て、引いたカーテンを開けようとする。
「わ、分かった！　掃除でも何でもするから、早く部屋から出て行ってくれよ！」
こちらに迫って来た由季奈の肩を掴んでぐるっと半回転させ、亜紀子の方に突き飛ばす。
亜紀子は「きゃ、家庭内暴力反対―」とか言いながら、一向に崩れないモデル顔負けのボディをクッションにして、由季奈を危うげなくキャッチ。
「ほらほら、さっさと退散する。勉強の邪魔だから」
犬を追い払うように、しっしと手で仕草をする友和。
「ひどーい。そんな態度をとるんだったら、明日の朝ご飯作ってあげないんだから」
瞬間、友和の腹の虫が抗議の声を上げたような気がしたが、今は明日の朝食よりも窓の向こうの方が気になった。
「お母さん、言った事は必ず実行する人だからね。後悔しても遅いから」
由季奈がジト目でこちらを睨んでくる。
「あ、朝飯（あさめし）の脅迫ぐらいで俺は屈しないからな。ほら、本当に勉強の邪魔だから、すぐに俺の部屋から出て行ってくれ」
こっちも本気という事が分かったのか、亜紀子と由季奈が二人してぶーっと頬を膨らませて友和の部屋を出ると、ドアを閉める。
何故だかひどく疲労していて、友和は額に浮いた汗を拭う。
二人の足音が確実に遠ざかったのを確認してから、友和はのろのろとした動作でカーテンに向かい、ゆっくりと開ける。
そこには、ちょっと困惑気味な様子の館林さゆが浮んでいた。
錠は先程自分で外していたので、縁に手を掛ければすんなりと窓

は開いた。
室内に入り込んできた真冬の夜の冷気が、友和の頭を幾分覚醒させてくれた。
「……それで、これはどういう事なんだ？」
額に当たる冷気を心地良く思いながら、館林を見上げる友和。
「それよりも、ちょっと入れてくれないかしら？　いい加減寒くてたまらないから」
頬を冬の夜気で赤くして、館林は白い息をはいている。
「……まあ良いや。どうぞ」
友和としては言いたい事は多々あったが、このまま館林を門前払いする訳にもいかない気がした。
友和が一歩身を引くと、
「それじゃ、ちょっとお邪魔します……」
館林は小声でそう言うと、ゆっくりと友和の部屋に入って来た。
無論、浮いたままで。
人一人が六畳一間の空間に浮んでいるというアンバランスさに、友和は絶句しかけたが、
「……待ってろ。今何か持って来るから。それと、部屋の中で浮くのは自重してくれ」
そう行って部屋を出て行こうとした。
「分かったわ」
館林の声を聞いてから友和はドアを閉めようとして、自分がずっと漫画雑誌を握り締めたままだった事に気が付き、ベッドの上に放り投げてから一階のキッチンに向かった。

取り敢えず、紅茶が入ったカップを二つとクッキーと煎餅を調達して部屋に戻ると、館林は部屋の隅で脱いだ靴を手にしたまま立っていた。
「何をしているんだ？」
そういって自分のベッドの上に紅茶とお菓子を載せた盆を置き、

コップを一つ手に取って勉強机の椅子に座る。
「だって、何処に座れば良いか分からないから……」
両手に左右の靴を持ったまま、戸惑いの表情を浮かべている館林。
「そうだな……、まず靴はベランダに置いて、館林はベッドの上にでも座っていてくれ」
「うん……」
指示通りにベランダに靴を置いた館林は、友和のベッドにちょこんと腰掛ける。
「はい」
「あ、有難う」
友和がベッドに置いた盆から紅茶のコップを取って、館林に手渡す。
館林はそれを受け取ると、かじかんだ両指を温めるように両の手で包むように持つ。
コップから立ち昇る湯気の向こうにある館林の顔を何となく見ながら、友和は紅茶を一口飲んだ。熱さが喉の奥に流れていって、心地良い軌跡を残す。
「きれいなお母さんと妹さんね」
館林が湯気の向こうからそう言い、コップを傾けて紅茶を飲んだ。
「見えてたのか？」
「……うん、カーテンの端から少し部屋の中が見えてた。宇木君のお母さん、凄いのね」
「凄いって、何が？」
「……スタイル……。……胸、凄く大きい」
零すように、館林は言った。
友和は飲んでいた紅茶を吹き出しそうになった。
これは返答に困った。
確かに、亜紀子は子持ちだがまだ三十代――因みに一桁の数字を確かめようとすると笑顔で食事を減らされる――で、確かに出る所はやたら出ている身体なのだろうがそれが……色々考えて頭の中がと

んでもない事になったので強制的に脳内から却下。
「それに妹さんも可愛らしいし。きっと大きくなったら宇木君のお母さんみたいに」
そう言って、館林が目を伏せる。その先にはベッドに放り投げた漫画雑誌の表紙グラビアがあった。
グラビアアイドルの肢体に注がれる館林の眼光が、冷たく鋭さを増したように思えた。
確かに館林は小柄な上に、同年代の女子と見比べても身体のメリハリが貧し――ぎらん、と効果音でも付きそうな物凄い眼差しが友和の横顔に突き刺さった。
これは早急に話題を変えなければ、と友和は判断。
「な、なあ、お前どうして俺の家に来たんだ？　いや、それよりもどうして俺の家の場所を知ってるんだ？」
「……着けた」
ちょっとの間、友和は呼吸をするのを忘れた。
ひゅー、と変な口笛のような音と共に空気を吸い込み、友和は咳き込んだ。
「げほげほっ、つ、着けたって……それ、かなり怖いぞ。軽くストーカーだ」
「す、ストーカーだなんて、違うわよ。昨日の夜、宇木君が帰って行く方向と私の帰る方向が同じだっただけで、わ、私だって着けたくて着けたんだじゃないわよ。そ、そうね、言い方が悪かったわ。上から見てて覚えた。これでどうかしら？」
あまり実態は変わらない気がする。だが、これ以上引っ張るような話題ではなさそうだ。友和は再度話を方向転換させる。
「館林は、今夜もあの公園にいたのか？」
友和がそう言うと、我が意を得たとばかりに館林が身を乗り出した。
「そうよ。でも、今夜は来なかったわね、宇木君」
「い、いや、今日はまあ、この事もあったしな」

友和はそう言って、自分の額に張られている湿布薬を指差した。
「そうだろうと思ってた。だから、その……お、お見舞いに……」
急に声のトーンを落とすと、館林はもじもじしながら言った。
「へ？」
意表を突かれたような、ちょっと間の抜けた顔になる友和。
「み、見舞いって、少し時間を考えろよな……。まあ、こぶにはなってるけど、頭が痛いとかふらつくとかそういうのはないから、多分、大した事は無いさ」
「そう……」
館林が引き結んだ口唇から僅かに吐息をこぼすと、胸の前で小さく手を組んだ。
随分小さな手だと、友和は感じた。昨日の今頃は、あの手を握って友和は夜の空を泳いでいたのだ。
「宇木君が倒れたって聞いて、休み時間にみんなで保健室行ったんだけど、宇木君寝てるって言われたから、そのまま戻って来たの」
「そうみたいだな。保険医の人に聞いた」
「……それに、お昼休みの時、宇木君が急に行っちゃうから……」
「ああ……、あれは、何でもない」
「本当に？　あの時の宇木君、凄く怖い顔をしていたわ。宇木君の肩を掴んだ身体の大きい人、顔が真っ青だったし……」
友和は頭を掻いた。正直、もうあの時の事は思い出したくない。
「もう済んだ事だ。それに、あの後直ぐに仲直りしたんだよ……」
「そう……」
心配そうな顔をしている館林を見て、友和は言葉を続けた。
「あいつらは気の良い連中だよ。咲倉高校に転校してからずっと、一人だった俺にわざわざ話しかけて来たぐらいだからな」
「宇木君、一人だったの？」
館林のうっすらと紅色を帯びている瞳が、友和に向けられる。友和は、彼女の眼を真っ直ぐに見詰めながら、
「一人だった。友達も、作ろうとは思わなかった」

「どうして？　辛かったり寂しかったりしないの？」
「辛いとか寂しいとか思う前に、俺は……」
館林を前にして口を開きながら、友和の思念が己の内面世界のある場所で立ち止まった。
ここだ。
乾いた風が常に吹いている大地の上に、高く高くそそり立つ壁があった。
近付いて手を触れると、冷たい岩肌の感触がリアルに手の平に返って来る。
圧倒的な存在感を持った壁が、友和の行く手を阻んでいる。
思念上の友和は暫くの間、天辺が霞んで見えないほどの高さにある壁を眺めた後、踵を返し――
「館林は、どうなんだ？　人とは違う力を持っていて、友達は作れたのか？」
六畳一間にいる友和は、逆に問い返していた。
館林が、胸に手を当てた。
その行為は、友和の発した質問の穂先から自分の心臓を守ろうとしているかのように見えた。
館林が、小さく笑う。
「ちょっと痛い所、突かれたわ。私だって、宇木君の事言えないし。友達は作れたけど、私の本当の事を教えられる訳もない。そういう意味じゃ、本当の友達は一人もいないわ」
「そうか」
「うん」
友和と館林は、二人とも目線を逸らせた。
室内に、重苦しい沈黙が降りた。
その時間は、どれ程あったのか。
しかし、暗闇に浮かぶ星達が、何万光年という距離があろうとも互いの光を頼りに惹かれ合うように、
「――でも」

「――でも」
顔を上げ、友和と館林の口から出た言葉は、ぴたりと重なった。
びっくりする程声が重なった事に、思わずお互いの顔を見合う友和と館林。
それから、二人は照れたような可笑しいような、笑顔になった。
「お先にどうぞ」
友和が言う。
「宇木君からどうぞ」
館林が譲る。
「いやいや、館林からどうぞ」
「私は良いわ。宇木君の方が早かったし」
「そんな事はない。俺よりも館林の方がコンマの世界で早かった」
「どうやって計ったのよ？　もう、女の子を急かさないでよね」
そう言って館林は更に笑った。
つられて友和も笑う。
結局、二人はその先の言葉を口にせず、そのままだらだらと世間話に興じた。
ふと気が付くと、時計の針は既に一時を回っていた。
「明日、病院に行かなければならないんだったな。もう寝ないと」
「病院？　宇木君、大した事ないって」
館林の表情が急に暗くなった。
友和は手の平を館林の方に向けて左右に振って見せた。
「違う違う。ちょっと医者に診てもらうだけだから。そうしないと、二人ともうるさいんだよ」
「そう……。うん、ちゃんと診てもらった方が良いわね。でも、学校は？」
「遅刻だな。休むって程じゃないし」
「分かったわ。それじゃ、明日学校でね。それから、紅茶ご馳走様」
そう言って、館林は立ち上がると窓の方に行って、がらりと開けた。

途端に、冬の夜気が室内に入り込んで来る。
思わず身震いした友和に、館林は笑顔を向けた。
「これぐらいの冷たさで震え上がっていると、雪の夜なんて泳げないわよ？」
「そんな日でも泳ぐのかよ！　風邪引くぞ」
「牡丹雪（ぼたんゆき）の時は服が直ぐに凍っちゃって流石に控えるけど、粉雪の時は泳ぐわ。暗い夜の空に銀色の雪が舞い降りて行くの。とても寒いけど、とてもとても奇麗なのよ」
「はいはい。俺は部屋の中から見てるだけで十分だけどな」
「勿体無いわ。きっと宇木君も気に入るわよ」
「おい！　俺を連れ出す気かよ！」
しかし、館林は笑ったまま応えずに、ふらりと音もなく浮き上がると、窓からその向こうの夜の世界へと舞い上がった。
友和は開いたままの窓に近寄り、上を見上げると、夜空の中に館林の姿があった。こちらに小さく手を振っている。
「早く帰れよな。誰かに見つかるぞ」
そう呟いて、友和も小さく手を振る。
それが見えたのか、館林はまるでイルカのようなしなやかさで身を翻らせると、夜の空を泳いで行った。
「また、明日な。館林」
館林が消えて行った先を暫く見詰めていた友和が、そう呟いて窓を閉めた。
「さて、寝るか」
今度こそ室内の照明を消そうとした時、友和は不意に誰かに呼ばれたような気がして振り返った。
目線の先には、今自分が閉めたはずの窓があった。
違う。
呼ばれたのは現実の友和ではなく、心の中にいる友和だ。
荒涼とした大地に立つ思念上の友和は、背後を振り返った。
そこには、遥か上空にまで聳える堅牢な壁が圧倒的な存在感であ

った。
友和は耳を澄ませる。
確かに声が聞こえたのだ。
また聞こえた。自分を呼ぶ声が。
友和が、耳と唯一の眼を頼りに声の出所を探す。
見付けた。
声は、巨大な壁の更に上から、ここからではマッチ棒の先端ぐらいにしか見えない小さな影から発せられていた。
しかし、友和はその影が誰なのかを知っている。
何故なら、その影は制服姿で、ひらひらと靡くスカートを穿いていたのだから。

夜の彼女は（後書き）

文章の不明瞭な部分を修正しました。

警告者

翌日、病院の医師から異常無しの太鼓判を押された友和は、学校に向かうべく街中を歩いていた。

何でもソフトボールが当たった箇所が人体の中で最も骨の厚い前頭骨だった事もあり、友和自身眩暈や頭痛といった症状が出ていないため、精密検査の必要もなく二、三言会話した後に解放された。

昼間の街中を制服姿で歩いているのはどうも場違いな気がしていたが、病院に行くから遅刻するという大義名分がある友和は、急いで学校に行く必要もなかった。

携帯電話の文字盤で時間を確かめると、今の時刻は調度十一時を回ったところだった。

「昼飯が始まる頃に着けば良いかな」

呟いた友和の眼に、開店しているファーストフード店が目に映った。

途端に、ぐーっとなる腹の虫。

今朝の亜紀子は、本当に友和を朝食抜きにしたのだ。

病院に行くんだから調度良いわよね、と健康診断でもないのに訳の分からない理屈まで言って。

友和は半ば吸い込まれるようにファーストフード店に入って行こうとした時、

「感心しないわね。今の時間、高校生は学校に行っているんじゃないかしら？」

女の声がした。

友和はびくりと身体を震わせると、周囲を見回した。誰もいない。とすると、今の声は自分に向けられたものだ。

（ついてないな、巡察か）

自分の間の悪さを呪いながら後ろを振り返ると、そこには煌くような銀髪を短く切り揃えたスーツ姿の女が立っていた。

怜悧(れいり)そうな感じの美人で、背が高かった。
同年代の中で平均身長の友和と殆ど変わらない。百七十センチは優にあるだろう。
(私服警官？　それにしては、随分派手な髪だな)
友和の心に疑念が差した。
パンツルックで上下をびしっと決めている銀髪の女は、友和の顔を見て意外そうな顔になった。
「あら？　こう言っては何だけれど、貴方って案外普通なのね」
(普通って何だ？)
訝る友和は、警戒心を滲ませながら口を開いた。
「警察の人ですか？」
すると、銀髪の女はくすりと笑った。笑うと、落ち着いた雰囲気の割に急に幼く見えた。
「取り締まりをしているから、まあ警察に近いとも言えるわね」
「俺に何のようですか？」
友和の心が、ざわざわと騒ぎ始めた。
目の前の女から、警察官独特の金属的な威圧感は感じない。だが、それとは別に自分の足場を徐々に切り崩されて行くような、確実に追い詰められている焦燥感があった。
(逃げるか？)
心の中で一人呟く友和。
だが、
「貴方、館林さゆを知ってるでしょう？」
銀髪の女がそう言った瞬間、逃げる気が失せていた。
代わりに、込み上げて来るものがあった。
(今、何て言った？)
友和は無意識の内に、両の手を握り締めていた。
ぎりぎりと握った鞄紐が手の平に食い込んでいるが、友和は気にならなかった。
すると、銀髪の女はふんふんと鼻を鳴らした。いや、嗅いでいる

かのようだった。
「エピネフリン、ノルエピネフリンの分泌を確認。心拍数も上昇してるわね。臨戦態勢という事かしら……でも、汗腺や皮脂の臭気からすると、内因性モルヒネは作られていない？　とすると、著しい痛覚の鈍化は無く、筋力の枷（ロック）も外されていない？」
　呟いている銀髪の女が眉間に縦皺を刻んだ。
「あんたは、何者なんだ？」
　低く、友和は問うた。
　銀髪の女は友和を暫らく見詰めた後、眉間の縦皺をふっと消して、
「……少なくとも、貴方の人としての人生を守ろうとしている者だわ。どう？　時間があるのなら、少し私とお話しないかしら」
　と、口にするとくるりと背を向けて一人歩いて行った。
「自分から話しかけておいて、何なんだよそれは！　お前、館林の事を知っているのか！？」
　友和が遠ざかって行く女の背中に声を放つが、女は一向に振り返る様子もなく、一人すたすたとアーケードの方へと歩いて行く。
　友和は舌打ちをすると、ズボンのポケットから取り出した携帯電話で再び時間を確かめる。
　高校までの道程と昼休みの始まりの時間を考えて、友和には自由に使える時間がざっと三十分程あった。
「三十分だけだ。それだけだ……」
　友和は自分に言い聞かせるように呟くと、足早に銀髪の女の後を追った。

　銀髪の女が行き着いた場所は、大手のファミリーレストランだった。
　さっさと入ってしまった銀髪の女を追って店内に入ると、ウェイターが一瞬怪訝そうな顔になった。
　平日の昼間に、学生服の若者が訪れる事を不自然に感じたのだろう。しかも、先程入店して来た銀色の髪の女を睨み付けているから

余計にだ。
友和が銀髪の女の方に向かって行こうとしたので、
「お客様――」
ウェイターが友和に声を掛ける。
その時、
「構わないわ。私の連れなのよ」
と、銀髪の女が言ったのでウェイターは引き下がった。
友和は乱暴に銀髪の女の対面に座った。
「まずは私の名前を覚えてもらおうかしらね。――悲迦留（ひかる）、そう記憶してもらって差し支えないわ」
薄く笑みを浮かべて言った。
「ヒカル？　名字はないのかよ」
ぶっきらぼうな調子で訊ねた。
「聞きたかったのなら応えるけど？　それとも貴方が名付けてくれる？」
「馬鹿にしてるのか？　まあ、あんたがヒカルって言うのならそれで良いさ。それよりも、話ってのを早くしてくれよ」
「そうね。良いわ。……と、その前に注文は？　奢るわよ」
幾ら空腹とはいえ、この状況で物が食べられる程友和の神経は太くなかった。素っ気無く応える。
「水でいい」
「遠慮しなくてもいいのに。ああ、それじゃ、私はこれとこれを……」
悲迦留と名乗った銀髪の女は、メニューから調理品の見本を二三指差し、控えていたウェイトレスが注文を取っていた。
ウェイトレスがオーダーを口頭で確認し、厨房へと戻って行くのを横目で見送った悲迦留は、テーブルに両肘をついて手を組むと、その上に贅肉のない顎を乗せた。
友和は大人の余裕を見せ付けられているような気がして、一層渋面になった。

「さっき、俺の人としての人生を守るって言っていたよな。それって、どういう意味だよ」
「そのままの意味よ。私の言う通りにしてくれれば、君は普通の人生を送る事が出来るわ。そう言えば、まだ貴方の名前を聞いてなかったわね。教えてもらえるかしら？」
友和は逡巡した。
銀髪の女が偽名を言っただけかもしれないのに、自分の本名を名乗る必要があるのか。そもそも、相手の正体がまるで分からないのだ。ここは教えない方が無難だろう。それに、今の友和は不味い事に制服姿だ。銀髪の女が単身か組織の一員かは知らないが、調べればすぐに咲倉高校の生徒だと分かるだろうし、こんな時代だから友和の名前なんて簡単にばれるだろう。
もっとも、その手間を省かせてやるなんて気持ちは、友和には更々無かった。
「断る。好きに調べれば良いだろ」
「もう、可愛くないわね。大人と話をしている時は、素直になった方が良いわよ？」
悲迦留が人生の先輩めいた忠告を口にするが、友和は無視した。
「それで、俺の人生と館林がどう関係するんだよ」
「関係あるわ。私はね、館林さゆを追い掛けているのよ。そこに、君という存在が加わるのは、追い掛ける側として好ましく無い訳」
友和は、悲迦留を見据えたまま、息をはいた。
館林さゆの名を口にした時から、ある程度予想はついていた。
声を潜めて、友和は問う。
「あいつが、普通の人間とは違うからか？」
「違うから追い掛ける、とは簡単には言えないわね。貴方が知らないだけで、常人とは異なる力を持つ存在は昔からいたわ。世間一般的には超能力者だなんて随分とオブラートに包んだ言い方をしているけれどね。でも、館林さゆは別格なのよ。見過ごす事は出来ないわ」

「館林の、あいつの力がそんなに怖いのか？　夜中に、空を泳ぐぐらいなんだぞ？」
「飛翔、いえ飛泳（ひえい）能力は、悪用しようと思えば何にでも利用出来るわ。その最たるものが要人の暗殺かしらね。音もなく空中から忍び寄って刃物でグサリ、もしくは真上から重い物を落とす事も可能ね。しかも、逃走経路は空。スナイパーかヘリが必要だわ」
「何で館林がそんな事をするんだよ。一方的な考え方じゃないか」
「そうかしら？　私の想像は荒唐無稽じゃないわよ。実際、それに近い事例があったしね。聞きたい？」
「それは、あんた達が館林を追い掛けるからだろう！」
思わず声が大きくなった。
店内の客やファミリーレストランの店員達が、一斉にこちらを見る。
友和は無数の視線を感じたが、気にならなかった。
しかし、悲迦留は友和の眼を真正面から受けながら、また鼻を鳴らしていた。
「熱量増大、発汗量も上がっている。けれど、相変わらず分泌ホルモンの異常検知は確認出来ない。つまり、これは人間がただ怒りを覚えている状態」
「あんた、さっきから何なんだよ。学者か何かか？」
「とんでもない。そんな高尚なものじゃないわ。けれどね、私は、ピーターパンを追い掛けているフック船長じゃない。人心を欺く天魔、分かりやすく言えば人の心を操る悪魔を狩る猟犬なのよ」
「館林が、心を操る悪魔？」
「そう、私が館林さゆを追う本当の理由がそれなのよ。あいつはね、人の心を操って、人形みたいに扱うの。……でも君は、随分レアケースみたいね。館林さゆとの接触度の割に、君からはそういった兆候があまり見られない」
「――一つ教えてくれ。あんたが言う普通の人生って何だよ？」
友和が、悲迦留の言葉を遮った。

館林と自分との事を、何かのデータのように一々語られるのが不快だった。
「年上の話は聞くものよ」
悲迦留は苦笑を口許に浮かべると、少しの間考察するように友和の少し上の辺りを見遣って、徐に口を開いた。
「……そうね。日本人として普通に考えるのなら、このまま高校生として勉強して大学に入り、就職してそれから好きな女の子と結婚して家族を持つ事かしら。まあ、貴方が実は冒険癖の持ち主だったなら世界を渡り歩いてもらっても構わないわ。それでも、人としての人生というレールを外れる事はない。自暴自棄になって破滅しようと、それは人としての結末に過ぎないし、無論、私はもう二度と貴方に干渉しない」
それを聞いた友和は、思わず笑ってしまった。失笑したのだ。
悲迦留が胡乱な目付きになった。
切れ長の瞳に獰猛さと理知の光が一緒に内在している。なるほど、確かに猟犬の眼だ。
対峙している友和は背中がざわつくのを覚えたが、しかし睨み返して言い放った。
「話にならないな。結局は、お前に降伏する人生じゃないか。だったら、俺はそんな負け犬みたいな人生なんていらない」
そして、友和は席を立った。これ以上、この女の近くにいたくはなかったのだ。
配膳を運ぶウェイトレスの脇を足早に通り過ぎて外に出る。
途端に冷たい空気が友和を取り巻いて、頭の中がしゃんとした。同時に空腹を覚える。
「行こう、学校に。館林に会わないと」
手にした鞄の紐を握り直すと、友和は一歩一歩力を込めて歩き始めた。
一人、ファミリーレストランに残った悲迦留は、ようやく運ばれ

て来た料理を口に運びながら、右の耳穴に入れている極小マイクから聞こえてくる野太い男の声に耳を傾けていた。
『あの兄ちゃんの様子はどうだった？』
歳の頃は三〇代の半ばだろうか、低く張りのある声だが、何処か遊侠者めいた不思議な魅力があった。
「ふん。あの年代の男って、みんなヒーロー願望があるのかしらね。見ていて痛々しいわ」
先ほどまでとは裏腹に、悲迦留は襟元に隠したマイクピンに向かって悪態をついた。かなり小声で話しているので、店内にいる客に彼女の会話が聞かれるような事はなかった。
『仕方ねえさ。あんな美人の嬢ちゃんに必要とされるんだからな。まあ若い男ってのは、何かをしたくてうずうずしているもんなんだよ。で、一度火が付いちまったらなかなか消せねえんだな、これが』
「真伏（まぶせ）、あんたどっちの味方よ？」
苛々とした様子で悲迦留が言う。
「それよりも、あの騎士気取りの坊やが何処の学校の生徒か分かったの？」
『悲迦留だって、あの兄ちゃんと大して歳変わらねえだろうに』
「早く！」
悲迦留が思わず声を荒げ、通りがかったウェイトレスがびくっとなった。
『へいへい、分かりましたよ。ちょっとお待ちなすって、っと……』
暫く、極小マイクの向こう側でごそごそかたかたと身動きする音が聞こえた。聞き覚えのあるその音に、悲迦留は真伏がパソコンの端末を使っている事を知った。
かちかち、とマウスを数回クリックする音の後、再び真伏の声が聞こえて来た。
『まあ、見りゃ分かる通り学生さんだな。悲迦留の隠し持ってたマイクロカメラに制服がばっちり写ってたから、どの高校の生徒かはすぐに分かったぜ』

「高校名は？」
『花が咲くに倉庫の倉で咲倉高校だとよ。まあ、並以上の県立高校って事で県内ではまあまあ有名らしいな。で、あの兄ちゃんを張っていれば、館林さゆといつかはご対面って訳だ』
「上手く行けばね。本当なら、直ぐにでも館林さゆ自身を捕捉したかったけれど、正面から行ってあいつの妖術に掛かる訳にはいかないし。……ねえ、館林さゆがその高校に在籍している可能性ってあるのかしら？」
『あん？　まあ調べられなくはないが、相手は館林さゆだ。人を操って改竄させているかもしれないぞ』
「……ちょっと、あいつの臭いが強過ぎるのよ。まあ、そのお陰でようやくこの街にいるって事が分かったのだけれど」
「そうすると、あの兄ちゃんの身体からは館林さゆの臭いがぷんぷんするってわけか。こいつはもしかすると、知ってるどころか実は懇ろになってんじゃねえのか？　館林さゆだって見た目は餓鬼だが女だしな」
　真伏の品のない笑い声が聞こえてきた。
「馬鹿言わないで。あいつがそう簡単に他人に気を許すものですか。ともかく、臭いの強弱は接触頻度に影響されるわ。それから考えると、館林さゆが高校生に扮装していて一日中あの坊やの近くにいたとしても、あながち間違いではない。それぐらいの臭いなのよ」
『まあ、実年齢からすると、確かに高校生やっててもおかしくはないがな』
「そうなのよ。だから、この件は私の方で調べるわ。それと真伏にはやってもらいたい事があるの」
『なんだ？』
「実は、あの坊やを洗ってほしいのよ」
『……背後関係を揺さぶるのか。搦め手は逆効果だと思うがな。あの兄ちゃんが一層頑なになるだけじゃないのか？』
「理で説いても分からないのなら、現実に分かってもらうしかない

わ」
『好きじゃないんだがなあ、そういうのは』
「いいからやりなさい。これは命令よ」
「……命令とあれば仕方ない。分かりましたよ、悲迦留様」
そして、真伏からの通信が途切れた。
悲迦留は、食べ終わった食器を片付けようとしているウェイトレスに声を掛けると、更に幾つかのメニューを追加した。
これから本格的に動く事になる。エネルギーは出来る限り必要だと、館林さゆを追い続けている悲迦留の本能が告げていた。

友和の決意

友和が咲倉高校に着いた頃には、調度四時限目の終了を告げるチャイムが鳴り響いていた。
友和は校舎に入ると、早足で自分の教室へと向かった。途中、ぞろぞろと食堂へと向かう他教室の生徒達と行き違う。
その中に、江藤、崎山、千倉の三人組がいた。
三人の視線が友和の顔から、額の右側に張られている湿布薬へと集約される。
「病院に行っていたそうだな。どうだった？」
友和にライナーを打ち当てた張本人である江藤が、心配そうに訊ねて来た。
「いや、特にどうって事もなかったから、大丈夫だ」
友和は素っ気無く応えると、三人の脇を通って自分の教室に向かって行く。
「宇木、今日は昼飯どうするんだ？」
崎山の声が背中に掛かった。
そして、漸く友和は今朝起きてから、何も食べていない事に気が付いた。
腹の虫が今にも暴動を起こしかねなかったが、それよりも優先させなければならない事があった。
「……そうだな。少し経って俺が来なければ、食べ始めてくれて構わない」
（館林、いるのか？）
崎山に応えてから、友和が教室の引き戸を開けて中を見回すと、既に自分の家から弁当を持ち寄った生徒達が机を寄せ合ってグループを作り、昼食を始めていた。
それら幾つかのグループに友和は目を走らせるが、館林の姿はなかった。

舌打ちが友和の口から発せられる。
その時、いきなり肩に腕を回された。驚いて振り返ると、そこには千倉の銀縁眼鏡が、レンズをきらんと反射させていた。
「残念。お目当ての転校生は、ここにはいないぜ」
千倉の言う転校生が館林さゆである事は当然だったが、何故そんな事を言われなければならないのかと友和が戸惑っていると、
「これでようやく数が揃ったんだ。あちらさんを待たせるのも何だしな。さっさと行くぞ」
崎山がのしのしと友和に歩み寄ると、千倉がぱっと離れ、代わりにごつい手にがっしりと片方の肩を掴まれた。
「な、何だよ。どういう事だ？」
訳が分からない友和は、半ば引っ張られるようにして、食堂へと連れて行かれた。

昨日と同じ、細長いテーブルを前にして友和と江藤、崎山、千倉の計四名と、それと相対するように女子生徒が四人いた。
そして、その四人目の女子生徒で、友和の目の前の席に座っているのが館林さゆだった。
彼女は、これも昨日の昼食時と同じように少し緊張した面持ちで俯いている。
時折、こちらをちらりと見る仕草が今の友和に何とも言えない気持ちを抱かせ、今すぐにでもアーケードのファミリーレストランであった事を言ってやりたくて仕方が無かった。
（館林、あの銀髪の女は何なんだよ？　悲迦留って言ってたけど、お前を追っているんだろう？　それに、お前の事を人心を惑わす悪魔とか言ってたけど本当なのかよ？）
焦燥や苛立ちや色々な物が友和の頭の中で渦を巻いていたが、それを口に出せないもどかしさに友和は訳もなくがりがりと首の後ろを掻く。
「おい、ちょっとは落ち着けよ。……まあ、緊張するのは分かるけ

どさ」
友和の隣に座っている千倉が、妙な親切心を発揮している。因みに、席順は千倉の隣が崎山、その隣が江藤となっている。
違う、と言ってやりたかったが、そうして昨日みたいに雰囲気を乱すのもどうなのだろうと思ったりもして、ともかく友和は黙る事にした。
とにかく、今は何かを食べて落ち着く事だ。
友和は、自分の目の前に置かれている特盛の掻揚(かきあ)げ丼をもりもりと食べ始めた。
食べる程に食欲が湧いてくるかのようで、友和の箸は全く止まらずに、遂に物の数分で丼の中身全てを食べ切ってしまった。
空になった丼から顔を上げると、江藤、崎山、千倉、それに館林とその他三人の女子生徒の視線を一身に浴びていた。
体格の良い崎山さえ、まだ定食のおかずを一品食べ終えたばかりだった。
友和は膨れた胃の辺りを押さえながら、一人赤面した。

友和の食欲が炸裂した影響か、何故かその後の会話は盛り上がった。
そして話の話題が咲倉市の郊外にあるテーマパーク、サクラジョイワールドになった。
友和はまだ行った事はなかったが、それなりに有名との事で江藤達が如何にそこが面白いのかを力説する。
館林も興味を引かれたようで、熱心に耳を傾けている。
と、その事に気を良くしたのか、江藤は今度の週末にサクラジョイワールドに行こうと言い出した。
これには驚いた友和だったが、賛成票が瞬く間に集まり、館林の転入祝いと遅れに遅れていた友和の転入祝いを一遍にサクラジョイワールドでやろうという事になった。
遊園地で祝い事っておかしくないか？　という友和の疑問はあっ

け無く却下され、携帯電話のネット機能を使ってバスの運行時間とサクラジョイワールドの開園時間、そしてバス代や入園料といった諸々の諸経費までがあっという間に割り出された。
友和は、尋常ではない話の進み具合にたじろいだ。
「で、どうなんだよ宇木？」
江藤が聞いて来た。
江藤、崎山、それにも千倉も皆部活動は休みで、幸い女子生徒三人も暇との事。館林も、最初は戸惑ったようだったが、やがて空気を読むかのように参加の意思を伝えた。
後は、友和の承諾を残すのみとなった。
実際、その日は友和にはこれといった用事も予定もなかった。
断る理由はない。
だが、友和は心の隅で、大勢で騒ぐという事に対して抵抗を覚えた。
何かに対して裏切り行為をしているかのような、決して小さくはない罪悪感が友和の心に芽吹く。
顔の右半分を覆うようにしてテーブルに肩肘をついた友和は、
「ごめん。その日は、ちょっと行けそうにない」
そう口にしていた。
途端に、江藤達から非難の声が上がった。女子生徒達も一応に残念そうな顔をしている。
「悪い。でも、駄目なんだ」
尚も江藤があれやこれやと言って来るが、友和は自分の口にした事を翻しはしなかった。
その時、館林と眼があった。
彼女の眼には、落胆の影が見えた。だが、もう一つ別に、感情を損ねたような苛立ちが垣間見えた。
瞬間、友和は時が高速で逆戻りしたかのような感覚と共に、あの銀髪の女の事を思い出した。
館林の事を、天魔だとか人心を惑わす悪魔だと言っていたではな

いか。
（天魔……悪魔……）
心の中で、その言葉を恐る恐る呟く友和。途端に、背筋に冷たいものを覚えた。
悲迦留の前では声の限りに館林を守る側に立った友和だが、いざ彼女を目の前にすると疑念の黒雲が湧き上がってしまう。
そもそも、みんなでジョイワールドサクラに出掛けようとは、一体どういう事なのか。
館林が転入してから僅か三日目で、八人という結構な数のメンバーと一緒に外出しようという流れは、ちょっと出来過ぎのような気がする。
確かに、館林の転入日から今日も合わせて計三回、八人は一緒に昼食を食べている。それに、転入したばかりの館林はともかく他七人は、友和が転入して以来の昨年末からのクラスメートだから一応は面識もある。
しかし、それまで碌（ろく）なお喋りもしてこなかった者同士が、いきなり仲良く外出しようという話になるのだろうか？
友和の持ち合わせている常識では、普通はない。
だが、もし本当に館林に夜の空を泳ぐだけではなく、漫画に出て来る催眠術師のような人心を惑わす力があるのなら……。
それは可能だと言えるだろう。
（だが、どうやって？）
友和の心の中では、疑念と疑念が激しくぶつかり合っている。
館林は、本当は何者なのだろうか。
一昨日前に、友和は館林に「異種族同士仲良くやろう」と言った。
その気持ちは嘘ではなく、本心だ。
だが、無遠慮に人の内側に入って来て良いとは一言も言っていない。
違う者同士が触れ合うには、越えてはいけないルールがある。明確な力の差があるのならば当然の事だ。

（館林は、それを破ったのか？　だから、あの銀髪の女に狙われているのか？）

その事を問い質そうにも、今は回りに人が大勢いるので明らかに無理だ。

授業時間の合間や放課後の二人切りになった時に話し掛けるしかない。いや、そもそもその事を実行するために学校に来たのではなかったか。

友和は、決心した。

追跡者達

だが、友和の決意も虚しく、館林と二人切りの時に放し掛けるタイミングは一切訪れないまま、やがて放課後になってしまった。
館林は既にあの女子生徒三人と一緒に下校しており、友和は一人帰路についた。
（今夜、あの公園に来るかな、館林の奴）
顔を上げ、ちらりとあの公園の方角を見る友和。
確かに深夜のあの公園ならば、二人の会話を誰かに聞かれる事はない。
だが、回りに誰もいないという事は何者かに接触される危険性も内包している。
あの銀髪の女の事だ。
前もってあの公園に先回りしている可能性だってある。
いや、もしかしたらずっと友和を追跡して、館林との接触を待っているのかもしれない。
思わず左右を見回す友和。
だが、周囲に銀色の髪をした人物はなく、急に首を左右に振った友和を変人でも見るような目付きで見る咲倉高校の生徒の姿があるだけだった。
友和はばつが悪そうに頭を掻くと、足早に家路を急いだ。

帰宅した友和を迎えたのは、誰もいない宇木家の空気だった。
何時ものこの時間帯は亜紀子が夕食の用意をしているのだが、テーブルに書置きがあってそれには「スーパーに買い物に行っています。亜紀子より」とあった。
それを一読した友和は自室に鞄を置くと、着替えの私服を持って風呂場へと向かった。
アニメや漫画にあるような小型発信器のような物が身体の何処か

に取り付けられているかもしれないと訝ったからだ。
がらりと風呂場と脱衣場の仕切りである艶消しガラスを空け、風呂場のタイルの上で制服を脱ぐ。
それから、脱いだ制服の表裏をじっと見回して、手でぱんぱんと叩いた。
風呂場で服を脱いだのは、何かが付いていてそれが落ちた時に、タイルに当たった音で聞き分けるためだ。
幸い、パンツ一丁の段階になっても、発信器の類が着ている物に付着しているような事はなかった。
ふう、と安堵の息をついた友和は、徐に自分のトランクスを見下ろした。
「まさか、こんな所にある訳ないよな……」
どう考えてもある訳がない。
そもそも、制服のズボンの内側にあるトランクスにどうやって発信器を仕込むというのか。
「でも、あの館林を追い掛けてるとか言ってたしな。常識じゃ考えられない方法で……」
まるで自分に言い聞かせるかのように一人呟いた友和は、自分のトランクスに手を掛けてそろそろと降ろしてゆく。
トランクスのゴムが友和の腰骨を過ぎて、やがて太腿から両膝に達する。
友和の動きが止まった。
自分のトランクスの内側をしげしげと眺めるという行為は、何とも言えないぐらいに嫌な気分だった。同時に、とてつもなく馬鹿馬鹿しい気持ちになる。
「やれやれ、何をやっているんだよ俺は」
自嘲気味に呟いて、トランクスを穿き直そうとゴム紐を上にやろうとした時、
「お母さんいないのか。ちょっと体育で汗かいたし、シャワーでも浴びよっかな」

由季奈の声に混じって、ぱたぱたと廊下を軽快に走ってくる音が聞こえた。
（ちょ、ちょっと待て！）
友和の脳がフル回転した。
現状として、友和は殆ど裸というかトランクス脱ぎ掛けの状態だ。勿論、脱衣場と廊下を仕切る引き戸は閉めているが、脱衣場と風呂場を仕切る艶消しガラスは、別に風呂に浸かったりシャワーを浴びるつもりもなかったし、家に一人しかいないという解放的な気持ちもあって、全開だった。
（待て待て待て！　何だこれは？　いや、落ち着け。そこのガラス戸を閉めろ。曇りガラスを透かして俺の裸が由季奈に見えるだろうが、それはまあ不可抗力で、それよりも俺が声を出せば良いだけの話だ！）
「ま、待て由季――」
しかし、一瞬の逡巡が致命的な時間のロスとなって、
「さてさて、シャワーを浴びてーっと、あれ？」
がらりと開けられた脱衣場の扉と共に姿を現した由季奈と眼が合う友和。
きょとんとした顔の由季奈の眼が友和の顔から下へと下がり、途中で「ひっ」と息を飲むような声を上げたかと思うと、
「きぃぃぃやややあああああああああああ！」
由季奈の悲鳴がびりびりと風呂場内の空気を震わせた。そして間髪入れずに、
「馬っ鹿！　最低！　馬鹿馬鹿馬鹿！　友兄なんて大っ嫌いだー！」
心を引き裂く罵声を浴びせた後、ばしーんと家屋全体が揺れる程に引き戸を閉めて廊下を駆け出して行った。
一人風呂場でトランクス半脱ぎ状態の友和は、剥き出しの背中に冷たい風を感じていた。
それから数十分後、スーパーから帰って来た亜紀子の身体にコア

ラのようにしがみ付いている由季奈が、おずおずと友和の部屋にやって来た。
この時、私服に着替えた友和は自室にいた。
あんな事があった後なので下の居間には居づらい空気があったし、友和としても何とかして銀髪の女に接触されずに館林さゆと会う方法を考えなければならなかった。
こんこん、とドアが控え目にノックされて、
「友くーん、ちょっと良いかしら？」
亜紀子の声が聞こえた。
「ああ、良いよ」
友和が応えると、「ありがとうね」との言葉と共に亜紀子と、その亜紀子にしがみ付いている由季奈が部屋の中に入って来た。
「こっちに来て、友君。ね、ここに座って」
亜紀子がそう言って、部屋の真ん中辺りを指差す。
「え？　何で？」
「良いから早く。はい、座って座って」
亜紀子が率先して正座になり、その横で由季奈も正座になった。
促される形で、友和も二人に相対するように正座になる。
「友君は胡坐で良いわよ」
そう言われたので楽にする。
亜紀子は何時もの明るい笑顔を浮かべており、一方由季奈の方は暗い表情で赤い眼をしており、友和と顔を合わせようとはせずに俯いていた。
（泣いてたのか由季奈……。まあ、そうだろうなあ……）
風呂場の一件を思い出す友和。
あれが逆の立場だったとしても、友和は由季奈の罵詈雑言を受けていただろう。いや、女性で更に中学生という多感な頃だから、男の裸を見てしまった事よりも自分の裸を見られた方が相当ダメージは大きいだろう。多分、二度と口を聞いてもらえないぐらいに。
そう考えると、今回の件はまあ損というか間が悪かったのは友和

の方だったし、風呂場の艶消しガラスを引いていなかったのも悪い。
（早めに謝っとくか。毎日顔を合わせるんだからな。長引くと、お互いに良くないし）
友和がそう結論して、由季奈に謝罪の言葉を口にしようとした時、
「友兄、ごめんなさい！」
由季奈が両手を床に付けて、本当に奇麗な土下座を見せた。
指の先までぴんと張られた緊張感と、丸くなった背中に浮かぶ謝罪の念に、友和は心を打たれた。それでいて、両の耳が真っ赤になっているのは、土下座という行為に対する恥ずかしさではなく、この行為を招いた自分自身への憤りによるものだと、友和は理解した。
だから、友和は最初呆気には取られたが、苦笑を浮かべて、
「俺の方も悪かった。驚かしてごめんな」
と、言った。
「良かったわね。友君、許してくれるって」
亜紀子が朗らかに言う。
「ほ、本当に！？」
由季奈が顔を上げる。涙で眼が潤んでいるのが友和の罪悪感を突付いた。
「ああ。だから、もう泣き止んでくれないかな？　俺が本当に悪い事したみたいに感じるから」
「わ、私泣いてなんか――」
虚勢を張ろうとした由季奈の後頭部に亜紀子の手が伸びると、その顔面をぐいっと自分の豊満なバストの谷間に突っ込ませた。
「も、もがー！　お、お母さん！　く、苦しいったら！」
顔の全面をほぼ埋まらせている由季奈が、半ばパニックになって叫ぶ。
だが、娘の顔を自分の胸に押し付けているのに涼しい顔の亜紀子が、
「もう、ここで怒ってどうするのかしら。折角仲直りしたのに、また友君と喧嘩するの？　お母さん、いい加減面倒見切れないわよ？」

と、諭すように言った。
「う、うん……」
流石に良くないと思ったのか由季奈は抵抗を止めると、母の身体にそっと腕を回す。亜紀子も納得したようで、手の力を緩めると由季奈を優しく抱いた。
母娘の抱き合う姿に、友和は何とも言えない充足感を覚えた。
世間では親が子を殺したりその逆があったりと、人とは思えないような事件が起こったりするのに、宇木家ではそんな事は別世界の話のようだった。
本当に仲の良い家族だと友和は思う。本当に。
友和は亜紀子に顔を向けると、
「そのさ、由季奈から何を聞いたのかは知らないけれど、俺は別に怒ってなんかいないぜ。悪いのは、まあ無用心だった俺なんだし」
そう言ってぽりぽりと頭を掻いた。
「そうみたいね。でも、私一つ気になる事があるんだけど。ねえ、友君はどうしてお風呂場で服を脱いでたの？」
「そう！　私も聞きたい！　だって、絶対変だもん！」
途端に由季奈も顔をこちらに向けて来た。
友和は答えられなかった。
まさか、衣服の何処かに発信器を取り付けられているかもしれなかったから、とは言えない。
そんな事を言えば、変に心配されるか、もしくは友和の精神を心配されるかのどちらかだ。
だから、友和は何も言えずに押し黙る。
無言の時間が過ぎた。
「……もしかして、学校で虐められているの？」
亜紀子の顔が曇った。
由季奈が「えっ！」という顔になる。
「な、何でそういう事になるんだよ！　虐められてなんかいないよ！」

確かに、友和は教室内では浮いている存在だ。しかし、誰かに虐められているとか、陰湿な嫌がらせを受けている訳ではない。
「そうなの？　だって、虐められてる子って、自分がされた事を中々親には言えないって言うから。例えば、服とか汚されて、それを親に知られたくなくて、自分で洗ったりするらしいし」
「友兄、本当に本当に虐めとか、そういうのないの？」
亜紀子と由季奈が本当に心配そうな顔でこちらを見る。
友和の脳裏にあの銀髪が甦る。
友和は、両の手を強く握り締めた。
「……大丈夫だよ。何でもないから。ちょっと頭がずきずきしてたから、呆けてたのかもしれない」
「ちょっと！　それでも問題だよ！　ちゃんとお医者様に見せたの？　レントゲンとか撮ってもらった方が、ムグッ！」
再び、自分の胸に由季奈を押し付ける亜紀子。
「慌てないの、由季ちゃん。友君、本当に何もないの？」
「……うん、本当にそういうのはないから。心配しなくていいから」
「そうなの？」
むーむーともがいている由季奈をそのままにして、亜紀子が眉根を寄せて聞いてくる。
友和は、ただ黙っていた。
「……分かったわ。じゃ、この話はここまでっ」
それまでの深刻そうな表情とは打って変わり、両手を胸の前で合わせて語尾にハートマークが飛んでいそうな笑顔を浮かべる亜紀子。
それと、亜紀子の手が離れたのでようやく質量豊かなバストから解放された由季奈が、「ぶはっ！」と素潜りをしてきたかのように呼吸をする。
「お、お母さん！　私を本気で殺すつもり！？」
「嫌ねえ。私がそんな事する訳ないのに。ひどいわ、傷付くわ」
そう言って、亜紀子が首をぷるぷると横に振っていやいやをする。
（流石に、それは年齢的に無理があるだろ……）

友和は、口には出さずに心で呟くに止める。もし、口に出したのを聞かれでもしたら、今度は夕食まで抜かれる事になりそうだったからだ。
由季奈も口の端を引き攣らせて若干引き気味だったが、立ち上がった亜紀子に促されて手を繋いで友和の部屋から出て行く。
去り際、由季奈が少し気になっている風にこちらを見ていたが、亜紀子に引っ張られるように姿を消した。
そう思っていたら、亜紀子がひょっこりとドアの向こうから顔を出して、
「もうすぐお夕飯だから。今日も寒かったからビーフシチューにしたわ。出来たら呼ぶから、ちゃんと降りて来てね」
そう告げてから顔を引っ込めた。
友和は暫くしてから、
「……ありがとう」
小さく呟いた。

夕食時に出て来たビーフシチューは、本当に美味しかった。
亜紀子は今日が寒かったからと言っていたが、下拵えに時間がかかるはずだから前日から用意していたのだろう。
それだけの手間隙をかけているのだから、美味しくない訳がない。
友和は由季奈と一緒になって顔を綻ばせ、亜紀子の料理を絶賛した。
亜紀子も嬉しそうに微笑んでいた。
そして、楽しい食事の時間が過ぎて行って、三人で居間のテレビに映る他愛もないバラエティー番組を見ながら笑い合い……。
壁時計が十時半を差す頃、由季奈が「勉強しなくちゃ」と言って自室に行き、友和もそれにつられるように自分の部屋へ行こうとした。
「友君」
自分の特等席であるリクライニングシートに座って編み物をして

いた亜紀子が、編み目から顔を上げている。
「うん？　何？」
訊ねる友和。
「今日は特に寒いそうだから、毛布をもう一枚出したの。眠る時に使って頂戴ね」
「あ……、ありがとう」
「どういたしまして。お休みなさい、友君」
亜紀子がそう言った。
「……お休みなさい」
友和が応えると、亜紀子はにっこりと笑み綻んで再び編み目に目を戻した。
友和が自室に入ると、亜紀子の言っていた通りに真新しいグレーの毛布がベッドの上に畳んで置いてあった。
友和はそれを見ながら、何と無く勉強机の椅子に腰掛ける。
結局、これといったアイディアも出ないまま、今の時間になってしまった。
どうすれば館林に会えるのか。
彼女はおそらく、今日もあの公園にいるのだろう。だから、会いに行く事自体は何でもない。
しかし、銀髪女が友和と館林の接触する機会を窺っているかもしれないのだ。
幸い、発信器の類はなかったが、いきなり今日の昼間にあの銀髪女が友和に話しかけてきたところを見ると、何らかの方法で友和が館林の近くにいる事を知ったのだろう。
では、何故銀髪女は館林ではなく友和にコンタクトを取ってきたのか。
……いや、あの女は言っていなかったか？　館林さゆは天魔であり、人心を操る悪魔だと。
そう友和に警告した。
それはつまり、館林が銀髪女の言う通りならば、接触が出来なか

ったのだ。
人心を操られるから（・・・・・・・・・）。
そして、それを忌避しているが故に、先に友和の方に接触したのだ。
「という事は、あの銀髪女は真正面からは館林に近付けないって訳だよな」
ならば、友和が死角を突こうとする銀髪女を牽制すれば良い。それこそ館林は、いざとなれば夜の空へと自由に泳いで行けるのだから。
長距離からスナイパーで狙われたのなら流石に不味いが、先に友和が遮蔽物のある方に館林を誘導すれば良い。それに館林の事だ。そういった可能性も考慮してあの公園にいるのかもしれない。そう言えば、あの公園は冬でも緑の葉を色付かせている常緑樹が生い茂っているので、長距離の狙撃から身を守るには適している。
友和は椅子から立ち上がると、インナーを更に着込んでから何か目ぼしい物がないかと部屋の中を物色した。
素手ではあまりに頼りないので、武器になりそうな物を探したが、大した物は出て来なかった。
元々興味がなかったのでナイフ類はなかったし、文房具のカッターも到底武器になるとは思えなかった。バットや木刀といった殴打に使える棒のような物もない。
考えた末に、友和は自室を出ると階段を下りた。
居間の方は既に電灯が消されており、亜紀子も自室で眠っているのだろう。
友和はなるべく足音を立てないように玄関口まで行くと、下駄箱の上の棚から長めの懐中電灯を取り出した。
実用一点張りの黒い鉄製のボディに単一電池を縦に四本も使う奴で、握った手にずっしりとした感触が返ってくる。何でも世界各国の警察や軍隊で正式採用されているとかで、アメリカの警察官も時にはこれで暴漢に殴打を見舞うという。

振ってみると、びゅんと風切り音がして頭に当たったら確かに痛そうだ。
スイッチを入れると、白く目映い光が前方を照らし出した。
「よし」
友和はそう呟くと、スイッチを切った。
この懐中電灯は充分殴打用として使えるし、勿論ライトを相手の目に浴びせれば立派な牽制になる。何よりも見回りの警察官に見付かった場合、散歩の最中で足元を照らすのに使うと言えば何も言ってこないだろう。これでもしナイフや棒の類を持っていたのなら、最寄の交番に連れて行かれる事は間違いない。
友和は更に数回懐中電灯を振り下ろしてその感覚を身体に馴染ませた後、ある物を取りに台所に向かう。
数分後、準備を整えた友和はスニーカーを履くと、静かに玄関を開けて外へと出て行った。
亜紀子の言う通り、外に出た途端猛烈な寒さが友和の身体を包み込んだ。
友和は懐中電灯を手にしたまま軽くその場で屈伸運動をすると、館林がいるであろう公園へとジョギングペースで走り始めた。
普通に歩いて行くには寒過ぎたし、身体を温めておかないと咄嗟に動けないと思ったからだ。
普段あまり運動を身体に課していない友和は、五分もしない内に息が切れて来た。肺のあたりが焼け付くように熱くなっている。それでも友和は白い息をはきながら走り続ける。
ひんやりとした夜の住宅地の中に、友和の足音と息遣いだけが響いて行く
フレームが鉄製の懐中電灯を直に握っているせいで、掴んでいる方の手が悴(かじか)んできた。直ぐにもう一方の手で握る。手袋を持ってくれば良かったと後悔するが、友和は駆け足を強める事でそれを打ち消す。
こんな冬の夜であっても、館林はきっとスカートに素足という格

好だろう。そんな彼女に比べれば、手の冷たさなんて何でもないように思えたのだ。
見上げれば雲一つない夜空に、冬の星座群が命ある宝石のように瞬いていた。
友和は前を向くと、再度懐中電灯を片方の手に握り直して走り続けた。
幾つかの電信柱の角を曲がると、友和の目に見慣れた自動販売機の明かりが見えた。
あそこの自動販売機で友和は缶コーヒーを買ったのだ。
思えば、あれが館林との出会いの始まりだった。
数日前だというのに、友和の心に懐旧の念が込み上げて来る。
と、その時自動販売機の陰から、まるで熊のような大きな人影がのっそりと現れた。
突然の事で友和は面食らったが、何よりも驚いたのがその人影の後ろに撫で付けられている頭髪が、自動販売機の明かりを受けて銀色に輝いている事だった。
咄嗟に足を止めると、友和は懐中電灯のランプ側を手に持って直ぐに対応出来るように身構える。
（どうする？　逃げる？　突破する？）
友和は逡巡する。
ざっと見て、その人影までの距離は約三十メートル。今から全力で後ろに逃げれば振り切れるかもしれない。
「そのまま家に帰ってくれるんなら、何もしないぜ兄（にい）ちゃん」
およそ三十代であろうか、何もかもが大造りな顔の各パーツを太い首の上に載せている銀髪の巨漢は、大きくて白い歯を剥き出しにしてにやりと笑った。それから特注であろうスーツの胸ポケットからタバコの箱を取り出し、その内の一本を唇に銜えた。
体格同様の落ち着きのある仕草に、友和は呑まれたようにその場に立ち尽くしてしまった。
しかし、銀髪の巨漢は友和に構わずスーツの内ポケットからジッ

ポーのオイルライターを取り出すと、しゅこっ、と軽快な音と共に火を灯し、銜えているタバコの先に近付けた。
タバコの先に赤い光点が点ったかと思うと巨漢が長々と息を吸い込む、それに連れてタバコがみるみる縮んでいった。
それから、巨漢は満足そうに目を細めて紫煙をはいた。
怖ろしいぐらいの量の煙が巨漢の口から溢れ出た。それがずっと続くのではないかと錯覚してしまう程の量だった。
「おや？　どうしたんだ。帰るならあっちだぜ？」
巨漢は律儀に携帯灰皿をスーツの内ポケットから取り出してタバコを押し付けて消し、更にタバコをもう一本取り出すとそれを銜えた。
友和は、動けないままだった。
さっきまでは頼もしいぐらいに存在感を放っていた懐中電灯の感触が、急に小枝のようにしか感じられなかった。
「それとも、その懐中電灯でやり合おうってのか？　面白いかもしれねえが、生憎俺は手加減出来ないぜ？」
巨漢が笑みを浮かべながら、再びタバコに火を点して自動販売機に寄りかかる。
みしみしと、自動販売機の固定器具が悲鳴を上げるのが聞こえた。
「それとも、ここを迂回して公園まで行くかい？　館林さゆが待つ公園にさ」
友和は眼を見開いた。
すると、巨漢は破顔した。
「人が良いな、兄ちゃん。カマかけた途端いきなり顔に出てるぜ。まあ、悲迦留もあの公園が臭うとか言ってヤマ張ってたからな」
「悲迦留？　あの銀髪女がいるのか！」
「そういう事だ。兄ちゃんも悲迦留から聞いてると思うが、俺達は館林さゆを追っている。組織名は狛(こま)だ」
「コマ……。どうして、そこまで俺に言うんだ？」
「何、はっきりしておいた方が良いだろう？　てめえ一人じゃどう

しようもない事があるってのを思い知らされた方が、諦められるだろうよ。若い内は挫折も経験の一つだぜ？」
友和は歯噛みをする。
確かに、個人の友和が幾ら足掻こうと、組織立った連中を相手にしてはすぐに限界が立ち塞がる。しかし、友和は連中の思惑通りにするつもりなどさらさらなかった。
真正面から行って、到底突破出来る相手ではない。体格差からして歴然だ。ここは一旦下がって、機を見て行動するべきだろう。
友和は咲倉市に引越しをして数ヶ月だが、銀髪連中よりも土地勘がある事は間違いない。相手がどれだけ咲倉市の地理に明るいかは分からないが――そう友和が思考している時、巨漢はタバコを口から離して指の間に挟むと、紫煙を透かすようにして口を開いた。
「悪い事は言わねえ。宇木友和、館林さゆから離れろ。折角拾った命だ。無駄に捨てる必要はないんじゃねえのか？」
「……お前！」
「真伏（まぶせ）だ、兄ちゃん。それが俺の名だ。ちょっと兄ちゃんの事を調べさせてもらった。……酷い事故だったな」
友和は、ぎりぎりと手にしている懐中電灯を握り締めていた。鉄という材質である事を忘れるぐらいに、強く握り締める。
「去年の九月二十日午前十時頃、S県S市の市街地から山間部へと上る二車線の道路で、前から来た四人乗りの乗用車と二人乗りの乗用車が正面衝突を起こした。内、五人が死亡。生き残った一人も、右の顔面を強打した上に右の眼球を損傷、失明する大怪我を負った……。警察当局の鑑識の結果、山から降りて来た乗用車がカーブの際にスピードを落とし切れず、センターラインを越えて対抗車両に衝突したとの見解を発表した」
「……だまれ……」
友和の口から、呪詛のような声が零れ出た。
しかし、真伏は言葉を続ける。
「その唯一生き残った一人が、兄ちゃんって事だな。……それにし

ても良く出来てるじゃないか、その右眼の義眼」
「……だまれよ……」
友和は、静かに腰を落とした。
「……やる気ってんなら仕方がねえ。生憎手加減出来ないが、恨むなよ」
真伏がそう言って、今回は長いままのタバコを携帯灰皿に押し付けると、それを地面に放り捨てて――瞬間、巨体が友和目掛けて疾駆していた。
速い！
自動販売機の照明範囲から一気に夜の暗闇にまで飛び込んで来たので、友和は真伏が一瞬見えなくなった。
だが、巨体のくせに俊敏な足音だけが間違いなくこちらに迫って来る。
その時、友和の左眼が、真伏の銀髪が前方右斜めに消えて行くのを捉えていた。
実際には消えたのではなく、友和の死角――右目の視界――にその巨体を滑り込ませたのだ。そして、加速度を伴った真伏の拳が、友和の右顔面へと放たれる。
無論、直撃を受けようものならば、友和は鉄塊のような拳の一撃によって顔面諸共に吹っ飛ばされ、あるいはそのまま昏倒するか即死するかもしれない。
それほどの一撃を、友和は咄嗟に半身になりつつ屈む事で避けていた。
凄まじい風切り音と共に、真伏の拳が友和の頭上を通り過ぎて行く。しかも真伏は自分の勢いを殺せずにそのまま友和の後方を数歩行き過ぎると、意外だという顔をしてこちらを振り返った。
「見えない所を狙ったのが仇になるとはな。驚きだ」
友和は無言で真伏を睨み返す。
予測はしていた事だった。
友和の過去を知り、友和を本気で止めようとするのならば、情け

容赦なく見えない右側を突いてくるだろうと。
ならば、身体を右に捻る事で、左目で相手を捉えて避ければ良い。昨日、江藤のライナーが命中したのは、紛れもなく友和の気の緩みのせいだった。しかし、真伏の拳は眼で見て避けられる速度ではない。どう避けるかは最早賭けだったが、友和の振ったダイスは六以上の目を出してくれたようだった。
もっとも、それで危機が去った訳ではない。初手を躱した事は僥倖（ぎょうこう）と言って良かったが、二度続くとは到底思えなかった。
緊張と恐怖でどっと汗が吹き出す。
しかし、友和はそこから自分で打って出た。
真伏に走り込みざま、握っていた懐中電灯を渾身の力で振り下ろす。
しかし、垂直に懐中電灯を掲げてもその先が相手の頭にやっと届くかという程の体格差が友和と真伏との間にあった。
まるで直立した熊に挑むかのようだ。
案の定、友和の攻撃は真伏の頑強な腕によってあっさりと防がれていた。
更に真伏の片腕が閃いて、友和を掴みにかかろうとする。それを友和は手にしていた懐中電灯を反転させて、ライトの光を真伏の顔に向ける事で反撃する。
無害だと分かっているが、真伏はもう片方の手で両の眼を覆って数歩下がる。
その機を見逃さず、友和はズボンのポケットから密かに台所で用意していた物を、真伏に向かって投げ付けた。
ひゅん、と僅かに風を切る音に反応して、真伏がそれをまるで刃物のような切れ味の上段蹴りによって蹴り裂く。
瞬間、薄闇の中に粉末が舞い散る音がしたかと思うと、突然周囲に鼻腔を刺激する香辛料の匂いが溢れた。
「こいつは！」
真伏が思わず手の甲で鼻を押さえ、更に数歩後退する。が、急に

その巨体を屈めたかと思うとくしゃみを連発した。
「……銀髪女にまた会うかもしれないから、胡椒を用意していたんだ。鼻が人以上に利くみたいだったからな。お前も同じ銀髪だから、効いたようだな」
自分の試みが成功した事に、友和は拳を握る。
悲迦留はあれ程臭いを嗅ぐような仕草をしていた。癖ではなく体質によるものだとしたら、それは人以上に鼻が利くという事だ。それも、犬並みに。
「悪いが、俺も本気なんだよ」
言い様、友和は一気に駆け寄ると、くしゃみを堪えようとして堪え切れていない真伏の銀色の頭部に、懐中電灯の一撃を見舞う。
しかし、それは一瞬前に真伏の頭があった空間を行き過ぎただけで、驚いた友和の腹部には、自分のすぐわきに移動した真伏の丸太のような太い足が食い込んでいた。
「考えたみたいだが、俺は悲迦留程に鼻は利かないんだよ。残念だったな」
真伏が蹴り足を戻すまでの僅かの間、六十キロを越す友和の身体が宙に浮いていた。
友和の胃の腑が逆流し、左の眼からは涙が溢れ出した。手元から懐中電灯が滑り落ち、地面に落ちたショックで光が消える。
世界基準の品質の高さと頑丈さが売りの懐中電灯が、まるで友和の運命を表すかのように光を消していた。
数秒間、宙に浮かんでいた友和は、地に両足が着いた途端、重力に引っ張られるようにしてその場に倒れ付した。
げぇっ、と胃の中身が喉を焼きながら競り上がって来て、アスファルトの上にぶちまける。
胃酸の酸っぱい臭いと共に、嘔吐物が湯気を上げた。
更に友和は、夕食に食べたビーフシチューの未消化分を吐き出す。
左眼の奥がチカチカして、今ここにいる事が現実か夢の中なのか分からなくなる。だが、途方もなく腹が苦しいのは事実だ。

「素人にしちゃ、頑張った方じゃねえのか。まあ、これからの勉強代と思ってくれや」
真伏の声が聞こえる。
そのいかにも荒事に場馴れした声に、友和は苦しみではなく悔しさの涙を溢す。
（畜生……、畜生……畜生！）
大人と子どものような体格の差から、戦っても話にならない事は十分に分かっていた。尻尾を巻いて逃げれば、今頃は温かい布団の中にいて安全な夢の世界にいただろう。
だが、友和は真伏という名の巨漢と対決する事を選んだ。
（あいつは、目の前にいる銀髪野郎は、『良く出来てるじゃないか、その右眼の義眼』と、言いやがった！）
「……れは、……ってねえ」
友和が、冗談みたいに笑っている両膝を殴り付けて、ふらふらと立ち上がり始めた。
「立ち上がるな。血反吐吐いてねえから内臓破裂はしてねえみたいだが、二度目はねえぞ。今日を、てめえの命日にしてえのか？」
真伏が、感情を除いた鋼の地金のような声で言う。
「俺、は……、……ねえんだ……」
友和は、歯を食い縛りながら俯く首を持ち上げる。足元に転がっている懐中電灯を、握力の入らない手で懸命に拾い上げる。
真正面には銀髪の巨漢。
胃液と血でぐちゃぐちゃの口の中を半分麻痺したような舌で舐め回し、べっと地面に吐き捨てる。
友和は真伏を真っ直ぐに見据えると、浅い呼吸ながらも息を整えると、
「――俺はまだ、父さんに謝ってないんだよ！」
吼えた。
腹を手酷くやられて胃の内容物を吐き出し、ボディブローを百発食らったような地獄の苦しみの中、友和は夜の空に向かって吼えた。

「……じゃあ、その親父さんとやらにあの世で謝るんだな。折角生き延びた命を無駄にしてごめんなさいってよ」
真伏が、両の手を拳にして構える。
友和は、懐中電灯を正眼に構える。
ひどく珍妙な格好である事は分かっている。警察なんかを気にせずに刃物を持ってくるべきだったと後悔もしている。
だが、友和は今この瞬間だけは、自分の総てを賭けて立ち向かうべきだと理解していた。
一瞬、ちらりと眼だけで夜空を見上げた友和が懐中電灯のスイッチを入れるのと、真伏が地を蹴るのとは全くの同時だった。
懐中電灯の接触部は、奇跡的に生きていた。
瞬間、光の穂先が真伏の目を狙う。が、それよりも素早く真伏が摺り足によるフットワークで横に回避。
更に、残像を残す程の素早さで友和に接近。無論、隻眼の友和にその動きの三割も見えたかどうか。
瞬間、友和が懐中電灯を下から上へと振り上げた。
しかし、真伏はその巨体に見合わぬ俊敏さで、懐中電灯はおろか先端から発せられたライトすら躱した。
ライトで眼を狙ったにしては点を突くのではなく線をなぞった友和を、お粗末過ぎると真伏は嘲りを表情から隠そうともしない。
そのまま勢いに乗った真伏は腰の入った中段突きを、案山子状態の友和の胴へと狙いを定める。
「終わりだ」
低く呟いた真伏の右拳が、まるで砲弾のように放たれる。
友和は、それが自分の胸に着弾する刹那まで、眼を見開いていた。
ずん、と闇夜に鈍い音が響く。
だが、友和は微動だにしなかった。
真伏の中段突きは、僅か一センチ程の距離で止まっていた。凄まじい拳圧が突風のように友和の胸をなぶる。
ぐらり、と真伏の巨体がよろめく。

その銀色の頭から、生白い足がVの字を形作って生えていた。Vの字の一方は黒のハイソックスを穿いた脛であり、もう一方は閃くスカートに消える太腿だ。

スカートの上に眼を遣れば、そこにはセーターにハーフコート姿という館林さゆが、真伏の頭頂部に片膝を食い込ませているという格好で宙に浮いていた。

だが、着ている衣服はまるで火災現場から命からがら逃げて来たかのようにぼろぼろで、よくよくみれば彼女の両の頬がまるで平手打ちを受けたかのように腫れていた。

「館林の方も大変だったみたいだな」

自分の血で汚れた唇の端をひん曲げて、友和が笑う。

真伏の目がぐるんと白目を向いたかと思うと、ゆっくりと後ろに倒れた。

館林は友和のすぐ近くまで降りて来たが浮遊状態のままで、右手を差し出した。

友和は無感動のまま昏倒した真伏に暫く目を向けていたが、やがて館林の右手を取った。

友和の身体が宙へと浮かび上がり、館林が力強いドルフィンキックを行った途端、翼ではなくジェットが付いたような速度で夜空へと舞い上がった。

死闘公園

館林さゆが真伏に空中からの膝落としを見舞う数十分前、彼女はもやもやした気分で公園にいた。
常夜灯の近くで白い息をはきながら、今日の昼食の時の事を思い出す。
友和は、昼頃に遅れて登校して来た時から少しおかしかった。
どうおかしいのかと問われると上手く答えられないのだが、今日一日友和からのこちらを窺うような視線を常に感じていた。
友和の性格はある程度分かっているから、他人がいては話せない事があったのだろう。八割方、ナイトフィッシュに関わる事だろうし、さゆとしても無視するつもりはなかった。
夜まで待ってあの公園で話を聞こうかとも思ったが、友和の様子を見る限り急な話のようだった。
だから、友和と一緒になれる機会をさゆなりに探っていたのだ。
だが、五時限目六時限目は教室移動がなく、同じ席に座ったまま時間が過ぎた。清掃も名簿順のために別の班だったし、そのまま夕方のホームルームも終わってしまった。
どうしようかと思案していた矢先、仲良しグループの女子生徒達から下校のお誘いが来た。
咲倉高校内で設定している館林さゆのお淑やかなお嬢様キャラからすると、この誘いは到底断れなかったし、転校してから数日しか経っていないのに特定の人物を待っているからと言って、女子生徒達を待たせる事も先に行かせる事も出来なかった。
そんな事をすれば、変な噂を立てられるに決まっている。
この年頃の少女達は人の噂話が大好物であり、尾鰭背鰭など瞬く間に付いて行くのだ。
もっとも、さゆ自身そういった事が極めて少女的だと思っていたし憧れていたから、咲倉高校に来たのだが……。

ともかく、友和の物言いたげな視線に後ろ髪を引かれる思いのまま下校した後、気持ちを引き摺るようにして夜の公園にやって来たのだ。徒歩ではなく。
来てから十分程経ったが、誰かが公園に来る様子はない。
右手首にしている腕時計を見ると、十一時を過ぎたあたりだった。
「早かったかな？」
一人呟いて、白い息をはく。
しかし、どうしたのだろうか。
最初に会った時から、友和はさゆの能力であるナイトフィッシュとしての力――さゆはもうこの呼び名で構わないと感じている――を、全く怖れていない。それどころか、淡々と受け止めている。
まるでピアノが弾けるとか絵が上手いとか、英語が喋れるといった特技の一つのように。
さゆは、そんな風に自分を見る事が出来る人間を、今まで一人とも出会った事がなかった。
だから、さゆは友和の存在をとても希少なものだと感じている。
そしてそう思う気持ちが、意外と胸の奥にあった事にさゆは自分で驚いた。
普段は仮面を被ってやり過ごしたり壁を築いて堅牢なまでに他者を入れなかった心の内側に、宇木友和という存在が確固たる輪郭をもってそこにあるのだ。
途端に心に波紋が立ち、それを落ち着かせるようにたんたんと片足で足踏みをしながら、
「……あいつ、遅いわね。今日はこないつもり？」
再び白い息をはきながら呟いた。
その時、さゆの背後で何者かの足が小石を踏む音が聞こえた。
咄嗟に背後を振り返ろうとして、
「動くな！　こちらを見るな！」
鋭い制止の声が耳を貫いた。
同時に、錐のように顔の横に食い込んでいる威圧感が、改造して

威力を上げたカスタムボウガンによるものだと、さゆは経験から理解した

そして、それを手にしている者が誰なのかを完全に把握する。

「そうだった。お前達狛は、火薬の臭いが駄目なんだったわね」

さゆが、霜が降りているかのような声音で言う。口唇から零れ出る白い呼気も、吐息ではなく冷気そのものであるかのように。

「こんな所で一人呆けているとは、館林さゆらしくもないな」

ちゃり、と小石を踏む音が近付いて来る。

相手さえ分かれば対処の使用がある。その場から直ぐに泳ぎ出さなかったのは、まるで関係ない第三者かもしれなかったからだ。友和の例もある。

しんと静まり返っている公園に、小石を踏む音だけがやたらと大きく聞こえる。

ちゃりちゃりと、随分近付いてくる。そして、距離にして凡そ五メートルというところで止まった。不用意に近づき過ぎないのは、さゆの反撃を考慮しての事だろう。

（小賢しい奴ね……）

さゆは心の中で毒付く。

何故狛達がこの場に現れたのかという疑問を、さゆは頭の中から消し去る。今は問題の発生を考えるのではなく、問題に対しての対応と相応の対処を行うべき場面だ。

さゆが相手の次の行動を読むべく、耳に神経を集中させる。

「驚いたわ。まさか館林さゆが、高校に潜り込んでいるなんてね。どういうつもり？」

声には驚き以上に嘲りと憤りの感情が篭っていた。

まあ、分からなくもない。

狛連中が血眼になって探していた者が、のほほんと女子高生をやっているのだから。狛達からすればふざけるなというのが正直な気持ちなのだろう。

もっとも、さゆは狛達に遠慮する気など全くもってないのだが。

「別に構わないでしょ。私はお前達に何か迷惑でもかけた訳？」
「白々しい事を言うな飛天夜魔（ひてんやま）が！　お前の存在は、害悪でしかないのよ！」
　声の主がいきなり激したように言った。
（ぎゃんぎゃん吠えるところ、変わってないわねこの箱入り女。悲迦留だったかしら。確か、最も濃く血を引き継いでいるって話だけど）
「そんな大声出して良いの？　誰か来るわよ」
　さゆの声は、何処までも冷淡だった。
「ふん。お前を捕らえるための準備に滞りはないわ。……それより館林さゆ、お前こそどうしたのよ？　こんな夜の公園で、まるで誰かと待ち合わせでもしているような感じじゃない」
　さゆは心臓の鼓動が速くなるのを感じると同時に、その事が露見しないように気持ちを落ち着かせる。
「こんな寒い夜に、誰と待ち合わせをするのかしらね」
　そう言って肩を竦めて見せる。
「そう？　例えば、血気盛んなボーイフレンドとか、かしら？」
「血気盛ん？」
「そうよ。私、一人知ってるのよ。お前と同じ咲倉高校の男子生徒で、ちょっと頼りない感じの子をね」
「血気盛んで頼りないって矛盾してるわよ」
　言いながら、さゆは腹部が冷たくなるような嫌な予感がした。
「いいえ、途端に怒り出したのよ。お前の事を話にした直後にね」
「誰かしら？　私、そんな子知らないわ」
「良く言えたものね、館林さゆ。お前はあの少年の生涯を狂わせつつある事を自覚しているのかしら？」
「知らないわ。あの少年って誰の事よ？」
　やれやれとでも言いたげに、背後の女が首を振っているのが背中で分かった。
「この公園から少し行った所に住んでいるみたいなのよ、その子。

母親と妹との三人暮らしで、去年の事故で父親を亡くしているわ。
――知ってた？　宇木友和はその時の事故で（・・・・・・・・・・・・・）右眼を失明しているのよ（・・・・・・・・・・・・・）？」
「！」
その瞬間、さゆは全身の毛がそそけ立つのが分かった。
突然の感情の発露。
それは怒りと悔悟の年が渦を巻いて逆波を立てているような、圧倒的な感情の奔流だった。
（宇木君、眼が……。だから、あの時）
ソフトボールが顔面に当たった事は、右眼が見えない事によるものだったのか。
いや、それは偶然だ。
宇木友和は、右眼から光を失った日から、左眼だけの世界を生きて来たのだ。そうとは人に知られぬように。
実際、さゆは友和の右眼が見えていないとは一度も感じなかった。
違う。
感じなかった（・・・・・・・）のではない。感じさせなかった（・・・・・・・・・）のだ。友和がそのように相手が感じるように行動して。
それは意識的なのか無意識によるものか分からない。
だが、間違いなく言えるのは、それが友和の並々ならぬ努力によって培われたものだという事だ。
瞬間、友和がさゆに言った言葉が甦った。
初めて二人で夜を泳いだ日、
『宇木君は、頭悪くないと思うわ。前の学校でも結構良い成績だったんじゃないの？』
と、さゆが言った言葉に、
『……いや、どうだったかな。もう、忘れたから。じゃあな』
そう応えた友和の顔。
ちょっと寂しそうに微笑んだあの表情を、さゆは照れ隠しだと都

合良く受け取り、最後の言葉を胸に抱えた。
（私は、なんて愚か者だったの！）
自分自身に対する怒りの炎が、さゆの胸を紅蓮に焦がした。もし、あの瞬間に戻れるのならば、自分で自分の首を絞めてやりたい！
宇木友和は、忘れるしかなかったのだ！　父親と右眼を一瞬にして失ったその過去を！
だが、触れればじゅくじゅくと湿った血糊が指に付くだろう心の傷を、さゆは無意識に抉っていたのだ。あまつさえ、顔に笑みすら浮かべて！
それに、儚いような笑顔で応える友和！
また別の言葉が甦る。さゆを串刺しにする糾弾の矛となって。
さゆが見舞いと称して友和の部屋に上がり込んだ夜、丸坊主の男子生徒達と仲が良いのだと思っていたのにそうじゃない事が分かって、
『宇木君、一人だったの？』
と、訊ねたさゆ。
それに対して友和は真っ直ぐにこちらを見ながら、
『一人だった。友達も、作ろうとは思わなかった。……辛いとか寂しいとか思う前に、俺は……』
そう言った。
その言葉の中に大切なものを二つも失った友和の、どれだけの思いが溢れていたのか。
怒り？　悲しみ？　悔しさ？　苛立ち？　恨み？　憎しみ？
ありとあらゆる負の思いが宇木友和の内側にあっただろうに、さゆはとても近くにいながらそれを感じる事が出来なかった。
――宇木友和は空気が読めない奴で、クラスで浮いている。
突然、くすくす笑いを伴いながら脳裏を横切った言葉に、さゆはぞっとした。
その言葉は、さゆがクラスの生徒達から幾度も聞いていたものだった。中には論（あげつら）うように言う者もいた。

「――っ！」
さゆは、きつく歯を食い縛り、ぎりぎりと両手を強く握った。
彼は、宇木友和は、教室にいる誰よりも空気を読んでいたのだ。自分がどういう存在なのかを知られれば、クラスメイト達に気遣いと言う名の枷を押し付ける事になると分かっていたから。
だから、人を寄せ付けなかった。そして、右眼が見えているように演技をしていた。真実を知られないために。
（宇木君……あなたって人は……）
さゆの中で悔恨（かいこん）の暴風が吹き荒れる。
「あらあら、知らなかったって感じね。でも、良いじゃない。どうせまた、使い捨てるんでしょ？」
「……使い捨てる、ですって？」
「そうよ。今までそうやって生きて来たんでしょう？　お前は妖術で人の心を狂わせ、己の傀儡にする飛天夜魔。夜の天女と謳われていたのは遠い過去の話。今は、人の世に仇なす天魔……。ここで、お前との宿縁を終わらせる！」
悲迦留がボウガンのトリガーに指をかける動作を、さゆは全身で知覚していた。
（……違う……、彼が、言ってくれた名が……ある。……私は……）
さゆが背後を振り返るのと、悲迦留がボウガンを撃ったのは同時だった。
刹那、空気を貫くか細い音と共に銀色に光る矢がさゆの胸に向かって放たれる。
しかし、さゆの身体はひらりと紙が翻るかのような動きでそれを躱すと、彼女の背後の木に矢が突き立った。
小さな舌打ちと共に、悲迦留が距離を取ろうと後退する。だが、それよりも素早くさゆが、機械的な優美さをもって悲迦留に肉薄する。
「くそっ！」
悪罵が悲迦留の口から発せられる。ボウガンを掴んでいない方の

手が後ろに回され、次の瞬間には刃渡り二十センチ近いナイフが握られていた。
「っああ！」
気合の声と共に悲迦留の握るナイフが銀の軌跡を描いて、地上一メートル上の宙を泳ぐさゆへと振り下ろされる。しかし、これもさゆが事前に予期していたかのように急制動と方向転換によって完全に回避。
銀髪を振り乱しながら、悲迦留はさゆを追い掛けつつナイフを振るう。
だがそれを、まるで児戯であるかのように平然とあしらうさゆ。
まるで鮫が海中で獲物を弄ぶかのように、悲迦留の周りを泳いでみせた後、地上四メートル程の高さに浮かび上がる。
「それは何の真似かしら？」
血が凝ったような紅の瞳で、悲迦留を見下ろすさゆ。
「これか？」
悲迦留がそう言って自分の目許を指差して見せる。
悲迦留は、両の眼を閉じていたのだ。
「宇木友和に教えてもらったのよ。お前の妖術を破る手段をね！」
「眼を瞑っただけで妖術を破るですって？　何を言ってるのかしら」
小馬鹿にしたようにさゆが言う。だが、悲迦留は変わらず眼を瞑ったまま不敵に笑ってみせる。
「どうした？　私を操って見せたらどうなんだ。その不吉な赤い眼でな！」
言い様、ボウガンの矢を放つ悲迦留。
それは眼を瞑っていても的確にさゆの居場所へと放たれる。
舌打ちをしてさゆは身を翻して矢を避けるが、矢がそのまま宙を飛んで行って途中で爆ぜた時には流石にその方向に眼を向けた
ボウガンから放たれた矢が、繊維が焼けた時の刺激臭を発しながら黒コゲとなって落ちていく。
ナイフとボウガンを手にしている悲迦留が、公園中に響き渡る程

の声を張り上げる。
「決して逃げられはしないわ！　既にこの公園には結界を張ってある！　妖術も効かない！　もうお前は捕らわれた毒蛾よ！」
「……犬に成り果てたとは言え、流石は直系の大神（おおかみ）の血かしらね」
さゆが髪を束ねていたヘアピンの一本を取ると、それを頭上へと放り投げた。
途端に、ヘアピンが超高圧の電流に触れたかのように突然紫電を灯らせて、ボウガン同様そのまま黒コゲになって下に落ちた。
紫電が灯った虚空は尚もばりばりと音を立てながらオゾン臭を撒き散らしており、淡い光の波紋が広がっている。
光の波紋はまるでドームのように展開して公園一つを丸々覆っている透明の壁を明らかにした。
紫電が消えると、そこは再び透明なまでに夜空を見せている虚空があった。
さゆの眼が、ヘアピンをぶつけた箇所から、地上に立つ悲迦留へと向けられる。
悲迦留はボウガンを構え直すと、矢の装填を手早く行い、矢を放った。
さゆはそれを苦もなく避ける。
そして急降下。
悲迦留の顔が目前に迫る。
さゆは悲迦留がカウンター気味に突き出したナイフの切っ先を、これも紙一重の差で避けた瞬間、ぎゅんと駒のように旋回した。
加速度と遠心力が付加されたさゆの右足の先が、悲迦留のこめかみを急襲する。
これを寸でのところで避ける悲迦留。そして両手を地面に着けた四足の体勢で着地をすると、そのままの格好で唸りを上げてこちらを睨むその顔には、何時の間にか犬歯が覗いていた。
「やれやれ、私の事を散々言っておきながら、お前も本性が出ているじゃないの。そろそろ人の姿も維持できないんじゃないかしら？」

「――黙れ。お前を倒す事が、私の使命だ！」
言い様、悲迦留は着地した際に落としたナイフを拾い、それのグリップを口で咥えると、四つ足で駆けた。
先程よりも数段俊敏な動きで。
翻弄するように左右に跳ねて見せた後、さゆの近くに生えている太い幹を三角跳びし、まるで曲芸のようにさゆの間近にまで跳躍した。
悲迦留が口に咥えているナイフの白刃が、さゆの喉元に迫り――
これもさゆが巧みに空中で身を翻し、悲迦留のナイフを避けている。
「飼い犬風情が……。今更、野生に回帰したところで夜を舞う私を捕らえられる訳がない」
さゆが顎に手を当て、嘲るように言う。
だが、悲迦留は一旦ナイフを口から外すと、中腰になって構えを取りながら、襟元のピンマイクに向かって頷き、それから犬歯を剥き出しにして笑った。
「それはどうかな。今、私の仲間が宇木友和に接触したぞ」
「！」
流石に動揺を隠せないさゆ。
「――は！　お前が人間の少年一人に動揺か！？　可愛いものだな、館林さゆっ！」
悲迦留のボウガンから矢が放たれる。
心がざわついて戦いに集中出来ないせいか、さゆの動きに切れがない。
矢の幾本かがさゆの身体を掠め、衣服を切り裂いた。
苦悶にさゆの顔が歪む。だが、さゆは宙で身を翻すと、悲迦留に急接近した。
再びボウガンの矢がさゆの身体を切り刻むが、構わずに直進。
悲迦留のナイフがさゆを狙う。
それを間一髪で避けつつ、さゆは悲迦留を捕らえようとする。

掴み上げ、一気に上空へと引っ張りあげて落とせば、それで終わる。
その怖ろしさを身で知っているかのように、悲迦留のナイフがややヒステリックなものになる。その隙を突こうとさゆの二本の手が悲迦留の身体に伸びる。
と、ワンテンポ置くようにさゆが一旦悲迦留から距離を取った。
地上すれすれで、僅かに宙に浮くさゆ。
「舞台を整えたにしては、私も舐められたものだわ。お前一人で、私の相手をしようといつつもりかしら？」
悲迦留の唇の端が捩れ上がった。先程よりも更に伸びた犬歯が露出する。
「そうさ。これは私の矜持だ。昼間のお前を捕らえた所で、私の心は満たされない。飛天夜魔のお前を夜に捕らえてこそ、この屈辱を雪げるんだ！」
「さもしい根性ね。まさに犬そのものだわ」
さゆが、再び悲迦留に向かって行く。
それに対してナイフを繰り出す悲迦留。
瞬間、さゆは躱すと見せ掛けて悲迦留の懐に飛び込んだ。
咄嗟に悲迦留はボウガンを捨てると、空いた手でさゆの喉元を掴み上げ、そのまま地面へと引き倒した。
背中を地面に叩き付けられ、息を詰まらせたような音を上げるさゆ。すかさず悲迦留が馬乗りの体勢になり、ナイフを構えた。
一方、組み伏せられた形のさゆは悲迦留との体格差もあってか、なかなか浮かび上がれない。
ナイフがさゆの胸元に突き立てられようとして、一瞬妙な間が空いた瞬間、さゆの手がナイフの刃を直に握っていた。
「馬鹿な！　何の真似だ！？」
悲迦留が驚きの声を上げた。
眼を開けてはいないが、ナイフに伝わる感触とじわりと滲み出ている血の臭いから、さゆがどうやってナイフを止めたのか理解した

のだろう。
さゆはナイフを素手で握ったまま、口許の端を吊り上げる。
「……本当に犬ね。捕らえるですって？　私を殺さないのかしら？
いえ、本当は殺せないんでしょう？　生かして捕らえるよう、そう飼い主に言われてしっぽを振る下品な犬が！」
怒りが驚きに勝ったのか、悲迦留は鬼の形相になってさゆの頬を平手で叩いた。
更に数発叩いた後、抵抗力の弱まったさゆを立ち上がらせた後に蹴り飛ばす。
さゆはそのままごろごろと地面を転がったが、やがてゆらりと立ち上がった。
ナイフを握った手を掲げてみせる。
結構深い傷なのか、さゆの手は傷口から溢れ出る血によってぬらぬらと黒い手袋を嵌めているかのようだった。
「何の真似だ？」
悲迦留が訝るように言った。
両頬を腫らしたさゆが、笑ったからだ。しかし、悲迦留は両眼を開けていない。
匂いが、まるで何かの薬品を思わせる甘ったるい匂いが、さゆの方から漂ってくるのだ。
耳を澄ませば、先程から湿った物を絞るような音が聞こえる。
にち、にちゃ、と。
何の音かと確認しようにも、悲迦留は眼を開ける事は出来ない。
もし、開けてそれを確認したのなら、驚愕で目を見開く事だろう。
さゆは、ナイフで追った傷口を自らの手で更に抉り、湧き出る血をこそぎ集めているからだ。
くふふ、とさゆは笑う。
それは自傷行為による異常な精神高揚の現れのようにも思えたが、違う。
狂的なまでの、怒りだった。

粘性のあるさゆの血が、手の平一杯に溜まっている。
さゆはふわりと浮かび上がると、片方の手の平に溜まっている自分の血をもう一方の手で少し掬い、まるで種を撒くかのようにぱあっと周囲に撒き散らしたのだ。

悲迦留は大いに慌てた。
過去には山神であった大神の末裔であり、その血を濃く引き継ぐが故に凄まじい嗅覚の持ち主が悲迦留だ。
しかし、それが今は完全に裏目に出た。
甘く、生臭い独特の臭気が、辺り一面に満ちて鼻が利かないのだ。
ここで眼を開ける事も考えたが、悲迦留はそれをしなかった。さゆの妖術が眼によって行われると友和の件から確信している悲迦留は、それに縋(すが)ったのだ。
つまり、それだけ館林さゆの妖術が怖ろしかったのだ。それに、結界がある。
(如何に館林さゆだろうと、これを無傷で越えるなんて事は――)
瞬間、凄まじいスパークが起こって悲迦留の瞼に幾重もの光の輪が浮いた。
流石にこれには驚いて悲迦留が眼を開けると、そこには凄まじい放電を起こしながらも結界を直接突き破ろうとしている館林さゆの姿があった。
まるで間近で花火が上がっているかのように、光の輪が途切れぬ波紋となって公園を包む見えないドームを伝っていく。
「ま、待ちなさい！　お前、死ぬ気なの！？」
驚愕が、悲迦留の口から館林さゆを僅かながら気遣う発言をさせていた。
だが、当の館林さゆはそんな言葉が聞こえる訳もなく、眩いばかりの放電に顔を青白く照らしながら、結界を突き破ろうとする。
公園の各所に張り巡らしていた結界を構築している呪符が、あまりの力技に抵抗し切れず燃え上がった。

「や、止めなさい！」
悲迦留がボウガンを構える。
その時、結界に片腕の半分を通したさゆと眼があった。
幽鬼のように青白い顔の中で輝いている二つのブラックルビーが、悲迦留の瞳に吸い込まれた。
思わず息を呑んだ悲迦留は、妖術にかかるまいとナイフを握っている手の甲で自分の頬を叩く。
しかし、そんな事をしている間にもさゆは頭を、次に肩を通してしまい、胸が通った後は魚が魚篭（びく）から水面へと逃れ出るように、するりと結界の外へと抜け出ていた。
それに前後するように全ての呪符が燃え尽きて、結界は消失した。
悲迦留は、ただ手を拱いてそれを見ていた訳ではない。
悲迦留はボウガンを構え、眼で館林さゆに照準を合わせていた。
だが、妖術にかかっているかもしれないという疑心暗鬼が、悲迦留の指を硬直させていた。
さゆが振り返りもせずに瞬く間に泳ぎ去ってから暫くして、悲迦留は慌てて真伏の存在を思い出したかのように無線を飛ばした。

夜が明けて

互いの手を取り合いながら夜の空を泳ぐさゆと友和が向かった先は、全く見知らぬ高層マンションの一室のベランダだった。
およそ三十階はあろうかというマンションの住民達は、もう遅い時間のせいもあってか、窓の明かりが殆ど灯ってはいなかった。
さゆと友和が着いたその一室も、窓に明かりはない。
「このマンションがどうかしたのか？」
友和も横にいるさゆと同じように宙で立ち泳ぎをしながら、訊ねる。
「黙って。今、呼んでいるから」
さゆが暗い窓を凝視したまま言った。
友和は言われた通り、口を閉じた。代わりに、さゆの横顔を見詰めた。
腫れていた頬は、冷たい夜の空気に晒されたせいか、最初見た時よりも幾分引いたみたいだ。しかし、髪の方が深刻だった。
初めは気付かなかったが、さゆの衣服同様に髪も火に炙られたかのように、ちりちりになっているのだ。
さゆの奇麗な長い黒髪を知っている友和は、今夜彼女の身に何が起こったのかを想像して、心が暗くなった。
「大丈夫よ。宇木君が思ってる程、酷い目に合ってないから」
振り返らずにさゆは言った。
「……そうか」
「宇木君の方は、どうなの？」
「俺か？　……俺は……」
友和は思わず腹部を撫でる。真伏の蹴りを食らって悶絶しかけたが、それ以上に手傷を負った訳ではない。
だが、もしもあの時に真伏の拳を真正面から受けていたのならば、確実に病院送りかもしくは死んでいた事は十分理解している。

偶然さゆの姿を夜空に捉えて、懐中電灯の明りで居場所を伝えるのが遅かったらと、思い出すだけでも背筋が震えてくる。
しかし、あの時友和はどんな事があろうとも背中を見せたくはなかったのだ。
その時、厚いカーテン越しに人の姿が映った。
思わず警戒する友和に、
「平気よ。彼女は、私の味方だから」
そう告げるさゆ。
ざっ、とカーテンが開けられて窓一枚越しに現れた人物の姿が明らかになる。
友和は思わず声を出していた。
そこに現れたのは、ソフトボールの打球を右眼の上に受けて昏倒した時に、保健室で世話になった咲倉高校の女性保険医だった。

保険医は薄手のネグリジェにカーディガンという格好だったが、突然の友和達の空からの来訪にも驚いた様子なく、二人を自宅に招き入れた。
さゆが慣れたように靴をベランダで脱ぐと、先に部屋の中へと入って行く。慌てて友和も後に続く。
保険医はワンルームのマンションに一人暮らしなのか、他に誰かがいるような雰囲気はなかった。
さゆは玄関まで行き下駄箱に自分の靴を置く。友和も後に続くので、調度二人は狭い廊下で行き違う形になった。
「館林、これってどういう事なんだ？」
「説明は後にしてもらえる？　いい加減、縮れた自分の髪に我慢がならないのよ」
そう言うと、保険医に案内されながら浴室の方へと入って行った。流石にこれ以上は付いて行く訳にもいかない。
何となく手持ち無沙汰な状況で、友和は居間にあるソファに落ち着きなく腰をかけた。

座り心地は悪くはなかった。
女性の一人暮らしにしては実用的なものばかりで調度品の少ない居間を見回していたが、これからの事が気になった。
さゆの様子からここは安全なのだろうが、銀髪連中がどういう手段を講じてくるか分からない。
氏名を突き止めてあの自動販売機で半ば待ち伏せをしていたのならば、まず間違いなく友和の家の住所も調べ上げてる筈だ。
一瞬、家で寝ている筈の亜紀子と由季奈の身を案じて、すぐにでも戻りたい気持ちになったが、どうにか押さえ込んだ。
今下手に動く事がどれだけ危険なのか、十分に理解している。狛達は恐らく、この咲倉市全体に網を張っているはずだ。そして、友和の家やさゆの住まいにも、連中の手の者が待ち受けているに違いない。
亜紀子達の事を考えると胸が張り裂けそうな思いがしたが、友和は必死で堪えた。連中の狙いは、あくまで館林さゆ一人のはずだ。直接的な接触を受けた友和はともかく、亜紀子や由季奈にまで連中の手が及ぶとは考え難い。
そう判断してどうにか心を落ち着かせた友和は、壁掛け時計に目を遣った。
大きなアナログの時計で、二本の針が既に深夜の二時を告げていた。
途端に疲労と眠気が襲って来て、友和は猛烈なまでに瞼の重さを覚えた。
何とか起きていようとするが、睡魔はどうしようもないぐらいに友和を翻弄し、数分後には静かな寝息を立てていた。

束の間の夢の中で、友和は父親の努（つとむ）と再会していた。
あの日、長らく続いていた仲違（なかたが）いに決着を付けるべく、ドライブに出掛けた友和と努。
現実では気まずい空気が車内を満たしていた筈なのに、夢の中で

は友和と努の会話は不思議と打ち解けたものだった。
父親に対しては普段から仏頂面の友和も、何故かこの時は子どもの頃に戻ったかのように、次から次へと言葉を発していた。自分でも何を言っているのか分からないのだが、夢の中特有の整合性があってまるで気にならない。
それを横で聞きながら、努は鷹揚に頷き、時には笑いを返す。
二人を乗せた車は、秋の紅葉に燃える山中を気持ち良いぐらいに走り抜けて行く。
空は何処までも青い。
ふと、言葉を止めて車外の風景に目を奪われていた友和に、努が落ち着きのある声で、
「……友和、新しい母さんは嫌いか？」
と、訊ねた。
一瞬、返答に窮した友和だったが、
「……そんな事ないよ。亜紀子さんは俺に良くしてくれるし、由季奈も本当の妹みたいに俺に懐いてくれてる。母さんが死んで一年もしない内に、全然知らない子連れの女と再婚だなんて聞かされた時、最初は許せなかったけど、……俺も、もういい加減に子どもじゃいられないしさ」
夢の中の友和は、亜紀子の配慮で咲倉市に引越しをして以来、二人がずっと友和の事を気に掛けてくれていたのを思い出しながら応えた。当然、その時には努はもうこの世にはいないのだが、友和の目の前にいる父親は、そんな事を全く感じさせないぐらいの存在感があった。
「そうか……。二人を受け入れてくれて、ありがとう。それとな、友和。――どんな事があろうとも、お前は強く生きるんだぞ」
努がハンドルを切りながらさり気無くそう言った時、前方から来た車がカーブを曲がり切れずにセンターラインを大きくはみ出してこちらに迫って来た。
突然、全てが静止画像になってしまったかのように、世界が凍り

付いた。
いや、極々僅かに、まるで蝸牛（かたつむり）の歩みのようにゆっくりと、ひどく緩慢に動いていた。
友和は悲鳴を上げてその場から逃げようとするが、呪いが施されたかのように身体が少しずつしか動かない。
その中で、友和は見た。
父親の努が、迫り来る死の塊を目の当たりにしながらも懸命なハンドル捌きで、運転席側を盾にし、助手席側を、己の息子を守ろうとしていたのを――。
頼もしく凛としてさえ見えた父の横顔に、友和は声にならない声で叫ぶ。
今まで言いたくて言いたくて、それでも言えずにいた言葉を――。

「――んっ！」
友和は飛び起きた。
眼の辺りが異様に熱くて、手で触れてみたら濡れた感触が返ってきた。
それで漸く、友和は自分が泣いていたのだと知った。頬に熱い水滴が伝った感触があって、途端に気恥ずかしくなって袖で乱暴に拭った。
「男の人が泣くと、凄いのね。びっくりしたわ……」
突然の声にびっくりした友和は、涙でぼうっとする視界から声の主を探した。
目の前にいた。
父親と再会する夢を見たものだから、気が動転して全く分からなかった。
そこには、見知らぬショートヘアーの少女が立っていた。両の頬に貼られている湿布薬が痛々しい。見れば、衣服から覗いている手足には、所々に包帯が巻かれている。特に、右手はまるで大火傷を負ったかのようにぐるぐる巻きだった。

「え？　ええと、君は、誰？」
友和が訊ねた途端、少女はとても可愛らしい顔を顰めて、
「もう、やっぱり！　絶対似合ってないわよこれ！」
と、憤慨した。
すると、保険医が現れて、
「もう遅い時間ですので、大声は慎みなさって下さいませ」
と、口許に人差し指を立てて慇懃に言った。
その畏まった口調に友和が眼を白黒させていると、保険医がこちらにやって来て、
「さゆ様にございますよ。館林さゆ様。どうか、新しいヘアースタイルを褒めて上げて下さいませんか？」
と、囁いた。
「え？」
思わず声を上げる友和。
さゆは更に渋面になった。
「さゆ様、私に髪をお切りになられている間、貴方にどう思われるか、それを頻りに気になさっていましたの。自分の身体の事もそっちのけで。どうか、一言二言褒めてあげていただけませんか？」
保険医が懇願するように言ってきた。その横で、さゆが眼を剥いていた。
しかし、保険医のさゆに対する接し方がまるで従者のそれのようで、保健室での彼女を見知っている友和は少し気後れした。
不意に悲迦留の言っていた妖術という単語が脳裏を過ぎった。
今の状態の保険医は、さゆに妖術を掛けられているのだろうか。
それとも何か別の理由があって。
「宇木君、何時までも女の子を待たすものじゃないわよ」
その時、いきなり保険医が砕けた口調になった。
それは保健室で初めて会った時と同じ、とても気さくだが馴れ馴れしさのないもので、友和の疑念を一瞬和らげた。
今はそれだけで十分だった。

友和は妙な緊張感を意識しながらも、ぷいっと横を向いているさゆに向かって、
「あの、その……似合ってるよ。……似合い過ぎて、一瞬誰だか分からなかったぐらいだ」
と、言った。
さゆは眼だけをこちらに向けて、
「本当？」
と疑わしげに訊ねた。
「あ、ああ、本当だって。可愛い可愛い」
「何だか、子どもをあやしているみたいな言い方ね。……まあ、良いわ。あの犬女の結界をごり押しで抜け出たんだし、この程度で済んで良かったわ」
さゆは随分と短くなった髪に手櫛を通しながら、呟くように言った。
「犬女？　悲迦留の事か！　結界って何だ？」
友和が驚き慌てたように聞いてきた。
さゆは公園での出来事を掻い摘んで話した。
悲迦留が公園全体に展開していた結界――アニメやゲームの中にしか存在しないと思っていた――を無理やり擦り抜けたという件になった時、友和は驚愕を通り越してただ呆れた。
「それで、宇木君はあの大男と何をしていた訳？　まさか、夜中に自動販売機の前でダンスをしていたとか言わないでしょうね」
「その冗談は笑えないな……」
友和はそう言って苦笑する。蹴られた腹部には未だ疼くような痛みがあったし、衣服を捲れば地図上のアメリカ大陸のような青痣が浮き上がっている事だろう。
友和も、病院に行った帰りに悲迦留の接触を受けた事を簡潔にさゆに伝えた。そして、夜にあの公園にいるだろうさゆに会いに行こうとして、真伏という大男に邪魔をされた事も口にした。
「無茶するわね……でも、まあ、無事で何よりだわ」

そう言ってさゆは小さく鼻を鳴らすと、ちらりと友和を一瞥してから話を続けた。
「狛という組織はね、私が一度徹底的に叩いた事があるのよ。その時の怨みつらみがあるものだから、あの犬女、しつこく食い付いて来て離れない訳。……宇木君の様子からして、随分と連中から話を聞かされたみたいね。私の事とかも色々言われたんじゃない？」
友和は表情を暗くした。
急に喉の奥がつまったような感じになって、一言一言をやっとの思いで口にする。
「……言っていたよ。お前が、天魔だって。人の心を操る、悪魔だって言っていた」
「そう……。ねえ、宇木君。もし、狛達が言っている事が本当だったらどうするの？　私が、本当に悪魔だったら」
友和は目を白黒させた。まさか、さゆ本人からそんな言われ方をするとは思ってもみなかったのだ。
さゆはじっと友和を凝視している。
気まずさを覚えた友和は、思わずさゆから顔を逸らすと、ぴたりと保険医と眼が合った。
そもそも、この保険医は何なのだろう。
さゆは味方だと言っていたが、一体どういう意味なのか。
答えがそこにあるかのように、友和が保険医の顔を見詰めていると、
「さゆ様は、本当に悪魔なのですよ」
保険医が屈託なく言った。
途端にさゆが噴き出した。友和も「えっ？」と声を上げてしまう。
「ちょ、ちょっと！　いきなり何言い出してるのよお前は！」
さゆが驚いて保険医を睨むが、彼女は涼しい顔でぴしりと人差し指を立てて、
「悪魔……。その名の通りにある者からすれば、さゆ様の存在は、心の在り方を根底から覆してしまう悪魔そのものなんです」

と、言った。
友和は暫く黙ったまま、保険医の口にした事を考えながら「悪魔」という単語を呟いていたが、やがて、
「そう……か。その力が、悪魔なのか。人を操りたいという欲望を、誘惑する悪魔……」
重いものをはき出すように、友和は呟いた。
「人は、悪魔に弱い者です。例え清廉潔白な人格者であっても、他人を思いのままに操れる力があると知ったのならば、どう思うでしょうか。それが、政治の世界にも通じている者だったら」
「まさに、悪魔の力だ……。狛達の裏に、そんなでかいのがいるとはな」
「狛は、時の朝廷に山神の地位を失墜させられてからずっと、とある裏社会の重鎮に飼われて生きて来た一族なのよ。お陰で権力者との繋がりも太いわ。さながら飼い犬のリーダーみたいにね」
吐き捨てるようにさゆが言う。
「時の朝廷って……その頃から狛がいるのなら、それに追われている館林って、一体歳幾つ」
瞬間、世界が凍り付いた。
「……私の一族は、長命なの……。ただ、それだけよ」
どすの利いた声を響かせるさゆに、ただ友和は自分の失言を悔いる他なかった。
「……こほん。ともかく、これからどうするつもり？　まあ、宇木君は巻き込まれた形だし、狛は私だけが狙いだから、何もしないで家に帰ればそれで終わる話だけれどね」
「そうは行かないんじゃないか？　現に、俺は真伏とかいう大男に襲われたしな」
「狛も馬鹿じゃないから、自分達から事を大きくしようだなんて思ってない筈よ。警告だったんじゃないかしら？　私から手を引けって」
「それにしては、殺す気満々だったぞ」

真伏との死闘を思い出して、友和の額に冷や汗が滲む。
「それでも、宇木君はもう、この事は忘れた方が良いと思うわ。幾ら私でも、宇木君を二度も助けられる自信がないから」
「俺がいても邪魔になるって事か？」
辛そうに、さゆが俯く。
「……端的に言えばその通りよ。宇木君は、家に帰った方が良いわ。お母様と妹さんがあなたの帰りを待って――」
「父さんに言われたんだ。――どんな事があっても、強く生きろって」
友和の眼が、強い力の光を帯びる。
さゆも友和の眼を見詰めながら、震える口先から言葉を紡いだ。
「強く生きるという意味がどういう事なのか、一旦棚の上に置いて言うけど、……今から、とても酷い事を宇木君に言うわよ」
「ああ」
さゆは少し言葉を詰まらせた後、口を開いた。
「……あなたの死んだお父様は、あなたが折角助かった命を無駄にするなんて、決して望んではいない筈よ」
友和の表情が凍り付いた。
「館林……どうして父さんの事を」
「あの銀髪女に言われたのよ。……事故の事を。それと、宇木君の右眼の事も……」
友和は右眼に手を遣りそうになって、静かに下ろした。
今度はさゆが、気まずい思いをしているかのように俯く。
と、友和を伺うように視線を上げたさゆの眼が大きく見開かれた。
友和が、穏やかな微笑を浮かべているからだ。
「でも、館林は戦うんだろ？」
友和の言葉に、さゆは両の手を拳にした。きつく、きつく。
「うん。もう、逃げないって決めたから。ちょっとずるしたけど、高校にも入った。私、学校行きたかったし、友達も欲しかったから。上辺だけの友達じゃなくて、心の底から笑い合える本当の友達が」

「――俺は、会えたんだ」
突然の友和の言葉に、さゆは戸惑う。
「俺は、あの事故から半分死んでた。ずっと半分の世界で生きて行くんだと思うと、何度も死にたくなって。――だけど、館林に会えた。俺の中身を曝け出せる、本当の友達に会えた」
視界の端で、保険医が口許を手で隠しているのが見えた。動揺か歓喜か嘲笑か。
構うものかと友和は言葉を続ける。
「俺も、戦う。どんな事があっても、お前を連中の悪魔になんかさせない」
「宇木君……さっきも言ったけど、あなたの存在は私にとって邪魔になるだけなのよ」
「それなら、悲迦留が俺の事を相当警戒していた意味が分からない。第一、あんな大男が何故俺なんかを待ち伏せしていた？　つまりそれは、館林の力がとても怖いって事だ。館林のもう一つの力によって、何かが起きた協力者が」
そう言って、友和は保険医の方を向いた。今になって気付く。彼女の瞳も、さゆと同じように紅くなっている事に。
保険医がにっこりと笑うのとは対照的に、さゆは困惑したように下唇を噛んだ。
「どういう風に解釈しているのか知らないけれど、私は宇木君をスーパーマンにしてあげる事は出来ないわよ。それに、あの犬女にも仕組みが殆どばれたから、戦い方を変えなければいけないし」
「ばれたから変えなければいけない？　どういう事だ？」
聞き返した友和に、さゆは言い難そうにしながら、悲迦留が公園で取った行動を説明する。
悲迦留はさゆのもう一つの力である人を操る能力を、眼と眼のコンタクトによるものと看破していた。そして、その証明は友和によってなされたと言っていた。
つまり、隻眼の自分にさゆの異能は効力を発揮しない――と、友

和は認識した。
その事を実際に口にしないのは、さゆの気遣いなのだろう。
確かに落胆はあったが、心の中に転がったそれは意外に小さな物で、自分の胸に誓った決意があっさりと蹴り飛ばしていた。
友和の眼に宿る力が衰えないのを見て、さゆは短くなった髪の先をいじりながら、一息ついた。
それから、
「……そうね、宇木君の状態だと、精々、痛みの鈍化を促進するぐらいね。それと、筋力もちょっとだけなら上げる事が出来るわ」
と、言った。
「本当か？　だけど、俺には効かないんじゃないのか？」
「それは、人によるのよ。本当に意志の強い人間が頑強に抵抗するのならあまり効かないし、その逆もあるって事」
「つまり、俺から進んで催眠術にかかろうとすれば」
「催眠術って言われると複雑ね。……ともかく、宇木君の心次第な訳。ただし！」
さゆはきっ、と友和を睨むように見据えると、
「絶対に無茶をしないと私に誓いなさいよ。人間は、些細な事で死んじゃうんだから。それから、格好付けて私を助けようだなんて思わない事！　危ないと思ったら、私に構わず絶対に逃げなさいよ」
そう言うなり、頭の両側をさゆに掴まれた。目の前にさゆの顔があって、友和は戸惑う。
「ああもう！　眼を泳がせないで、私の眼を見てしっかり見て。真っ直ぐに……そう、そのまま……そのまま……」
鼻同士が触れ合う程の距離にあるさゆの顔に友和はどぎまぎするのを覚えながら、紅と黒が混沌としているさゆの瞳に見入られる内に、一瞬気が遠くなった。
不意に自分が落下していくような感覚に襲われ、ぶるり、と全身が震えて眼をぱちくりさせる。
さゆが手を放して立ち上がった。

「終わったわ。もう、夜も遅いし寝て良いわよ。それと宇木君が寝るのはそこのソファの上だけど、我慢して。上にかける毛布とかは用意させるから」
そう告げると、自分はすたすたと居間を出て行った。
その後を保険医が、
「今夜はさゆ様と同じベッドなんですよ」
うふふ、と笑いながら後を追った。
一人居間に取り残された形の友和。
いきなりの事で状況の整理が上手く出来なかったが、どうやらさゆの妖術が効いているらしい。しかし、何よりも自分のしたい事が出来るという喜びの方が大きかった。
今はともかく、眠って体力を回復させよう。
保険医が暖房を入れてくれたようで、居間の中は比較的温かい。これなら毛布とかもいらないな、と思っていたらストンと落ちるように眠りに就いた。

友和が再び目を覚ますと、既に日が出ており、室内は陽光のお陰で明るくなっていた。
保険医が用意してくれたのだろう身体に掛けられていた温かい毛布と暖房のお陰で、真冬だったが寒い思いをせずに済んだ。
壁時計に目を遣ると、時刻は朝の七時半を差していた。
一瞬、遅刻すると思って友和の頭はパニックに陥りかけたが、今日が土曜日である事を思い出して安堵し、そして漸くこれまでの事を振り返る事が出来た。
考えてみれば、さゆと出会ってまだ一週間も経っていないのだ。それなのに、あの夜に館林さゆを夜の公園の虚空に見掛けたあの時から、友和の世界は変わった。根本から。
最初はぶれていた物が直ったのだと思った。
存在そのものがファンタジックなさゆを受け入れる事で、自分もそちら側に行けると思っていた。

でも、それは違うのだと友和は気付いた。
夜に空を泳ぐ少女が、死んだ父を甦らせる事はない。
父は死んだのだ――。
その現実を受け入れる事で、友和の足は大地に立った。館林さゆが存在するこの現実の世界の地に。
その時、居間の扉が開かれて、普段着姿の保険医が現れた。
「おはよう。ソファのベッドだったけど寝心地はどうだったかしら？」
屈託なく笑いかける保険医に、友和の方が戸惑う。
気さくな性格は、元々なのかそれともさゆの力によるものだろうか。
その事を聞きたくもあったが、気後れする分の方が大きくて、友和はただ頭を下げた。
「いえ、こちらこそ急に押し掛けて申し訳ありません」
「良いのよ。女の一人住まいだし。ちょっと待っててね。すぐに朝ご飯作っちゃうから」
そう言って保険医がキッチンの方へと姿を消す。
その時、友和は亜紀子と由季奈が家で自分の帰りを待ち侘びている姿を幻視した。二人は、友和がいない事をどう思うだろうか。
そう考えていた矢先、友和の携帯電話が勢い良く鳴った。
びくりと身体を震わせてから、ズボンのポケットに仕舞っていた携帯電話を取り出す。
折り畳み式のシンプルなデザインのそれは、まるで友和を叱責するかのようにアップテンポな曲調の着メロを鳴らしまくっている。
折り畳んだ表面側の小さなディスプレイには、『ユキナ』の文字が表示されていた。
二つ折りになっていたのを開けて、通話ボタンを押す。
「もしもし？」
友和が電話に出た途端、
『友兄の馬鹿！　今何処にいるのよ！』

第一声から怒られた。由季奈だった。相当怒っている。
「……いや、まあ、元気だよ」
お茶を濁すように友和が言うと、更なる怒声が返って来た。
『馬鹿馬鹿！　何処にいるか聞いてるのよ！　朝起きたら友兄いないってお母さん言うし、書置きも何もないからどうしたんだろうって凄い心配したんだよっ！　ああ、お母さん大丈夫だから！　友兄電話に出たから！　え？　ちょ、ちょっとお鍋噴いてる！　弱火弱火って、きゃー！　な、何で強火にするのよ！』
由季奈の声が一旦遠ざかったと思ったら、向こうの携帯電話を置く音がして、それから由季奈と亜紀子がきゃあきゃあと揉めている声が聞こえてきた。
友和は思わず頭を掻いた。
それから少しして、
『友君、私よ』
耳に馴染む亜紀子の声がした。同時に、心の底から安堵の気持ちが湧いてきた。昨夜は二人の身には何もなかったのだ。
「あ、亜紀子さん……」
『今何処にいるの？』
「え、えっと、咲倉市には、います……」
『市内にはいるのね。分かったわ。ご飯の用意はしておくから、用事が終わったらちゃんと帰って来なさいね』
「はい……。亜紀子さん、心配かけてすいませんでした」
『男の子ですものね。そういう事もあるわ。じゃあ、お家で待ってるから』
携帯電話の向こうにいる亜紀子がそう言って、通話を切った。
友和は通話時間と発信者名の『ユキナ』が表示されている液晶画面を暫し見詰めた後、携帯電話をズボンのポケットに仕舞った。
その時、さゆが居間に姿を現した。
流石に昨日着ていた衣類はぼろぼろのようで、裾を相当折り曲げたデニムとぶかぶかのトレーナーを着ていた。

一晩経過しただけだが、よくよく見るとさゆの怪我は大分良くなっているようだ。その証拠に、手足に見えている絆創膏の数や包帯の量が減っている。
「凄いな。傷とか、もう治ってるんじゃないのか？」
「まあね。私は、人間とはちょっと違うから。怪我の治りも早いのよ」
少しばつが悪そうに髪の毛の先をいじりながら、さゆは言った。
「気になるのか、髪？」
「当たり前でしょ。自分の髪なんだから。こればかりはどうしようもないわ」
幾分強い語気で言われ、友和は居心地の悪さを覚えた。さゆが悲迦留の結界を無理やり突破したのは、友和のせいでもあるのだ。
「気にしなくて良いわ。私が自分でやった事だし。ねえ、さっきの電話、家の方からのでしょう？　一旦帰った方が良いと思うわよ。まさか白昼に堂々と狛達が襲って来るような事はないだろうし」
「でも、保健室の先生が朝ごはん作ってくれてるみたいだから」
「そうなの？　うーん、私もお腹減ってるし、サクラジョイワールドの事もあるから食べておこうかな」
「サクラジョイワールド？」
友和が聞き返した途端、さゆが突然凄い剣幕になってこちらを睨んだ。
「な、何だよ？」
「そうよ。宇木君、どうしてサクラジョイワールドの誘いを断ったりしたの？」
「え？　まあ、予定が」
そう応えながら、実際は予定なんてまるでない事に気付く友和。
じぃーとこちらを見ているさゆ。何だか、急に機嫌が悪くなったようだ。そう言えば、今日がサクラジョイワールドに行く日だったのか。
「その、今日だったのか？　サクラジョイワールドに行く日にちっ

て」
「そうだけど、何か？」
「何かって……狛達がいるだろ？　危なくないのか？」
「人が多い方が返って安全よ。それに戦い方を変えるって言ったでしょう。手は早い内に打たないと」
「それとテーマパークに行く事とどう関係があるんだ？」
「つべこべうるさいわね！　行かない人には別に関係ないわよ！」
急に声を張り上げるさゆ。
「な、何で怒り出すんだよ」
だが、さゆは答えずにふん、と鼻を鳴らすとリビングの方に行ってしまった。
「サクラジョイワールドか……どうするかな、今日は」
実際、友和は今日一日をどうするかまるで決めていない。
江藤達がテーマパークの事で色々話し合っていた時、友和は誰かとわいわい遊ぶ気にはならなかった。
そうする事がまるで自分の罪を喚起するかのように……その時、友和は大切な事を忘れているのに唐突に気が付いた。
ずっと前から、自分がしなければならなかった事を。
真伏に言い放った言葉が、友和の脳裏に甦る。そして、今朝の夢から醒める直前の友和が、父の努に伝えなければならなかった言葉を。
友和は勢い良く立ち上がると、尻のポケットから半ばはみ出しかけていた財布を取り出し、中身を確認した。
札の数と小銭の額を目で確かめた後、携帯電話を取り出して、アドレス帳から自宅のナンバーを選択。通話ボタンを押す。
数回の呼び出し音の後、
『はい。もしもし、宇木でございますが』
丁寧な口調で亜紀子が出た。
「亜紀子さん？　俺です。友和です」
思わず、携帯電話を握る手に力が篭る。

『あら、友君どうしたのかしら？』
「俺……今日父さんに会いに行きます」
携帯電話の向こう側にいて受話器を握る亜紀子が、静かだが揺るぎのない喜びの情を溢れさせているのが気配で分かった。
『……そう、良く決心したわね。とても偉いわ。本当に頑張ったわ』
普段からおっとりしていて何事にも動じないように見える亜紀子の声が、少し震えていた。
それから友和は、携帯電話を握る手に力を込めながら、一字一句紡ぐように言葉を続けた。
「それと、亜紀子さん。俺の机の一番下の引き出しに、分厚い辞書があります。そこに俺の――父さんの生命保険のお金が全部入った銀行の通帳があります。判子も、その近くにあります。……父さんの、命の値段です。受け取って下さい」
『友君……』
「あの時の俺は自分の事しか、いや自分の事さえも分からなくなってて……自棄になって俺を引き取ってくれた亜紀子さんに酷い事言って……」
『引き取ってだなんて言わないで。あなたは、努さんから託された大切な息子ですもの。どんな事があっても守ってみせるわ。それに友君が気に病む事なんて一つもないの。だって、愛する息子の反抗期と思えば何だって許せたし、夜泣きが凄くて一睡もさせてくれなかった由季奈に比べれば、全然可愛らしいものだったわ」
「……凄いな。本当に凄いよ。父さんが、好きになったのも分かる」
何時しか、友和の左眼から一条の涙が零れ始めていた。
『そう言ってもらえると、とても嬉しいわ』
溌剌（はつらつ）としている亜紀子の声。
まるで快晴の空を渡る風のようなその声に友和は背中を押され、
「これからは亜紀子さんを、『母（かあ）さん』って呼んでいいですか？」
そう、口にした。
一瞬の間が空いた後に、亜紀子の息を呑む声が聞こえた。

「もちろん……もちろんよ友君。ああ、本当に嬉しいわ。私、本当に男の子と女の子の子の兄妹が欲しかったの。……友君、由季奈の、本当のお兄ちゃんになってくれてありがとうね」
「はい……」
「それと、その銀行通帳は受け取れないわ」
「え、どうして？」
『私は、友和という最高の贈り物を努さんから頂いたもの。これ以上貰ったら、強欲な女だなって言われて努さんに離婚されちゃう』
「亜紀子さん……」
『母さん、でしょ。友和』
「……うん、母さん」
嬉しさと恥ずかしさが混じった何とも言えない幸福感に満たされながら、友和は携帯電話を切った。
友和はそのまま居間を出ようと歩き出して、廊下のすぐ近くでさゆが棒立ちでいるのが眼に入った。
「……何してるんだ？」
「ななな、何でもないわよ！」
やたらと動揺しているさゆ。
「もしかして、俺の声聞こえてたか？」
友和が訊ねた途端、凄い速さでさゆの眼が泳いだ。友和が眉間にしわを寄せて暫く見ていると、
「ご、ごめんなさい。立ち聞きするつもりは、なかったんだけど……」
先ほどまでの苛々は何処に行ったのかというぐらいに恐縮した態度でさゆが白状した。
「いや、いつかは話そうと思っていた事だから、そんなに気にする必要ないさ。元々、亜紀子さんと由季奈とは、血は繋がってないんだ。再婚同士の連れ子同士って事なんだけど、父さんが死んだ後、ちょっと大変だったんだよ」
「それって、私が聞いて良い話なのかな……」

「ああ、そうだな……館林がナイトフィッシュの秘密を教えてくれたから、チャラになるかな？」
「それ、もう貰ってる。缶コーヒー」
そう言われた途端、友和は吹き出してしまった。
「ああ、そうだったな。……何だ、俺が後生大事に抱えてた秘密って、缶コーヒー一本と同じだったのかよ。今まで勝手に悩んでたのが本当に馬鹿みたいだ」
自嘲するように言うと、友和は自分の過去を語り始めた。
友和の父の努が事故死し、友和自身も右眼を失明する大怪我を負った後、莫大な保険金が友和の銀行口座に振り込まれた。
その事を嗅ぎ付けた親族が、友和の養育権を巡って随分と生臭い言い争いをしたのだ。この時の友和は病院のベッドの上で、生死の境を彷徨っていたのだから、酷い話だ。
葬儀の喪主は、既に婚姻届が出されていたので妻である亜紀子が務めた。
喪主を代わろうと言い出した努の兄弟達がいたが、それを亜紀子は頑なに拒み、再婚したばかりで夫に先立たれた妻としてではなく、宇木家の新たな家長として毅然と執り行った。
葬儀で涙一つ見せなかった亜紀子に、親族達が「血も涙もない鬼女」「大金が入って内心ほくそ笑んでいる」「友和もその内怖ろしい目に会うんじゃないのか」と、散々に陰口を叩いたという。
この事は、退院して間も無く由季奈から聞かされた。
由季奈の悲憤は凄まじく、自分の母が血の繋がりもない者達にこうも言われなければならない事が本当に我慢ならなかったようだ。
しかし、亜紀子は言ったという。
もし、少しでも気が挫ける事があれば、今も病院のベッドの上にいる友和を守る事が出来ないと。
亜紀子は、やましい気持ちを抱いて友和に会おうとする者を誰一人として許さなかった。病院側に自分と由季奈以外の人間が友和と絶対面会する事がないように徹底させた他、由季奈も毎日学校が終

わる頃には病院に行って友和の看病をした。
友和が病院を退院するまでの二ヶ月間それが続き、ようやく親族達も胴欲な舌で友和を絡め取る事を諦めた。
亜紀子と由季奈の母子(おやこ)が宇木の姓となって最初にしなければならなかった事は友和を守る事だったが、戻って来た当の本人は心身共に深刻なダメージを負ったままだった。
父の死と、右眼の失明。
特に、友和は数年前に病死した努の前妻の印象を強く引き摺っており、亜紀子に対しては冷たかった。
必死の思いで守ろうとした友和が、自分に対して時には攻撃的な態度を取る事を亜紀子は半ば予想していただろうが、それでも胸を抉られる気持ちだった事は間違いない。
友和がぽつりと呟いた「亜紀子さんも、俺が親父と一緒に死ねば良かったと思ってるんだろ」と言った時、その顔は穏やかだったが心は無残にも引き裂かれたのを見て取った。すぐそばにいた由季奈は眼に一杯の涙を溜めて、今にも殴り掛かりそうになるのを必死で抑えていた。
亜紀子は穏やかな母の表情のまま、咲倉市への引越しを提案した。
友和は、行く当てもないし自分自身がどうしたいのかという目的もなく、ただ状況に流されるままに頷いた。
こうして、宇木家の三人は咲倉市へと移り住んだ。
時間が経つに連れて、亜紀子と由季奈の労わりと気遣いを素直に受け入れられるようになり、友和は自分の足で立つという実感を得た。
しかし、友和は心の何処かで亜紀子と由季奈の母子と自分との間に明確な一線を引いていた。
それを今、友和は亜紀子を自分の「母」と認める事で、その一線を消し去ったのだ。
「……何だか、物凄い心の成長に立ち会ったのかしら、私……」
「成長したかどうかは分からないけど、今の俺にはすべき事とやら

なければならない事の二つがある。それを強く感じている」
「お父様に会う事と、もう一つは、何なの？」
すると、友和はじっとさゆを見詰める。
真摯（しんし）とも思えるその眼差しに、さゆは緊張感を募らせる。
友和は不意に笑んで見せると、
「狛と決着を付ける時は、必ず呼んでくれよ。それじゃ、俺は行くから」
そう言って、玄関口へと向かった。
「ちょ、ちょっと何よ！　気になるじゃないの！」
慌てるさゆの声が背中にかかる。
だが、友和は振り返らずにさっさと靴を履き終えると、ドアを開けた。
途端に冷たい風が頬を撫でて、淡い日の光が目の前に広がった。
急激に頭の芯が覚める。全身の血流を感じ、力が指の先にまで満ちているのが分かった。
「――またな」
振り向いてさゆにそう言うと、友和は歩き出した。

友和が外に出たのを見届けたさゆは、キッチンに向かった。
そこではエプロン姿の保険医が、鼻歌まじりで朝食を作っている。
その背中にさゆは言う。
「宇木君の分はいらないわ。出掛ける所があるみたい」
「そうなんですか？」
保険医は振り返らず、フライパンの中身を巧みにひっくり返している。どうやらオムレツを作っているようだ。
ジャグリングの玉を扱うようにオムレツが宙を舞う光景を見詰めながら、
「……凄いな、あいつ……。それに比べて、私は今まで」
「何ですって？　何か言いましたか？」
さゆの呟きを耳聡く聞いていた保険医が、わざわざ振り返って訊

ねる。
「な、何でもないわよ！　お腹ぺこぺこなんだから、さっさと作りなさいよ！」
「何ですかもー。さゆ様怒ってばっかりですー。そんなに宇木君とお出かけ出来なかったのが悔しかったんですか？」
途端に、さゆは自分の頬に血が昇るのが分かった。
つかつかと歩み寄ると、無言のまま保険医の脛にローキックを見舞った。

父との再会

宇木努の墓は、他県の山間部に広がる霊園の一角にあった。
咲倉市の駅から何度目か分からないぐらいに電車を乗り継いだ後にタクシーも使い、かれこれ四時間掛けて到着したそこは、身も凍る程の冷たさに満ちていた。
山を背に抱き、拓けた大地に整然と幾百もの墓石が並んでいる。そのどれにも、つい最近降った雪が笠のように積もっていた。
森閑とする空気の中、友和は墓石と墓石の間の道を歩いて行く。幸い、道にまでは雪が積もっている事はなく、履いてきたジョギングシューズを雪でぐしゃぐしゃにする事はなかった。
花も水桶も持たない友和は、自分一人しかいない墓地を白い息をはきながら歩いて行く。
片手に霊園の管理人に書いてもらった地図を見ながら歩く事十数分後、友和は父の墓の前に立った。
墓石には「宇木努之墓」と彫られており、淡い冬の日の光を受けて黒い大理石が厳かに鎮座していた。
友和は、一度もここを訪れた事はない。
努は元々宇木家とは疎遠であり、先祖代々の墓に入る事を良しとしなかったらしい。その事を酌(く)んで、亜紀子は努のために墓を用意したのだが、それが宇木の親族の不興を買ったりもしたそうだ。
しかし、父の墓は亜紀子が納骨して以来数ヶ月間誰も訪れていない筈だったが、荒れた様子もなくただ静に深い黒の色合いを称えているように見えた。
友和は墓石に一歩歩み寄ると、手で墓石の上に積もっている雪を退けた。布巾か何かあれば良かったと思うが、構うものかと素手で焼香台に積もっていた雪もどける。
あっという間に手が冷たさで悴み、真っ赤になったが友和は気にしなかった。

そうしてから、友和は父親の正面に立った。
黒い大理石に、友和自身の姿が映っている。そこに友和は、努の姿が見えるような気がした。
「……父さん、俺、やっと会いに来れたよ」
墓石に語りかける友和。
霊園に、友和の声がしんと染みてゆくようだった。
「待たせて、ごめん。俺、どうしても謝りたい事があったんだ。父さんに」
その時、遥か上空にある太陽の光が強さを増したように思えた。コートを羽織っている友和の背中に、温かい熱が宿る。それがまるで父の手の平のように思えた友和は言葉を続ける。
「亜紀子さんとの再婚、俺、子どもみたいに反対して本当にごめん。本当は、父さんが死んだ母さんを置いて一人幸せになるのが許せなかったんだ。……でも、誰だって幸せになる権利はあるのに、俺、変に突っ張って父さんを困らせて……」
友和は墓石の両側に手を置くと、父の名が刻印されている墓石に額を付けた。
風雪に晒されて芯まで冷たい筈の墓石が、真冬の陽だまりの中でまるで人の熱を持っているかのように温かかった事に、友和は自然と涙していた。
友和は、物言わぬがじっとこちらを見守ってくれている父を抱きながら、我を忘れて慟哭(どうこく)した――。

一頻り泣いた友和は、鼻を啜り上げてばつが悪そうに笑った。
「今度は、母さんと由季奈の三人で会いに来るよ。またね、父さん」
友和がそう言って歩き出そうとした時、不意に何か言うべき事を思い出したように振り返り、
「父さんに貰った右の眼、大切にするよ。それと俺、――強く生きるから」
そう言った。

墓石に映る自分の姿の後ろで努がゆっくりと頷いているように見えたのは、決して気のせいではないと、友和は胸の奥に刻んで歩き出した。

激突

友和が咲倉市に戻って来た頃には、もう六時を過ぎていた。
冬至を過ぎたとは言え、まだまだ一月の夜は早く、咲倉市全体が藍色のドームに覆われているかのようだった。
「こっちは、曇りなのか……」
電車の車窓から空模様を眺めていた友和は、ぽつりと呟いた。
ふと、今朝の事を思い出し、さゆ達はサクラジョイワールドで楽しく遊んだのだろうか、と思いを馳せた。
いきなりショートヘアになったさゆを見て仰天している江藤達を想像し、友和は少し笑み綻んだ。
もしも、また遊びの誘いが来たのなら今度は断らないでみよう、と友和は思う。
電車が、友和の降りる停車駅に滑り込んで行く。
自動ドアが開かれ、降りる人波に揉まれるようにして、友和はホームへと降り立った。
人いきれと吹き渡る風による駅のホーム独特の臭気が友和の鼻腔を刺激する。
瞬間、昨日までは極々見慣れた筈だった駅の風景が、全く異なって友和の眼に映った。
それまで自分がどれだけ世界を閉じていたのか、父への謝罪という経験を経た友和はまざまざと感じさせられた。
世界は、友和を拒絶してはいなかった。それを、友和は強く感じる。
友和が今ここで感じているものは、愛郷の念を百倍に拡大したものとでも言おうか、ともかく眼に映るもの全てをいとおしく思える情動の迸りだった。
そして友和は、長い旅をしてきたような不思議な感慨に包まれていた。

喉の奥から、沢山の言葉にならぬ言葉が溢れ出しそうだった。それは、友和が事故に会った後に心の底に沈めていった、無数の輝かしい言葉の原石達だった。
それは友和の口から出た途端に宝石となって、友人達の間には笑いの風を送り、家族に優しさに満ちた温もりを齎す筈だった。
瞬間、その言葉を、まず一番に初めに贈りたい人物の姿が、友和の脳裏を過ぎ去った。
夜空を、まるで飛翔するかのように軽快に泳ぎ渡る少女を。
友和は思わず苦笑を浮かべると、改札口の方へと歩き始めた。
階段を上がり、ズボンのポケットをまさぐって切符を取り出し改札を通過しようとした時、改札口手前のちょっとした空間に見慣れた顔がある事に気付いた。
向こうも友和に気付いたらしく、
「あれ？　宇木じゃないか」
と、声を掛けてきた。
さゆや他の女子生徒と一緒にサクラジョイワールドに行った筈の江藤、崎山、千倉の三人組だった。
「よう、元気か？」
友和が手を上げて三人に近付いて行く。
すると、普段とは打って変わって親しげな友和の行動に意表を突かれたような顔になった。
「館林達とサクラジョイワールドで遊んでたんじゃないのか？」
訊ねる友和だったが、三人は何故かまじまじとこちらを見ていた。
「何だよ？　俺がどうかしたか？」
「……いや、何つーか、ちょっと今日の宇木おかしくないか？」
「おかしいって何だよ」
「いや、笑ってる訳じゃないんだ。何だか、なぁ？」
そう言って、江藤が残り二人に相槌を求める。崎山と千倉も、江藤の意見には賛成だという風に首を上下に振った。
そんな遣り取りをしている三人が妙に可笑しくて、友和の方が笑

ってしまった。
途端に、三人組はぎょっとした顔になった。相当豪快な笑い方をしたらしい。
「なあ宇木、お前やっぱり変だぜ。何かあったのか？」
気遣わしげな表情をする江藤。崎山や千倉も似たような顔をしている。
「何にもないよ。それより、サクラジョイワールドに行ったんだろ。面白かったか？」
今にも肩を組みかねない勢いの友和に押されて、三人は今日行ったサクラジョイワールドの感想を口にする。
サクラジョイワールドは、遊戯施設としては日本を代表する遊園地に二、三歩及ばないが、堅実な経営方針と国内最大級の大観覧車のお陰で、この不況の世にあってちゃんと利益を出していた。だが、三人の話題は年頃の男子高生らしく一緒にいた女子生徒達が主だった。
「そうそう。凄いニュースがあるんだよ。館林さんの事なんだけどさ、今日いきなりショートヘアになってたんだ！　あれは本当にビックリした！」
江藤がそう言うと、崎山と千倉も同意するように頷き合っている。
勿論、その事を知っている友和は「ああ、そうなのか」と軽く受け流す。
すると、三人は今にも溜め息をつきかねないぐらいに落胆した。
「いや、やっぱりお前は変わらねえな。凄っごく可愛らしくなってんだから。見たら絶対トキメクって！」
力説する江藤。こいつはまあ、放っておこう。
友和は崎山と千倉に眼を向ける。
「結構楽しんだみたいだな。で、三人がここにいるって事は、そのまま流れ解散って訳か？」
すると、崎山がちょっと困ったような表情になった。千倉も似たような顔をしている。

訝った友和が訊ねると、
「それがな、急に館林さんが先に帰ってくれって言い出したんだよ。女子達もきょとんとしてたな。元々閉園の八時近くまでいようって話だったのに」
と、崎山が言った。
「何か、サクラジョイワールドに忘れ物したとか言ってて。結構きょろきょろしてたな。手伝おうかって言ったんだけど、『これは私だけにしか分からないの』って断られたよ」
と、千倉が言う。
「って事は、今も館林だけがサクラジョイワールドにいるのか？」
「分からないよ。忘れ物が見つかれば帰るんじゃないのか？」
友和は暫しの間考えると、
「館林の奴、俺に何か言ってなかったか？」
そう訊ねた。
瞬間、三人の頭の上に、物の見事にはてなマークが浮かんだ。
「どうして館林さんが宇木に何か言う必要があるんだよ。ていうか、お前今日他の用事があるって言ってなかったか？」
当然のように、江藤が詰問調で言い寄って来た。と、それを崎山が慣れた漫才のように片腕で押さえ込みながら、
「そう言えば、何か言ってなかったか？　館林さん」
そう言って、千倉に降る。
あ、と千倉も思い当たる事があったらしく、友和を見た。
「確か『ここの近くには、神社でもあるのかしらね』とか言ってたんだよ。いきなりそんな事言われたから、俺らぽかんとしたけどさ」
（神社？　……鳥居、神主、巫女、おみくじ……狛犬？　……！狛か！）
そう結論付けた友和は、さゆのメッセージに思わず苦笑する。だが、約束は守ってくれたのだ。
「サクラジョイワールドで解散したのって何時だ？」
友和は一番近くにいた千倉に聞いた。

「えっと、今が六時半だから……三十分前ぐらいかな？」
デジタル式なのだろうゴムバンドの腕時計を見ながら、千倉が応えた。
「分かった、ありがとう」
友和は礼を言うと、くるりと踵を返して駅前のロータリーに向かった
その場に残された三人は、友和の行動の意図が分からず、その場に立ち尽くす他なかった。

駅前ロータリーでタクシーを捕まえた友和は、サクラジョイワールドに向かってくれとドライバーに告げた。
五十過ぎのまだらに白髪頭のドライバーは、タクシー内にあるデジタル式の時刻表示に眼を遣り、一瞬怪訝そうな顔になった。
今の時刻は七時十五分であり、サクラジョイワールドの閉園は八時なのだ。
後部座席のシートに背を預ける友和をルームミラーで見た後、合点が行かない様子だったがタクシーを静かにスタートさせた。
休日の夜という事もあって道は多少混んでいたが、友和がサクラジョイワールドに着いたのはそれから二十分過ぎた頃だった。
ドライバーに料金を支払い、タクシーから出た友和を待っていたのは、更に冷たさを増した冬の夜の風だった。
手足がかじかんでしまいそうな寒さの中、友和は白い息をはきながら前方を見据える。
閉園時間ぎりぎりだったが、入出場口からはまばらだが人の出があった。
その中にさゆの姿はないか友和は目を凝らすが、彼女の姿はなかった。
狛が現れたという事だから、さゆは戦うつもりなのだろうが、一体ここでどうするつもりなのか。
この前は悲迦留が公園に結界を張ったと言っていた。だが、今回

はテーマパークが丸々一つだ。さゆを同じ方法で捕らえようとするのは不可能だろう。もっとも、狛達もそれは分かっている筈だろうから、今回は別の手段を講じてくるだろう。
ともかく友和はサクラジョイワールドの入り口へと向かったが、チケット売り場の従業員に入場制限の時間を過ぎているのでもう園内には入れないと言われてしまった。
頭を掻きながら、友和は入り口を背にして考える。
流石に園内では客の追い出しが始まっているだろうから、おそらくさゆは中にはいないのだろうか。いや、それとも既に夜の空にいるのだろうか。
友和が顔を上げ、夜空を見る。
曇天の夜の空は、ネオンが賑やかに灯っている大観覧車を縁取るかのような暗闇色に染まっていた。
「館林、あそこにいるのか？」
呟いた友和はその時、自分の背後に近付く存在に気が付いた。
瞬間的に後ろを振り返って距離を置く。自然と両手が胸の前辺りに持ち上がっており、構えを取っていた。
「へぇ。何を齧ったんだかしらねぇが、それなりに様になってんじゃねえか」
聞き覚えのある声を発した銀髪の巨漢は、友和の構えを見てそう言った。
「真伏……」
友和は真伏から更に距離を取ろうとして、更に複数の人の気配を感じた。
腕の構えはそのままで視線だけ動かして確認すると、十名近い黒服の男達が友和を包囲していた。黒服達は真伏程の体格ではなかったが、何かしらの格闘技に精通しているのだろう独特の気配を放っていた。
「もうプライドがどうこう言ってる場合じゃなくなったんだよ。悪いが、一緒に来てくれねえか、兄ちゃん」

「嫌だと言ったら？」
「力尽くってのも嫌いじゃねえが、兄ちゃんは断れねえと思うぜ。何しろ、館林さゆは今、俺達が捕らえてるんだからな」
「な、何だと！」
驚愕する友和。もう既にさゆは狛の手に落ちているというのか。
激しい虚脱感に見舞われながらも、友和は正面にいる真伏を睨み据える。
「良い眼になったじゃねえかよ、兄ちゃん。……まあ、ついて来てくれや」
そう言うと、真伏は一人で歩き始めた。サクラジョイワールドの係員専用の入り口に向かうと、さっさとその向こうに消えてしまった。
友和は慌てて真伏の背中を追いながら、自身もサクラジョイワールドの中へと入っていった。

真伏の後を追って到着した先には、無数の照明ライトに照らされているさゆの姿があった。
そこは調度屋外の広いホールのようになっていて、扇状に観客席が段々に広がっていて本来ならば何らかの催し物が行われるのだろうが、今は罪人を裁く壇上のような様相を呈していた。
さゆは私服姿だったが、余程抵抗したのだろう、衣服が酷く乱れていた。後ろ手に縛られていて、両眼には厚手の布のような物で目隠しがされていた。
「館林っ！」
友和は館林の姿を見た刹那、ホールの中央へと走り出そうとした。前方には真伏の岩のように分厚い背中があったが、構わずその脇を擦り抜けようとする。
実際、友和は真伏の横を何の問題もなく通過した。真伏が何もしなかった事を怪訝に思う気持ちもあったが、今は館林の事で頭が一杯だった。

さゆも友和の声が聞こえたのだろう、ぴくんと身震いをした。
だが、友和の足がホールの中央の一端に踏み入れたところで、自分の意思で止まらざるを得なかった。
ボウガンを手にし、セットされた矢の先をさゆの頭に狙い定めた悲迦留が現れたからだ。
「こんばんは、宇木友和君」
悲迦留はそう言って笑って見せた。
友和はそこに、狂的なものを見たような気がした。念願叶った事が嬉しくて仕方がないというよりも、少し頭の箍(たが)が外れてしまったような感じだった。
「まさか、あなたが本当に来るとはね。てっきり、館林さゆのブラフだと思っていたから」
「何の事だ？」
「こいつがね、言うのよ。『宇木君が必ず助けに来るから』って。大した自信だったわ。本当だったら、すぐにでも動けなくして運び出す予定だったんだけど、散々抵抗した挙句にそんな事を言うものだから、ちょっと確認したくなったのよ。で、あなたが登場した訳。……ねえ、私に教えてくれないかしら？　あなた達が何を企んでいるのかを」
友和は悲迦留の言葉を考えた。
（館林は、俺が助けに来ると言った。その理由は何だ？　第一、俺は何の準備もしていないし、そもそも俺がここに来る確証だってないだろうに……。……待てよ……。俺が来ても来なくても、館林が出来た事が一つだけあるじゃないか）
友和は、館林の作戦の一端を垣間見たような気がした。
「それよりも、俺の質問に答えてくれ。あんた達は、何で館林を付け狙う？」
「質問しているのはこちらの方だけど？」
悲迦留が矢尻でさゆの頭を小突いてみせる。痛かったのだろう、目隠し状態のさゆが顔を顰めた。

「止めろ！　……分かった。教えるから、館林に乱暴な事はするな」
すると、悲迦留はくすくす笑ってから一歩下がった。しかし、ボウガンは変わらずにさゆの頭部を狙ったままだ。
友和は一度唇を湿らせると、口を開いた。
「この場所を考えてくれ。ここは、咲倉市の郊外にあって、広い空間がある」
「だから？　それが何なのかしら」
「分からないか？　あんた達が館林を追い詰めたつもりで、実はその逆だって事に」
「それはつまり、私達が館林さゆの罠に嵌まったという事？　じゃあ、それがどういう事か教えてもらえない？」
「良いさ。まずは、あんたがそうやって館林の眼を塞いでいる事だ。相当怖いんだな、館林の眼が」
「そうね。でも、もう理屈が分かっているのだからどうという事はないわ。それに、この事はあなたに感謝したいぐらいよ。見えないあなたの右の眼にね」
ふん、と友和は鼻を鳴らした。今となっては、それしきの挑発など何の意味も成さなかった。
「けれど、それは俺に対してだけだぜ。普通の人間は両方の眼が見えてるんだ。館林が、今までに一人も咲倉市の誰かに『眼』を使わなかったって言えるのか？」
友和は咲倉市の保険医の事を思い出しながら言った。
「つまり、今の時間にこんな広い場所に大勢の人間が現れても、それは何ら不自然な事じゃないんだ。況してや、ここはテーマパークだ。閉園過ぎたとは言え、数十人近い人間がいたとしてもおかしい事じゃない」
「応援が駆け付けるって訳かしら？」
「そういう事だ。数十人じゃ利かないかもしれない。幾らあんた達でも、自分達よりも十倍近い人数を相手に出来るとは思えないしな」
「入場制限のゲートがあるけど？　流石に無理やり入り込もうとし

たら、セキュリティが反応するわ」
「それらを管理する人間全てに館林の『眼』が使われていたら？
何のために、わざわざ館林が一日中ここのテーマパークにいたと思っているんだ。園内の人間の大半と、顔を合わせる機会は幾らでもあったんだぞ。人目を考慮しなければ、館林は人海戦術であんた達を圧倒出来る。むしろ人目を考慮するのは、あんた達の裏側にいる奴じゃないのか？」
一瞬、悲迦留は顔に罅が入ったかのような表情をしたが、直ぐに消し去ると、
「有難う。これで、坊やと小娘二人だけに集中すれば良い事が分かったわ」
そう言って、ボウガンを友和へと向けた。
ぴたりとその照準が自分の眉間に据えられている事を、友和は痛いぐらいに感じていた。
「どうやら警戒し過ぎたみたいね。十倍近い人数？　確かにそれぐらいの数の差があれば押し切られるだろうけれど、受けて立つ方も同じぐらいの数がいたらどうかしら」
悲迦留がそう言って指を鳴らした。すると、ホールの陰や観客席側から黒服の男達がぞろぞろと現れた。その数はざっと百人はいるだろうか。全員が全員、黒光りする拳銃を手にしていた。
「この国は法治国家だと思ってたけどな……」
悪態をつくように言う友和。
本物の銃口を、しかも無数に突き付けられている状況に冷や汗が浮かぶ。膝が笑い出さないのが不思議なぐらいだ。
「それは表向きの世界よ。裏では、こんな事が起きてるの。知らなかったでしょ」
友和とは逆に快活に言ってみせる悲迦留。
「ついでに教えてあげるけど、この五倍の数をテーマパークの外に配置しているわ。それに道路封鎖も始まっている。あなたを乗せてきたタクシーの運転手も、さぞ驚いてる事でしょうね」

友和は思わず舌打ちをした。悲迦留達は友和がサクラジョイワールドに来た事を既に知っていたのだ。
「今やここは陸の孤島という訳。時間稼ぎをして外からの応援を待つっていうのは悪くはなかったけれど、残念だったわね。……せめて、楽に死なせてあげるから」
そして、悲迦留が黒服達に指示を飛ばした。
黒服達は頷くと、友和を包囲する圏内を狭めてきた。
さゆの言葉を意識しているのか、一気に友和を押さえ付けようとはしない。だが、確実にじりじりと友和との距離を縮めてくる。
友和は拳にした両の手を胸の辺りで構えたまま、周囲に目線を走らせる。
幸い、連中は友和が隻眼という事でさゆの『眼』の力が及んでいないと認識している。それならば、その力で虚を突いて動揺を起こさせるのも可能か。
確かさゆは、痛みの鈍化と筋力の強化を施したと言っていたが、それがどの程度のものなのか、友和自身良く分からない。だが、今は迷うよりも一瞬の隙を狙う事が先決だ。
瞬間、友和は気配の波を感じた。
微風が身体を撫で、友和はそれを受け入れるように体勢を移動させる。すると、友和が避けた軌道を掠めるように、背後に忍び寄っていた黒服の一人が振り下ろした警棒を間一髪で避けていた。
黒服は勢い余って前のめりになり、亜鉛質の警棒が床に当たって青白い火花が散らせる。
友和からは見えない位置からの打撃だったので黒服は慢心していたのだろうか、自分の失態に驚いた様子で、すぐさま振り返って友和の姿を探した。
「馬鹿、下がれ！」
真伏から激しい叱責の声が飛んだが、黒服はそれが自分に向けられたとは気付かなかったようだ。そして、その場で独楽のように旋回した友和の右足の踵に顎を蹴り抜かれ、ぎゅるんと宙で一回転し

た後、コンクリートの床に叩き付けられた。
この間、僅か一秒。
黒服は背中を強打し、コンクリートの上でぴくぴくと痙攣している。
奇妙な静寂が訪れ、その直ぐ後に黒服達から猛烈な怒気が上がった。
観客席にいる黒服達が確実に友和へと拳銃を向ける。
百近い銃口を一斉に向けられて尚、友和は自分の身に何が起きたのか理解出来なかった。だが、全身の細部にまで神経が行き届き、そこからあらゆる方面に対してレーダーを張り巡らしているようなそんな感覚があった。
そして、友和は――風を読んだ。
不意に顔を左に背けた。一瞬後、友和の顔があった所を銃弾が空気を裂きながら通り過ぎて行った。サイレンサーをしているのだろう、玩具みたいな「パン！」という音が後から聞こえた。
友和は、――更に風を読む。
その場から左にサイドステップ。コンマ数秒前にいた所を銃弾が過ぎ去り、コンクリートにめり込んだ。
友和は一番近くにいた黒服へと駆ける。
黒服は驚いた顔をしたが、直ぐに手にしている拳銃を友和に向けた。
友和はその黒い銃口の先を身体から巧みに逸らしながら、黒服に急接近。この時、友和は一瞬屈んだ。銃弾が友和の頭上を数発通過。膝を引き伸ばした力を利用し、下から斜め上への移動を行い黒服の意表を突く。
黒服が拳銃の引き金を引き絞るよりも早く、友和は左手の上腕部を縦にし、拳銃を外へと払う。黒服が引き金を絞る。大きく逸らされた拳銃の銃口は、観客席側へと向けられ、放たれた銃弾がそこにいた一人の黒服の腕に当たった。
喧騒と悲鳴が同時に起こった。

味方を撃った事に動転している黒服の腕を取ると、友和はまるで曲芸のような動きを行って捻り上げた。
黒服は堪らず声を上げ、両膝を床に付けた。
身長で十センチ以上、体重は軽く二十キロは違うだろうその黒服が、まるで子ども扱いだった。
友和は身体の深奥から湧き上がる高揚によって顔を火照らせながらも、冷徹な眼で黒服達を見回した。
その時、物凄い気配を感じてその方を見ると、真伏がゆらりとこちらに向かって来るのが分かった。虎か熊を思わせる圧倒的な威圧感をまるで靄のように立ち昇らせている。
表情は穏やかだったが、ブロック塀さえ噛み砕けそうな大きく白い歯が、獰猛なまでに覗いていた。
友和は組み伏せている黒服の首の後ろに手刀を落とした。
途端に掴んでいる黒服の腕から力の一切が消失し、友和が手を放すとその場に崩れ落ちた。
友和は再度周囲の気配を感知した後、黒服達の銃撃が一旦止んだ事を察し、真伏と対峙した。
真伏も無言のまま、グローブのような手を拳へと変える。
その時、
「う、動くな！」
ヒステリックな声が起こり、友和が振り返った先にはさゆの頭にボウガンを突き付け、いや半ば矢の先を突き刺している悲迦留の姿があった。
さゆの右のこめかみあたりから、赤い血が一筋滴り落ちて行く。
「とんだヒーローの登場だわ。まさか、あなたの存在自体がブラフだったなんてね。私の鼻を欺いていたとは、一体何時から館林さゆの人形になったの？」
悲迦留はさゆの妖術に対する自分の推測が外れた事にショックを受けたのか、悔しそうに顔を引き攣らせている。対する友和も、自分の身に紛れもない変化が起きた事を自覚している。

だが、心は不思議と平静を保っていた。
見えない筈の右の眼がまるで冷たく燃え盛る炎のようで、友和に熱い力と透徹とした理知を齎していた。
「人形だって？　冗談だろ。これは俺の意思だ。そういうお前こそ、まさに悪役その者だぜ」
「悪役ですって？　結構よ！　私の悲願を叶えるためには、どんな事だってするわ！」
「悲迦留、元々お前は山の神の血筋なんだろう。昔は人々に崇められていただろうに、よくもそこまで堕ちたものだな」
友和の言葉は相当悲迦留の痛い所を突いたのだろう。
悲迦留の顔が蒼白になり、眦が引き裂けそうなぐらいに吊り上った。双の眼が血で赤く染まる。
「黙れ小僧が！　山を追われて野に下って後、代々人間に仕えるしか生きられなかった苦しさを、今の平穏な世に生きるお前が理解出来るか！」
「……ああ、ちっとも理解したくはないな。俺は、強く生きると誓ったんだ。お前みたいに過去に囚われて、自分を見失ってる奴には言われたくない」
「小僧が！」
さゆに向けられていたボウガンが、瞬時に友和へと向けられた。
矢が自分の眉間に据えられているのを友和は理解し、再度風を読もうとする。
だが、この時友和は新たに複数の気配を上空に感じていた。
思わず見上げた夜空には、何も見えなかった。
曇天の夜空が、全く見えないのだ。
いや、よくよく眼を凝らすと複数の光点が見えた。
それは赤く、対になっていた。
そして、それら（・・・）が次々と舞い降りて来た。
友和は、さゆと初めて公園で出会った時、迫り来る彼女を見て海洋性哺乳類の覇者であるシャチと例えたのだが、シャチの真の怖ろ

しさは連携の取れた集団行動にあったのだ。
それら（・・・）が、力強いドルフィンキックでみるみる降下して来て、唖然としている黒服達の頭上に覆い被さる。瞬間、黒服達はそれら（・・・）に軽々と掴み上げられ、まるで打ち上げロケットを背中に括り付けているかのように、次々と空へと急上昇して行った。
あまりに非日常的で、まるで前衛映画のワンシーンを見ているかのようだったが、地上数十メートルの高さからそれら（・・・）に手を離され、落下して落下して――当然のようにホールのコンクリート面に打ち付けられた黒服が、口をぱくぱくさせながら壊れた人形の如く転がったところを見ると、紛れもない現実だった。
ぐしっぐしゃぐしゃっと、とまるで熟した柿が地に落ちるように、黒服達が空から降って来る。
地を這うような呻き声が溢れ返り、ありえない角度に曲がった手足で死に掛けの芋虫のような様相を呈している黒服達のあまりの凄惨さに、友和は自分の首から下を見ないようにした。
それら（・・・）の手から逃れようと黒服の一人が手当たり次第に拳銃を発砲するが、それら（・・・）を打ち落とすどころか味方の黒服に当たる始末で、ホール内は完全な恐慌状態に陥った。
唯一、真伏にだけは襲い掛かり難いのか、まるで隙を窺うかのように頭上でぐるぐると回遊行動を行うそれら（・・・）。
と、それまで自意識が散歩していたような顔で放心していた悲迦留が我に帰り、友和に向けていたボウガンの矢を放とうとする。当然起こったこの事態が、たった一本の矢で覆ると本気で思っているかのような必死な顔で。
だが、それよりも一瞬早く、三つの影が素早く空中から降下して来て、一つの影が悲迦留のボウガンを叩き落し、もう一つの影がさゆを拘束しているロープをナイフで切り、最後の影が悲迦留を助けようと迫る真伏を牽制した。
さゆを照らすスポットライトはそのままだったので、三つの影の

姿が判明したのだが、それを見た友和は思わず声を上げてしまった。
スポットライトを燦燦(さんさん)と浴びて、地上より少し浮き上がっている三つの影は、凡そ一時間前に友和が駅で別れた筈の江藤、崎山、千倉だったのだ。
「よう。元気か？」
ボウガンを遠くに蹴飛ばして江藤が言う。
「まるで鳩が豆機関銃を食らったみたいな顔だな、宇木」
油断なくナイフを身構えている千倉がにやりと笑った。
「全く。お前ら二人とも、俺にばかり危険な役を任せやがって……」
崎山が、真伏と対峙しながら緊張感を漲らせて言う。
「そういう役目なんだよお前。俺らのポジション的に」
「良いじゃないか。同じ筋肉同士、馬が合うかもしれないだろ？」
江藤と千倉が軽口を叩きながら、素早く崎山の両脇に控えた。三対一で、真伏と対峙する。
「お前ら……、あ、館林は！」
突然の事に友和も反応が遅れたが、拘束が解かれたさゆを悲迦留が放っておく訳がない。慌ててさゆの方に視線を向けると、更に二つの影――保険医と、何とクラス担任の相坂が悲迦留とさゆとの間にいた。
「保険の先生に、相坂？」
「こらぁ！　相坂先生だろう、宇木！」
間違いない、この何とも言えない面倒臭さは相坂だ。
友和が思わずうんざりした顔になると、相坂の横にいる保険医が口許に手を遣って笑い、
「相坂センセイ、お説教は後にして下さいね。――さゆ様。この地に住まいし貴女様の眷属(けんぞく)、ここに参上仕りました」
厳かにそう告げると、さゆの両眼を覆っている布を解いた。
瞼を閉じたさゆの素顔が露わになる。
さゆが、ゆっくりと双眸を開けた。
友和は、思わず息を呑んだ。

さゆの両の眼が、紅く紅く、光を帯びていたのだ。

彼女の真実

「よく来てくれたわ。私の従者達」
さゆが、女王然とした表情で静かに告げた。
「血の命(めい)に従ったまでのこと。身命を賭して、貴女様を御守りする所存でございます」
相坂が片膝をついて頭を垂れる。
そんな相坂とは対照的に、保険医がふふふと笑う。
「相坂センセイってば、ついさっき目覚めたばかりなのに、言う事やる事が大仰じゃありません？　もしかして、そういうの好きなんですか？」
『センセイ』の言い方のアクセントが微妙におかしくて、相坂は思わず保険医を睨んだ。
「ど、どういう事……館林さゆの眷属ですって……それにお前達、空を飛んでいる？　……」
「違う。夜を泳ぐのよ、私達は。もういい加減、飛天夜魔だとかいう呼び名、止めてもらおうかしら。……そうね、今ここで宣誓するわ。――私は、私達はナイトフィッシュ（夜の魚）。夜空の大海を舞い泳ぐ精」
決然と言い放ったさゆが、保険医と相坂の間を通って悲迦留と対峙する。
身長差は歴然としていたが、小柄なさゆの全身からは統率者たるに相応しい威厳と覇気が漲っており、完全に悲迦留を圧倒していた。
思わず後退り、それを悔いるように悲迦留は歯噛みをした。
「お前は、いや狛達はずっと勘違いをしていたのよ。私の事をね」
「何を言い出すのよ……」
「正確に言えば私のもう一つの力、お前は人心を操る妖術だと思っていたけれど、これは妖術でも何でもない。私の血の盟約に従う筈の者達を、人から眷属として目覚めさせる力なのよ。――見なさい。

この場にいる赤眼の者達、そしてお前の頭上に浮かぶ者達を。彼らは全て、私の意のままに動く眷属達。その数は、凡そ百というところかしら。……つまり、お前の、いやその後ろにいる黒幕の思惑は外れたという訳。大方無尽蔵に投票数を得られるとか、政治に利用しようとかいう魂胆だろうけれど、無理な話ね」

「……何故、何で真実を知らせなかった！　わ、私は、お前の虚言にずっと翻弄されていたというの！」

「お前と、狛と同じ事よ。大神は人の手により山を追われ、狛とした人に飼われた。私も本来ならば忌まわしき存在として人によって狩り尽くされなければならなかったのだろうけど、人を操るという偽りの術を広げる事で防護線を張ったのよ。利用価値があると睨む者達が必ず現れて、互いに牽制し合うと踏んだから。……お陰で、私は今まで生き延びる事が出来た。そして、探し出す事が出来た」

「探す？　何をだ？」

「分からない？　この地を、そしてそこに住む者達……そう、私の眷属よ」

ゆっくりと、さゆの眷属がホールに降りて来る。

老若男女を問わない、格好も生活背景もまるで異なる凡そ百名の者達が、さゆの背後に降り立つ。

「この地は、私の眷属の流れにある者が集い、街を築いたのよ。本来ならば、私の目覚めがなくとも夜を舞う事が出来たのだろうけれど、己の力を忌避する事で異端視する目を逃れ、人として暮らし、時が経つと共にその力を薄れさせた。今では、精々が夢の中で空を飛ぶ事ぐらいでしょう。……私も、本当なら悪戯に彼ら全てを呼び起こすつもりはなかった。――でも」

さゆはそこで一旦言葉を切った後に、悲迦留を、その背後にいる者共をきつく見据え、

「私は、――もう逃げないと決めたから」

そう言い切った直後、さゆの背後に控える眷属達から鬨（とき）の声が上がった。

唸りを上げて天を目指さんとするその声は、今にも夜空を覆う雲すら吹き飛ばしてしまいそうだった。
「館林……お前……」
呟いた友和の裾が急に引っ張られ、横を見るとそこには見知らぬ少年が立っていた。
少年は友和を見上げていたが、にこっと屈託なく笑ってから、
「お兄ちゃん、今日は眠たくないの？」
と聞いてきた。
あ！　と友和は声を上げた。
思い出した。この目の前にいる少年は、友和がさゆと初めて出会った翌日に、寝不足でふらつきながら近付いていった集団登校中の小学生の一団にいたのだ。確か、ランドセルにリコーダーを挿していた気がする。
「き、君も、館林の、眷属って奴なのか？」
訊ねると少年は嬉しそうに首を縦に振って、
「さゆ様に、ごほーこーするの」
と言った。
小難しい言葉を一生懸命に話すこの少年に、友和は好感を覚えた。
「それなら、なんであっちに行かないんだ。さゆ様がいるんだろ？」
少年にとって絶対の存在であるさゆを『館林』と呼び捨てにする事を気にしてか、友和がそう言うと少年はぷるぷると首を横に振り、
「だって、お兄ちゃん僕たちと似てるのに、弱そうなんだもん。こっち来ちゃった」
と、言った。そして、健気にも友和を守るように前に立つ。
「お、俺が、似てる？」
友和は少年の後頭部とさゆとさゆの後ろに勢揃いしている眷属を見比べながら言った。
その時、さゆの紅に輝く眼が友和に向けられた。
「宇木君。あなたのその右眼、私の眷属のものだわ」
さゆの凛とした声がホール内に響く。

「……と、父さんの眼が？」
「……そう、あなたのお父様のものだったのね……。良かった、筋肉を強化したなんて嘘で、あなたを殺されずに済んだわ」
「……あの時のやつが嘘だったのか」
友和は昨夜のさゆとの出来事を思い出す。
「そうでもしなければ、宇木君は納まらなかったでしょ。因みに、宇木君が感じている力は、眷属の力ともう一つ、あなた自身の力よ。今の私は、移植された眷属の血肉を通して、宇木君が本来持っている力を呼び起こす事が出来るのよ」
「そ、そうなのか……」
思わず冷や汗を浮かべる友和。もし、さゆに父の眼を通して力を呼び起こして貰えなければ、今頃は本当に殺されているところだったのだ。
「今まであなたの右眼からは眷属の――波長のようなものを一切感じなかった。でも、今は違う。小さいけれど、とても澄んだものを感じる。……どうやら、宇木君が納得する形でお父様に会えたみたいね」
「ああ、伝えたかった事は、全部言ってきた」
「……そう。それは良かったわ。私も、宇木君との約束を果たせたし」
「約束？　あ、あの伝言か。だけど、偶然にしては出来過ぎ……そうか、だからあいつらが駅にいたのか……」
すると、江藤、崎山、千倉のトリオがぐっと親指を突き出して見せる。真伏と睨み合っている状況なのに余裕があるな、と友和は感心してしまった。
さゆが、悲迦留に向き直る。
「さてと、お前はこれからどうするのかしら？　今ここで尻尾を巻いて逃げるのなら、もう金輪際私に関わろうとしないのなら、見逃すわよ。もし、それでも私を捕らえようとするのなら」
「黙れ！　黙れ黙れ！　尻尾を巻いて逃げる？　見逃すですって！

？　ふざけるのも大概にしなさいよ！　私は、私の一族はお前の謀（はかりごと）にずっと振り回されていたというの！？　そんな事、絶対に、絶対に許せない！」

叫んだ悲迦留がさゆを睨み据えながら、ぶるぶると震え始める。

そして――

るるるぅううぅぉぉおおおおおおおおおおん！

悲迦留が天を仰いで猛り吼えた刹那、彼女の身体が一回り膨れ上がったように見え、次の瞬間には全身を銀色の体毛に覆われた獣が、スーツを引き裂いて現れた。

四つの足でホールに立つその獣は、長大な尾を一打ちすると、さゆ達に向かって咆号（ほうごう）する。

びりびりと空気を震わすその声に、さゆの眷属の幾人かが思わず尻餅をついた。友和の前にいる少年が、思わず「ひっ！」と悲鳴を上げる。

ただ、さゆは全く動じる事なく、巨大な獣に成り果てた悲迦留を爛々（らんらん）と輝く紅の瞳で凝視する。

「……人の姿を捨てたわね。おそらくは二度と人の姿には戻れないだろうに、それがお前の決断という訳かしら。……分かったわ。望み通りに今からお前を、殺」

「待て――」

さゆがこの場にいる全ての眷属に、暗くどろりとした明確な殺意の伝播を行うとした瞬間、それまでトリオと睨み合いを続けていた真伏が言った。

途端に、ホール内は水を打ったような静けさに包まれた。

真伏が、手にしていた物をぐしゃりと握り潰すと、無造作に捨てた。それは小型のピンマイクだった。

真伏は更にそのピンマイクを踏み付けて粉々にすると、銀色の獣と化した悲迦留へと歩いて行った。

江藤も、崎山も千倉も、指一本も動かせずに真伏が横を通り過ぎるのを見ている他なかった。
真伏は悲迦留の前まで来ると、銀狼の顔に向かって言った。
「御終いだよ、悲迦留。さっき、連絡が入った。館林さゆの件はこれで打ち切りだとさ。ついでに、館林さゆの能力を偽って報告していた咎とやらで、俺達を処分するんだとよ。まぁ、トカゲの尻尾切りってやつだな」
悲迦留は、いや一匹の銀狼は、真伏の話を信じられないとでも言いたげに、眼を丸くする。それまでいきり立つように天を向いていた尾が、床についていた。
「意気揚々と黒服連中を連れ出したのは良いが、眷属か？　あいつらにやられて御覧の有様だ。それに、生き残ってる連中にはもうこの話は行ってるだろうし、正直今の館林さゆと殺り合ったところで、何の得にもなりゃしねえ。むしろ、今度は俺達が追われる番だ」
ぐるる、と狼の口からは唸り声が発せられるが、それは酷く戸惑いを覚えている様子だった。
「もう、終わりにしようぜ。悲迦留様――」
そう告げると、真伏はスーツの内ポケットから黒いハンカチのような物を取り出し、それで銀狼の顔を撫でた。
銀狼は困惑したように顔を仰け反らせるが、急に力を失ったようにぐらりと頭を擡げ、そのまま崩れ落ちた。
「あんた一体、何をしたんだ！」
思わず声を荒げる友和。今の二人の遣り取りのみでしか悲迦留と真伏の関係を推察する事が出来なかったが、それでも何らかの絆や繋がりを感じられたのだ。
「兄ちゃんと同じさ。まあ、こいつは胡椒じゃなくて特性の睡眠薬だけどな。元々は館林さゆに使う筈だったんだが、まさかこうなるとはな。それにしても、相変わらず甘いな兄ちゃん。こんな時に悲迦留様の心配かい？」
「ち、違う。でも、その女、あんたの大切な人なんだろ？」

「嬉しい事言ってくれるじゃねえかよ。……そうだな、やっぱり大切なんだろうな。俺は、悲迦留様とは違って雑種みてえなもんだから、大神の血を濃くお引きになっているこの方への憧れが強いんだろうな。しかも、本当に大神になっちまって……」
そう言うと、真伏はホールの上に横たわる銀狼を片腕一本で難無く担ぎ上げる。
「こうなったら、悲迦留様には、どんな事をしても生きてもらうしかねえな」
真伏の言葉には、一点の曇りもなかった。
友和は目の前にいる少年を避けて、真伏の前に立った。
さゆは友和に声を掛けようとして、喉まで出掛かった言葉を飲み込んだ。友和はその事に小さく一揖（いちゆう）すると、真伏に向かって、
「あの時、どうしてわざとやられたりしたんだ？」
と、訊ねた。
「はあ？　何時の事だい？」
惚（とぼ）けるように言う真伏。
「あの自販機の前での事だ。あんたなら、館林の攻撃ぐらい避けられたんじゃないのか？」
「買い被り過ぎだぜ、兄ちゃん。俺はあそこでのされた。その事実に変わりはねぇよ」
そう言って破顔する真伏。
友和は、何か言おうとするかのように暫く下を向いた後、
「あんたに蹴っ飛ばされて、良かったよ。痛い授業料だったけど、大切な事を気付かせてくれた」
顔を上げて言った。
すると、真伏の方がきょとんとした顔になり、次の瞬間には腹の底から哄笑した。
「――本当に、兄ちゃんは甘いな。まあ、そんな所にあれが魅（ひ）かれたのかもな」
そう言うと、友和がその言葉の意味を理解するよりも先に、真伏

が通り過ぎて行った。
誰も銀色の狼達を追おうとはせず、遂には夜の闇の中に溶けて消えた。
見上げれば何時の間にか夜空を覆っていた雲が晴れ、浩浩とした満月が優しく淡い冬の月光で下界を照らし出していた。

エピローグ――ワルツは夜空で

あれから十日程経ったある日の夜。
友和は勉強机に向かって明日の予習を行っていた。
ノートにシャーペンの筆跡を軽快に躍らせて行く。
と、力の加減が強かったのか、筆圧が強くて芯の先が折れて、まるで車のブレーキ痕のような跡がノートに残った。
友和はシャーペンを握る手を止めると、消しゴムを取って跡を消しに掛かった。それから、ふと十日前の事を思い出した。
真伏と悲迦留があの場から去った後、さゆは速やかにその場にいた眷属全員に撤収を命じた。友和もさゆに引っ張られるようにして夜空に浮かび上がり、サクラジョイワールドを後にした。園外にいる筈の黒服達からは何の手出しも無かった。真伏達を追ったのか、それともさゆやその眷属には手を出すなとの指示があったのかもしれない。
ともかく、何事もなく郊外から咲倉市中央の上空に来たさゆと友和、そしてさゆの眷属の一団は、それぞれの生活へと戻って行った。途中、保険医から「ナイトフィッシュという名前はどうかと思いますが？」と揶揄半分の指摘が入り、赤面したさゆが命名したのは友和だと暴露したお陰で百人近い眷属達に笑われるという事があったが……。
友和もさゆに送られて帰宅をし、合鍵で玄関を開けた途端に廊下を駆けて来た由季奈がそのまま飛び付いて来た。
由季奈は何か言おうとして、でもそれが言葉にならない事がもどかしいといった様子だったが、全身で喜びを伝えようとしていた。それから、顔を真っ赤にしながら「お、お帰りなさい、お、お兄ちゃん……」と言った。
友和は由季奈の頭をぽんぽんと叩きながら、「ただいま」と応えた。

玄関口には、エプロン姿の亜紀子が立っていた。
友和は彼女に向かって、
「ただいま、母さん」
と言い、亜紀子も、
「お帰りなさい、友和」
と、微笑を浮かべて言った。
その夜は遅くまで親子三人で楽しく語り合った後、友和はベッドに入り、積もり積もった疲労のせいもあり、あっという間に眠りに落ちた。
翌日、目覚めた友和はサクラジョイワールドの屋外ホールのあちこちに転がっていた黒服達の事が気になったが、どう言う訳かニュースや新聞を騒がせるような事は起こらなかった。
この件は真伏と悲迦留の後ろにいるという大物政治家が秘密裏にどうにかしたらしい、と後からさゆに聞かされた。更にさゆが言うには、眷属達には黒服連中をなるべく殺さないようにと徹底させたとの事で、精々が全治半年の骨折、もしくはその程度の怪我で、もし死ぬような事があればそれは黒服が持っていた銃の発砲によるものと断言した。
人間が玩具のように壊され、殺されたと思っていた友和は、さゆが無闇に人殺しをさせなかった事にほっと胸を撫で下ろした。
友和の日常は元通りに、いや少し修正が行われ、急に明るくなった友和にクラス中の生徒が驚きを隠さなかった。だが、江藤、崎山、千倉の三人が積極的に友和とつるむようになり、バカ四天王という何ともなニックネームを与えられるに至っては、クラスメート達も最初からそうだったように友和を受け入れた。
それから数日経った日の事、ある政治家が休養で訪れた山中で大きな野犬に襲われるという事件が起こった。相当大きな犬だったようで、その政治家は両腕の腱を食い千切られるという大怪我を負ったとの事。また、その野犬は見た事もないような銀の体毛をしており、近くに熊もいたという情報が新聞に掲載されていた。

そして、その政治家は半死半生の怪我を負ったとの事で、近く政界から身を引くと記事は締め括られていた。
「寒(さむ)いな……」
　呟いた友和は吐息する。
　電気ストーブで室内を暖めてはいるがそれでも限界があるのか、はいた息が友和の顔の前で白く煙った。
　窓の方を見ると、深海のような夜の闇の向こうではちらちらと白い物が降っていた。
「雪か……。そりゃ、寒いよな」
　友和は席を立つと窓辺に行って、ガラス窓の桟に触れようとした時、いきなり窓の向こう側に人の顔が逆さまの状態で現れた。
「うぉわっ！」
　思わず悲鳴を上げる友和。
　それを見た窓の向こうの顔は、くるりと半回転すると小馬鹿にしたような半眼になる。
　館林さゆだった。
　驚かされた事に対して友和は憤慨した顔してみせるが、さゆは一向に気にした様子もなく、こんこんと窓をノックした。
　友和はそっぽを向いてやると、ノックの音がこんこんからごんごんに変わった。
　ぎょっとして友和が慌てて窓を開け放つ。途端に、真冬の寒風と共に粉雪がちらちらと部屋に入り込んできた。
「寒っ！　館林、寒くないのかよ？」
　友和がそう言うよりも早く、さゆが窓辺から乗り出してきて友和の手を取った。
「はー、温かい」
　そう言って、友和の手を触りまくる。
「つめつめつめ、冷てぇー！」
　叫ぶ友和など一向に気にせずにさゆは笑うと、
「約束したわよね。雪の夜を、一緒に泳ぐって」

そう言って、紅の眼を輝かせる。
「約束したつもりは断じてないぞ」
しかし、友和は断る理由を思い付かなかった。
それまで暗闇だった右眼に光が集約し、そして解き放たれる。
次の瞬間、友和の右眼はさゆと同じ紅の光を宿した。
父親の右眼の移植は成功しなかったが、眷属の力に慣らして行く事で視神経の組織が自ら再生を始め、やがては右眼が見えるようになるとさゆは言った。
そして、
――それまでは、仕方ないからそばにいてあげるわ――
と、横を向きつつ付け足した。

「ほら、早く行くわよ。友和」
「分かったよ、さゆ。でも、せめて缶コーヒーぐらい買わせてくれ」
「勿論、友和のおごりでね」
満面の笑みを浮かべるさゆの手に強引に引かれるようにして、友和は苦笑しながらも粉雪舞い散る夜の空へとその身を躍らせた。

宇木友和が咲倉市に来て、大きく変わった事が二つある。
それはナイトフィッシュとしての力に身体が感化された影響で、夜の空を自力で泳げるようになった事。
そしてもう一つ、宇木友和は、互いの名前を呼び合う異性を得たという事だった。

エピローグ――ワルツは夜空で（後書き）

これにて、『ナイトフィッシュ――ワルツは夜空で』は完結です。
呼んで下さった方、本当に有難うございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6832k/

ナイトフィッシュ――ワルツは夜空で

2010年10月8日14時44分発行